

浄土

monthly
JŌDO

1998 May/June

5.6

合併特大号

経力
特集

[選撰本願念仏集] 奉戴八百年

記念
特集

大本山善導寺民谷隆誠台下御晋山

檀香

応座

選撰本願念佛集

南無阿弥陀佛

第二編

道綽禪師立聖道浄土二門

歸浄土之文

安樂集上云問曰一切衆生

以來應值多佛何因至今仍自

天保五甲午

テレコムしよう。



コミュニケーションの未来へ

日本テレコム

お申し込み、お問い合わせは
お客様センターへどうぞ



0088-82 (無料)

(受付時間) 9:00~23:00 (年中無休)

(インターネットホームページ) <http://www.japan-telecom.co.jp/service/>

国際電話は **0041**、市外電話は **0088** でテレコムしよう。

力集
總特

選撰本願念仏集

撮影
夕力才力邦彦

廬山天台講寺

廬山寺「選擇本願念佛集」



廬山寺町田泰宣管長



本尊の阿弥陀如来及両脇侍坐像

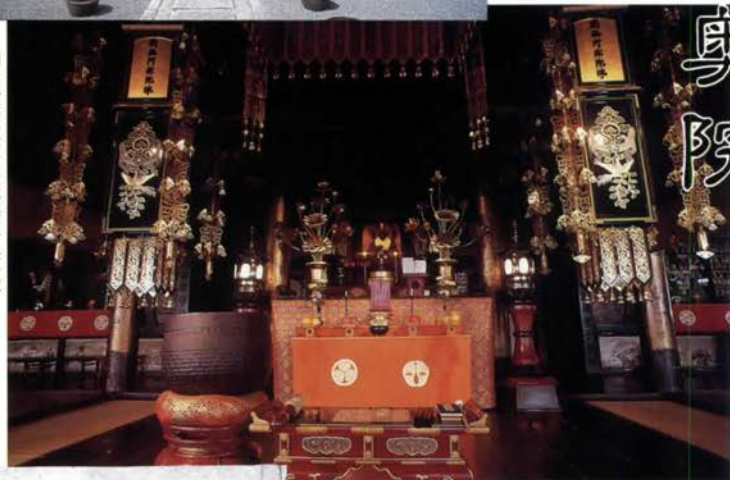
〔選択本願念仏集〕ゆかりの寺々

當麻寺奥院

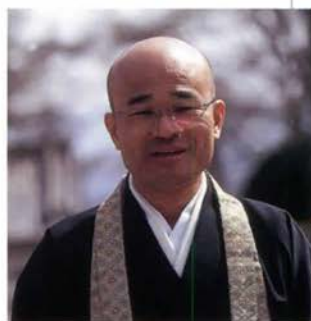
奥院の本堂は法然上人御影堂



御影堂の本尊は法然上人木像



奥院所蔵「選擇本願念仏集」



奥院第六十世川中光教住職

標標本願念仏集

南無阿彌陀佛

往生之業
念佛為先

道線禪師云聖道淨土二門皆聖道也
安樂集上云問曰一而衆生皆有佛性速勸未
應值多佛何目至今仍自輪迴生死不出火宅
答曰依大乘聖教良由不得二種勝法以排生
死是以不出火宅何者為二一謂聖道二謂生

『選擇本願念仏集』ゆかりの寺々

鹿ヶ谷法然院



法然院所蔵『選擇本願念仏集』

法然院本堂



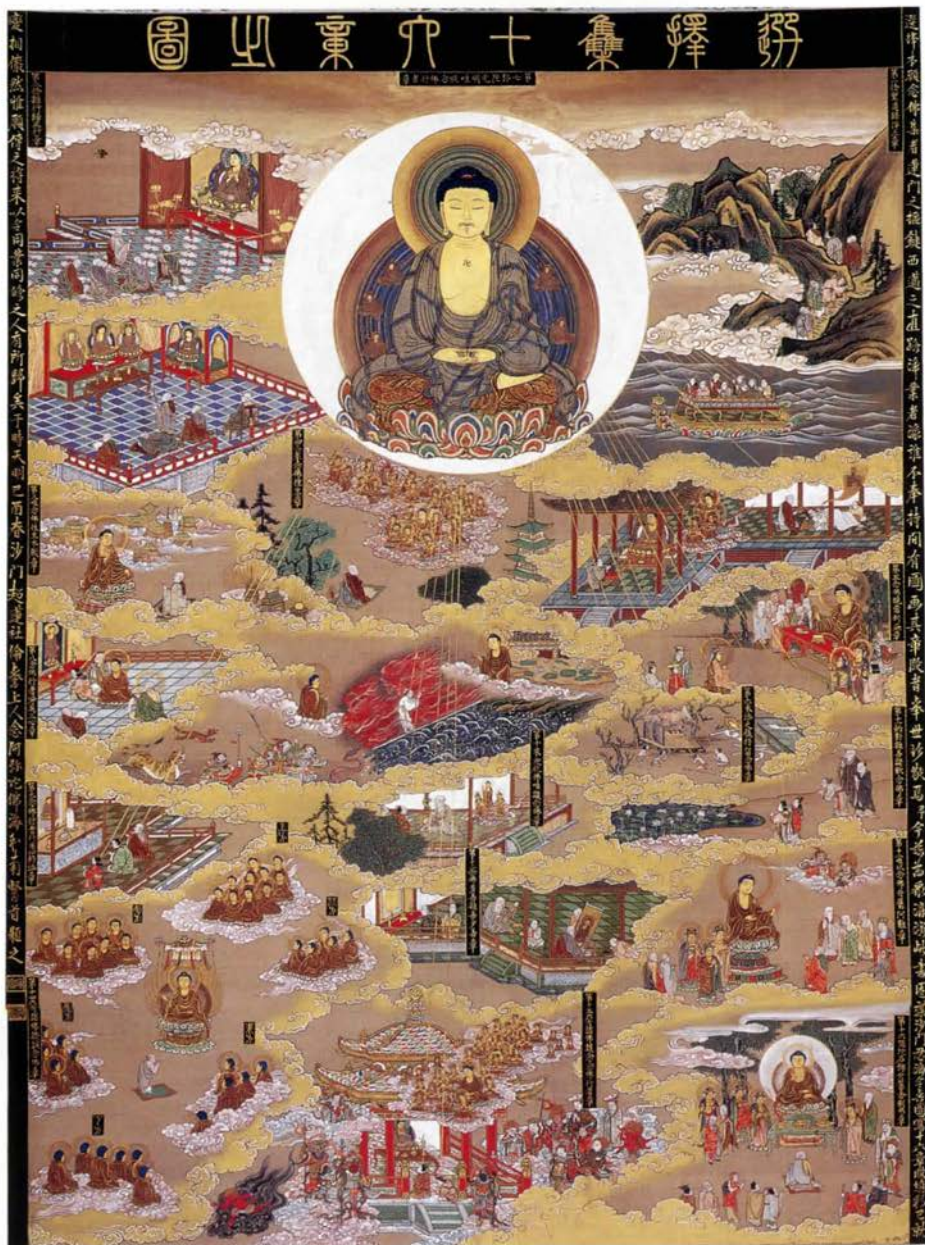
墓地にある法然上人塔



法然院第三十一世梶田真章貫主

經集十六卷之圖

（此圖係由日本京都大谷大學藏經卷之圖）



彩色版・選集十六卷之圖

選沢集十六章之図

正徳甲午季冬近州蒲生日野
高田敬輔題於平安旅寓

新連載

その一・第一～四章

大室了皓

選沢集絵解き物語

選沢本願念仏集は難解な書物であるといわれる。

この絵解き選沢集は

それをわかりやすく説明しようとしたもので、
種々の流布がみられる。

ここでは正徳年間の十六章の図を取り上げてみた。



第一章
阿弥陀様の船に乗ろう。



この絵は、あえきながら山道を上って行く人達と、楽しく船に乗って行く人達を描いています。何を表しているのでしょうか。お釈迦様の時代は今から二千五百年以上も昔のことであって、年と共に世は險惡になり、煩惱は増して、悟りを開く者が無くなってきました。

また今は次のような五つの汚れに満ちた時代です。

- 一、飢饉・疫病・戦争などに悩まされている。
- 二、悪い思想が流行していて、人を悩ましている。
- 三、人の心が煩惱に満たされ、悪徳がはびこっている。
- 四、身も心も、釈尊の時代とは比較にならないほどその資質が劣っている。

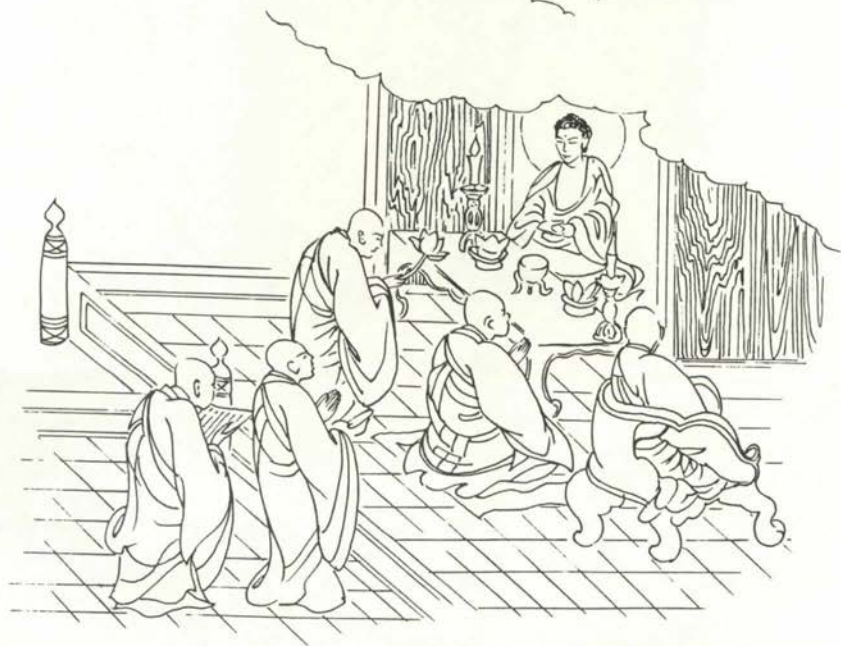
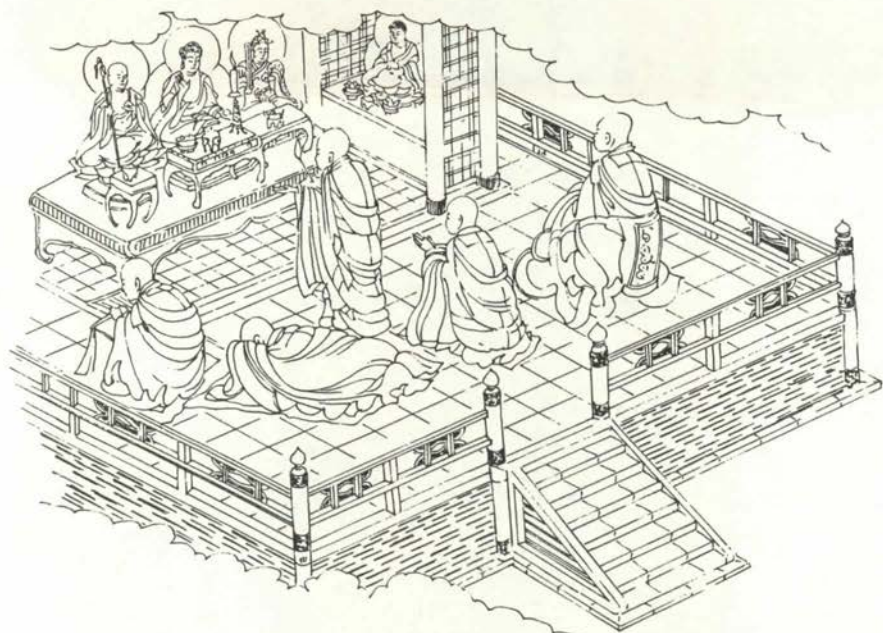
五、正しく丈夫で長生きすることができなくなっている。

従って、今の殆どの人は、その高遠な教えを理解できず、厳しい修行に耐えることができなくなっています。

そのような人のために、厳しい修行をして悟りを自分の力で開こうとする道（聖道門）を捨てて、阿弥陀様のお力にすがり易しい修行の道（浄土門）を私たちに勧めて下さっているのです。

例えば、山坂を自力で歩いて行くのは容易ではないから、阿弥陀様が用意された船に乗り全てをお任せすれば、楽々と目的地に行くことができるぞ、と勧められたのです。





第二章

正しい五つの行に集中する。

さて船に乗せて頂いたら、何をすればよいのでしょうか。

回りの景色に氣を取られたり、岸边に見えるいろいろの仏像を拝んだり、俗世間で言う良いことをしようと心掛け実践することも悪くはないが、阿弥陀様の船の中だから、他のものに氣を移し余計なことはしないで、阿弥陀様の仰せに従って、次の行いに励むべきです。

もし励めば、阿弥陀様は必ず傍について離れずに、私たちのことを思って下さるから心配することなどありません。

この絵を良く見て下さい。

五人のお坊さんが描いてあります。

一番左の人は、お経を読んでいますね。何を読んでいるのでしょうか。浄土の三部経を読んでいるのです。

無量寿経、観無量寿経、阿弥陀経を三部経といいます。

次の人は、正面におられる阿弥陀様を拝んでいます。立ち上がった姿ですが、これから膝と両ひじを床につけ五体投地の礼拝をしようとしています。

つぎの人は、立ち上がって花を手を持ち、阿弥陀様を讃歎供養しています。

次に座っている人は、合掌して専らお念仏を称えているのです。

一番右の人は、手を合わせることもなくじつと阿弥陀様に目を向けています。阿弥陀様のお姿を初めとして、極楽浄土の有様を心に刻み込んでいるようです。

五人のお坊さんは、阿弥陀様の仰せを受けて、読誦・観察・礼拝・称名・讃歎供養の五つの行いに励んでいるのです。

第三章

お念仏を称えなさいと阿弥陀様は仰せになっている。



この絵には、一人のお坊さんが一心に仏様に
向かってお念仏を称えています。前の絵に
いた四人のお坊さんの姿はありません。

どうしたのでしょうか。

先の五つの中で、最も大事なことはお念仏
を称えることです。

他の四つの行いは、これを助けるものだっ
たのです。

それは阿弥陀様の四十八の誓願の中の十八



番目に、

「もし私がさとりを得た後、全ての人がまことの心をおこし、深く信じて往生を願い、十念仏するものが、もし往生できないようなことがあれば、その間誓って仏にならない」とあるからです。

なぜお念仏だけを、本願の中で最も大事な誓願とされたか、それは仏の深い思し召しによるもので、凡夫の推し量れるものではありませんが、あえてみ心を、法然上人のお言葉などからお察しますと、

一、お念仏には、仏の悟りの功德・救いのお力を初め全ての徳がこめられている。

その功德は、他の全ての修行の功德よりも勝れている。

二、お念仏は、何時でも何処でも誰でも勤め易いが、他のものは勤めることが困難である。

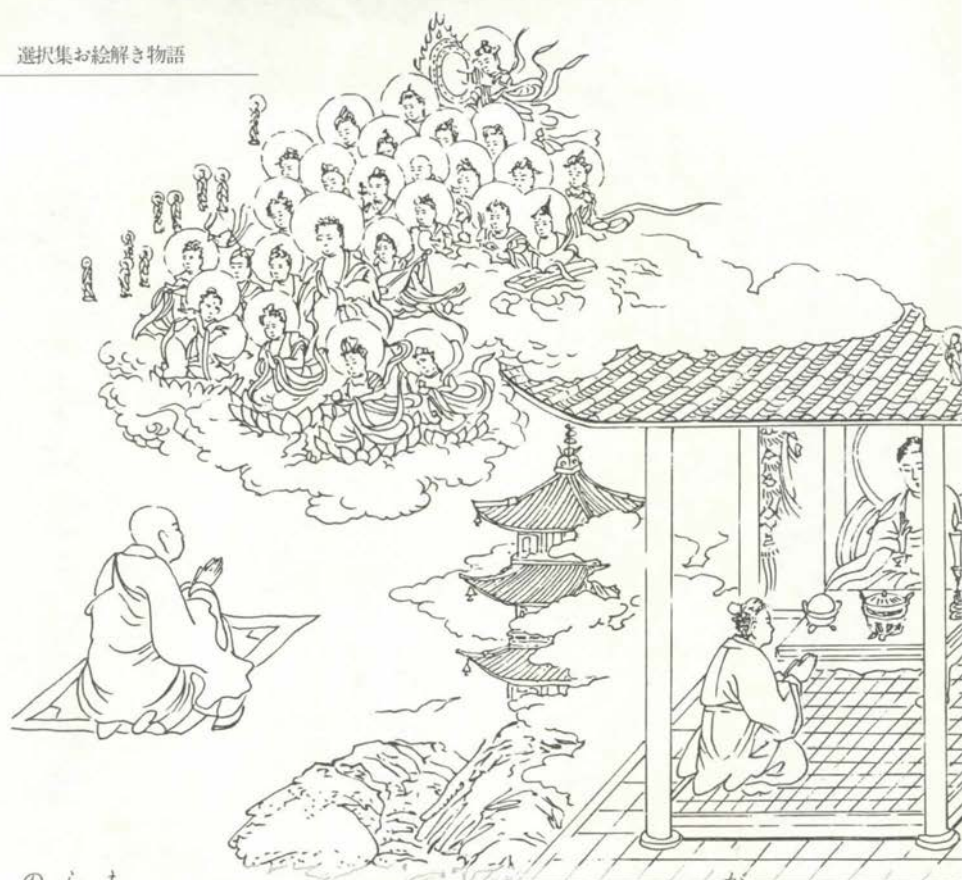
として、阿弥陀様は他の行を捨てて、お念仏だけをお選びになったのです。



第四章

お念仏を称える人は誰でも。

この絵には、向かって左に髪を剃り落とし家の外で一心にお念仏を称えている人、中央には髪飾りも付けて、お堂の中で仏様に向かってお念仏を称えている人。右には横になって何もできないがお念仏だけ称えている人が描かれています。



何を表しているのでしょうか。

お念仏を称える人を、三種類に分けることができるからです。

一、雑縁の多い家を捨て、愛欲をも捨てて出家し、ひたすら阿弥陀仏を念じ、いろいろの善き行いをして、浄土に生まれたいと願う人。

二、出家はしないが、真実の心で浄土に生まれたいと願い、先の人ほどの善き行いとはできなくとも、お堂を建てたり、仏像を作る。そして心身を清め、規律を保ってお念仏に励む人。

三、いろいろの善き行いとはできないが、真実の心をもって、菩提心を起こし少なくとも十度の念仏を称え、浄土に生まれたいと願う人。

以上の三種類の人がいて、三番目の人は最も劣っているように思えますが、阿弥陀様からご覧になれば、みんな同じく救って下さるのです。

「選択集十六章之図」について

新井俊定

「選択集」の古いといわれる写本や版本はみな漢文体で書かれています。法然の伝記の中にははじめは仮名で書かれたという説もあります。また浄土真宗のほうでは親鸞が書き写されたという片仮名書きのいわゆる延べ書き選択集が伝えられています。江戸時代に入り、寛文六（1966）年に「ひらがな選択集」がつくられています。正徳四（1714）年には十六章を一幅の絵図にまとめた「選択集十六之図」が高田敬輔により版行されました。また延享元（1744）年には、西山浄土宗の専阿と隠空が「選択集」を平仮名にし、さらに絵図が付された「通俗絵図選択集」が刊行されました。同じ年に江戸では関通が「和字選択集」をつくられています。この本も平仮名で書かれ、各章ごとにその意をうけて忍海という人が描いた絵図が挿入されています。これらはいずれも「選択集」を多くの人々に知ってもらおうとする意からでたものであることはいふまでもありません。

なかでも、「選択集」の心を一軸の図絵にあらわした「選択集十六之図」は珍しいものといえます。この図絵は正徳四（1714）年、高田敬輔（1674-1755）によって書かれました。敬輔は現在の滋賀県蒲生郡日野町に生まれました。幼少より絵

を好み、家業を手伝いながら独学で絵を学び、その後京都の狩野派の画法を学び、さらに僧古欄の勧めにより雪舟の画法も学び、高田派といわれる独自の画風を生み出しました。敬輔は信仰心も厚く仏教に関心が深く、華嚴宗鳳潭、僧叡、浄土宗の義山などに仏教を学んだといわれています。正徳三年に「選択集十六章之図」を描き、それを義山に褒められて翌年、版に起こしたと伝えられています。いわゆる版に彫られたものですから、最初は白黒の彩色のないものであったと思いますが、着色したものも現存しています。それは後になって出てきたものと思われます。

図柄は上段中央に阿弥陀如来がおかれ、(「選択集」第七章弥陀の光明は唯念仏の行者を摂し給うの文を表す) 如来からは、光明を表した筋が念仏の衆生にそそがれています。右上が第一章で右から左にうねるように進み、最後の十六章は右下で終わっています。図の最下段には敬輔の識語(この図を制作した意図等が述べられている)がおかれています。そこには「耳に聞き、目で見ることはその人の心を動かすものではなく、自分に自分で実際にものを見るときが一番人の心を動かしやすく、それも絵画が最もよく人の心を動かすものである」と書かれています。

後年、おそらくこの絵図を解説したと思われるものが書かれている。「選択集十六章図説」(延享二年)とこれを参考にして書かれた「選択集十六章図略解」(明治二十三年、堀尾貫務述)です。

大正大学講師

(坂野泰巨編「選択集入門——選択集十六章之図」平成10年2月刊を参照)

総力特集 選択本願念仏集 奉戴八百年

カラーグラビア『選択本願念仏集』ゆかりの寺……………写真=タカオカ邦彦	3
新連載 選択集絵解き物語……………大室了皓	7
選択集十六章之図について……………新井俊定	16
目次……………	18
●選択のこころ	
現代と選択集の心……………民谷隆誠	20
選択私年号……………寺内大吉	26
『選択本願念仏集』撰述の背景……………大橋俊雄	30
●選択集をめぐる人物	
選択集執筆上人のこと……………深貝慈孝	37
九條兼実公について……………間川彰道	42
●選択集との出会い	
『選択集』と私……………松原泰道	47
『選択集』と私——わが青春と服部教室……………袖山榮眞	51
『選択集』と私……………近藤徹稱	56
中里介山『法然』より……………	61
『選択本願念仏集』ゆかりの寺々……………編集部	62
解説『選択集』の原本を求めて……………林田康順	72
法然上人の善導大師観……………高橋弘次	76
『選択』とは何か?……………ひろさちや	82
逆転の発想——『選択集』の示すもの……………梶村 昇	86
『選択集』と日本宗教におけるその影響……………アルフレッド・ブルーム	92
追悼 松島定宣上人 詩——念仏を称える人は白蓮華……………	100

記念特集 大本山善導寺 民谷隆誠台下御晋山

カラーグラビア 大本山善導寺……………写真・タカオカ邦彦	103
御挨拶……………民谷隆誠	108
念仏の声、常にこだます……………橋田邦俊	110
寺院紀行 大本山善導寺……………真山 剛	112
聖光上人伝聞考……………行正明弘	124
コラム……………服部順空	136
連載 無明妙……………秦 恒平	138
Jフォーラム……………	145
Jクイズ……………	152
事務局便り……………	153
編集後記……………	154

表紙題字=浄土門主 中村康隆猥下

アートディレクション=近藤十四郎

協力=迦陵頻伽舎

総力特集

「選択本願念仏集」奉戴八百年

選択集の こころ

◆選択のころ

現代と選択集の心

民谷隆誠

昭和三十八年三月二十九日、八十五歳の老婆が往生の素懷を遂げられた。この老婆の一生は波乱に満ちた人生であった。明治三十年代片田舎の農家に生まれ畑仕事に明け暮れ、小学校時代兄弟をみながらの毎日であった。

二十歳過ぎ縁あつて魚屋と会席料理を営む家に嫁いできた。人口僅かな町ではあるが家の前には魚の競市場があつた。熊野直入の鯖市が行われていた。

親も夫も酒好きで、夫を頭に四人の弟が同居していた。次男は昭和十三年日中戦争で英霊となった。

三男は材木関係の仕事をしていた。四男は父親譲りの酒好き、五男は障害をもっていた。息子は年頃、東京から素晴らしい嫁をもらった。この老婆も一安心、男勝りの嫁は、女将と謳われる程の働きもので、竹を割ったような性格、やはり江戸っ子根性である。

婆さんは親なき後も夫の四人の弟を見て行かねばならなかった。息子はフランス料理の達人と言われる器量をもっていた。この息子も酒を楽しみ酒に明け暮れた。然し包丁一本で暮らせるだけの妙技を持っていた。

しかし夫の弟達のために苦勞が絶えなかつ

た。三男は材木関係の仕事で不慮な亡くなり方をした。四男は嫁を娶り一女一男の子宝に恵まれたが酒にはどうしても溺れてしまった。酒に吞まれると器物破損はする、妻に暴力を奮うという繰返してあった。或る日夕食を楽しく一家団欒、揚げ物を食しながら酒がすすむに連れて何時もの荒れ模様。どうしたことかフライパンに手がかり油に火、消し止める間もなく忽ち大火傷、病院で手術をしたが手遅れで夫は亡くなった。妻は心の片隅で助かったと思つたようである。中陰中の法話を聞きながら正直に告白した。

そして半年後の二月下旬、息子は友達から伊吹山が雪のため車をもって迎えにこいという連絡で、取り敢えず助けに走った。その夜中、助けに行つた筈の息子が遺体となつて戻ってきた。気が狂わんばかり、このことによつて夫への深い懺悔、人生最大の悲哀に顛倒した。息子行年二十四歳であつた。毎日真剣なお念仏と墓参りである。

その後間もなく娘も嫁いだ。しかし二人の親となつた娘も病のために先立つていった。

老婆は孫・曾孫まで見てゆかねばならなかつた。

息子の嫁は肝つ玉があさんであつた。二男三女の子宝に恵まれたが、五十一歳にして脳内出血で急死した。老婆の頭上に振懸つた苦惱は言い表わせるものでない。何としてでも五人の孫を一人前になるまではと決意した。

昭和二十三年三月末、二十年振りに開筵された五重相伝の会座に付いた。老婆に残つた日課念仏、耳底に納めて実行した。その内孫娘が嫁ぐ様になつた老婆は安堵した。苦勞の甲斐あつて先立つた嫁にもどうにか申し訳けたつと喜んだ。八十五歳の正月を迎えることができた。長年の心身の苦勞と老いは隠しきれない体調の崩れを感じた。

毎月二十四日は嫁の月忌、時三月二十四日春彼岸中朝早くお参りした。住職三年目のこと……。

「和尚さん、和尚さん」二階から呼び声

孫息子がおろおろ傍に来て、

「和尚さん早よ呼んでこい」

「和尚さんは死んでからですがな（孫息子）」

「何をおっしゃるか」「早よ行きましよう」

二階に昇ると老婆、ちゃんと頭北面西

「和尚さん、今日は待つてましたで、嫁の命

日、そしてお彼岸ですやろ。私にお念仏授けて下さい」

「おう、それはそれは、おばあさん手をだしなさい」

おばあさんの両手をしっかりと握りしめて右側から日常勤行式を勤め、最後にお十念をていねいに称えた。握った手を静かに放すと、

「おうきに」

骨髓に凍み入るような悦びの声であった。

「おうきに。これで満足ですわ」

「ほらあそこ見とくなはれ。きれいな花が咲いてますやろ」

「それそこに仏様がたくさんいられてますやろ」

「わたしや死にまへんで……」

「いいところへ往きますのや」

「孫達に、泣くな、泣くな、泣くのとちがう」

「こんな結構なことがありますか」

「南無阿弥陀仏、南無阿弥陀仏……」

この事があつて三月二十九日正后頃、念仏相続の間に大往生を遂げられた。

長々と一老婆の往生をそのまゝの言葉で申上げたのは他でもない。この事実が現代もなおあることは、法然上人の信心であると申上げ、『選択集』の心と申上げるものである。

この老婆は学者、財産家、有名人ではない。苦勞の塊のような人生であつた。

『選択集』巻頭、法然上人の直筆

「南無阿弥陀仏 往生之業 念仏爲先」の信心を現代に示した一老婆を生涯忘れることない愚僧之の指南であつた。

心痛の生涯一身に享けて逃げることなく、日課相続、和顔を旨として人に接し、上手な繕いもなかつた。逆境にあつても人生の幕切

れは立派な往生であつた。

孫達に移つたのはお婆さんのお念仏の財産、翌年孫息子は菩提寺宝前で仏前結婚すると自分で懇請してきた。その後夫婦に長女誕生の慶び、宮参りが寺参りとなり成人式を記念してタイミング良く五重相伝を受け、心の財産をもつて嫁に行かせるという方向へと発展した。一老婆の残したお念仏の宝財と申せましょう。

末法に残るのは、唯念仏のみを留むという事『選択集』六章念仏の行者は必ず三心具足のこと『選択集』八章と一老婆の胸の内に取りあげる程の事は見られなかったが唯淡々と縋る一念となつて「善いとこへ往くのや、死なへんで」

と言われた言葉に頂くべきものがある。

「ほらあこ見とくなはれ、美しい花咲いてますやろ——ほらそこに仏様がたくさんこられます」

と左手で指さす所は壁であつたが、老婆の言葉は実感こもつたご来迎の悦びであつた。本

願に遇い仏に遇うという、悦びの中の悦びであつたのである。これこそ三心具足である。

専ら名号を持ち、称名を以つての故に諸罪消滅す即ち是れ多善根福德因縁なり『選択集』十三章と念仏多善根の言葉である。

法然上人は「五種正行・五念門・三心四修・三種行儀も、源空が目には南無阿弥陀仏と見えたり、と申されたことに遂きるのである。言残、書残、知残、等の口伝も結歸するところ南無阿弥陀仏である。

昨年十月十五日認証式の日、御門主猊下よりお声を頂き御拝顔の案に浴することを得た。「民谷さん、今回の病気で頂かせてもらったことは、お念仏の数返によらず、想念の念仏にもよらず唯南無阿弥陀仏が極地なり」と申され、「大五重の口決もこれである」と申され、病氣あがりの御染筆「俱会一処」を拝受したことが感慨無量であつた。

この時私の脳裏に走つたことは、母の死であつた。

「唯往生極樂の爲には唯一向に念仏すべし」と元祖様の御遺訓を感得することができた。

二箇月半、母の添寝であつた。命終らんとする時「傍人」の大切さを身に滲みて感じた。毎夜睡時に、善導大師の懺悔文・広懺悔・畧懺悔・発願文・撰益文・会仏一会約三十分となえさせて戴いた。

私自身の三毒煩惱が深い懺悔の心情となり、母の体を抱きしめて「母ちゃん許してな、堪忍してなあ」と泣き続けた。六月十日昼下り左手を上げて

「そこに棚を作つてな」

「なぜや」

「仏様が太勢おいでになつてゐるから落ちられる、早ようつくつて」

「よかったな、仏様拝めて」

南無阿弥陀仏……………と続けた。

正しく来迎正念に住した様相であつた

六月十四日午前中から相好が変つた。十一時三十分、ずっと閉じていた眼が大きく開い

た。黒玉全体が瞳であつた。同時に呼吸の早まりを知つた。吐く息に合わせてお念仏するうち、十五分かかつて静かに半閉半開となつた。全ての機能が停止した。十一時四十五分である。

○雑善に約対して念仏を讃歎する

○能念にして口称念仏するところ、観音勢至諸菩薩等親友知識となつて来迎を頂き、仏家に入ることができる

○念仏の勝行、醍醐味を説く『選択集』十一章と、母の様相から眼の当り拝することができた。

一老婆の臨終、母の臨終、それぞれ聖道門を捨てて浄土門をお選び下さり、正雜二行に於いても、親・近・純の正行念仏を選び・本願なるが故に音こゑを選び、念仏に帰一せんがために諸行を説き、尋常が臨終であり、臨終は尋常である故に念仏を選び給うたのである。

南無の一念は善導大師のお言葉にいう「衆生貪瞋煩惱中能所清淨願往生心」であり、本願他力の声は阿弥陀仏となつて、声に現われ

お包み下さるのである。人間が人間として仏^{ほとけ}ることのできる勝行易行のお念仏、現代に生き生きとして生き往くことのできる大道を悦び度いものである。

法然上人六十六歳の偉業は、御病氣というかつてなかった異変からである。関白兼実公の懇請あつたればこそ。

然し元祖様の御心には、「庶幾^{こゝろ}わくば一たび高覧を経てのち、壁底に埋めて窓前に遺す」と莫れ、恐くは破法の人をして悪道に墮せしめんことを」と『選択集』の結語に申されて

いる。

当時の宗教改革に対する時代背景と愚鈍一徹の念仏行との対比は法然上人の深意を現すものである。

高慢は人の常なれど、畏下の底力をもつて平等利益の仏子とならん事を示し賜う。

元祖様の宗教的転換は一大仏教の大哲学をナムアミダブツの声の宗教としてお選び下さり普遍の大道とされたことである。

八百年の今日、選択本願の念仏こそ現代になくてはならない唯一向の教えである。



◆選択のこころ

選択私年号

寺内大吉 (作家)

法然上人が『選択本願念仏集』を撰述されて八百年。この平成十年を、私はあえて「選択元年」と呼びたい。出発点なのである。回顧でも郷愁でもない。法然年仏が新たなパワーと情感の中で「旅立つ」のである。

年仏のパワーとは何か。南無阿弥陀仏となえる声の響きで全身に躍動感呼びさますことだ。それも孤独で弱い。みんなて唱える共行の念仏である。法然上人はいみじくも「勇進する念仏」とおっしゃった。

新たな情感とは何か。「弥陀の誓願」に感応し、悦びを満喫するのは当然だが、この時期、阿弥陀仏の存在は余りにも遠くなった。仲立ちをして下さる「法然サマ」である。念仏を

ひと声つなぐごとに五感で法然さまのお声をお姿を、み胸のうちを吸収するのである。

さて選択元年――

この国の歴史上で何度か「みろく弥勒私年号」が登場してきたという。国家権力が制定した元号を用いないで、終末復活の菩薩たるマイトレーヤ弥勒さまで年号を冠称するのである。余りにも不条理な政治や社会に愛想をつかし、て弥勒サマへ眼を集中した一部の日本人のあいだで用いられた。

弥勒私年号の初見は承安元年（一一七二）といわれる。奇しくも法然上人が比叡山を捨てた四年前にあたる。平家が朝権を横断しはじめたころで、京都を中心に民衆は「承安」

と呼ばず「弥勒元年」と呼んだのである。

どの程度にこの精神界における「叛乱」が拡大化したかは不明である。後白河法皇が平清盛の娘徳子を猶子に迎えて高倉帝の女御、さらに中宮へと登用したことへの藤原貴族の憤りが民衆を煽動した結果かも知れない。末法末世への端的な表白であらう。比叡山上にいた法然上人はご存知だったであらうか。

次の弥勒私年号が板碑や寺の過去帳に出現するのは中世、それも戦国時代へ突入する元文九年（一五四〇）を「庚子命祿元年二成ル」という記述が残存している。命祿とは弥勒のことである。

現在でも国家制定の元号を避けてことさらに西暦に固執する風潮がある。西暦は四年ほどの誤差はあるにせよ、イエス・キリストの誕生から数えた年号だ。インドや韓国などの「仏暦」のほうが東洋人にはよほどふさわしくはないか。

それはともかく、私ども浄土宗徒が「選択元年」と呼ぶことも法然上人の教えを弘める

意味でも不当であらう道理はない。あえて提唱したいものである。

『選択集』が撰述された建久九年（一一九八）から俄に念仏者たちの周辺で外圧の波が立ちはじめた。「専修ノ徒」と呼ばれて衆徒の襲撃や国権による弾圧の手が伸びた。

その極点が建永の法難である。お弟子の安楽、住蓮ほか四人が死刑に処せられたばかりか、法然上人までが四国へ流罪である。

私はこれまで、これを歴史上の一つの事実として思い流してきたきらいがある。しかし、それが自分自身が七十五歳を過ぎてみて愕然となった。この老境へきて自分がそんな痛苦に耐えられるであらうか。

肉体的な苦しみは言わずもがな。生涯の殆どすべてを失うのである。つまかさねてきた地位や声価はもちろん、だいじな共行の信者とも別離してゆかねばならない。しかも余されたこの世の時間は幾ばくもない。

それでも法然上人は弟子たちに向っておつ

しやった。自分はこれまで京都の土地を離れたことがない。こんどは四国の田舎(鄙)へ行って念仏を弘める絶好の機会である、と。

言葉ばかりか流人船が室津(兵庫)の沖で停泊した折、漕ぎ寄せてきた小舟の遊女に念仏によつて強く生きることを教示している。「ただふかく本願をたのみて、あへて卑下するなかれ」と激励さえ与えた。

勇進する念仏でなかったら、こんな行動は選択できなかったであらう。「選択」の有難さの一語につきる。

これと思ひ合わされるのが釈尊の涅槃である。最後の旅にのぼり、クシナガラ(沙羅双樹)の林中で生涯を閉じられた。息を引取る瞬間まで枕頭の弟子たちに仏法を説きつづける。涅槃の教えだった。

色身——色かたちをなした眼に見える肉体が消滅してゆく虚しさを説いた。

法身——仏を信する心の永遠性を説いた。

釈尊は「無我」を生涯を通して主張した。

自我の放棄である。

二千数百年昔の自我というテーマが現在でも変わらない人間の悩みとなっている。オレのもの、ワタシの権利を主張してやまない。

しかし「オレのもの」であるはずの私たちの肉体は果たして自分だけのものであらうか。生んでくれた母親、育ててくれた父親。両親と縁が薄かった人でも社会から有形無形の恩をこうむっている。

そればかりではない。私たちの肉体は何によつて育ち、保たれているのであらうか。おびただしい動植物の「いのち」を奪つて生きているのである。「心の時代」とか「わが心に目ざめよ」などと短絡的に叫ぶが、その心とは肉体から発生している。肉体における一つの機能にすぎない。

しかもその肉体こそは「オレのもの」ではあり得ないおびただしい「いのち」によつて構成、生存しているのではないか。熟睡して思惟する機能のすべてを失つてもこれらの「いのち」は私たちを安らかに生かしてくれている。

釈尊が説く無我も、法然上人が主唱された「ひたすらにお念仏を」もまさにこれであらう。自我を捨て去ってひたすらに阿弥陀仏の誓いに乗じてゆく。私ひとりが生ずるのではない。この「いのち」を支えてくれたあらゆる「いのち」に安らぎを与えてもらうのである。

おのれに執着していたら、七十五歳の老境へきて天下の罪人となって流罪されるなどという痛苦に耐えられるはずがない。それこそ念仏を中断して国権に屈するか、自らの生命を絶っていたかも知れない。

それでも雄々しく流人船に乗りこまれた法然上人。

共行するお念仏。人間の仲間たちだけではない。わが血肉となっている動植物のおびただしい「いのち」ともども声を発して弥陀の誓願を讃嘆し、感謝をささげるのである。

わが浄土宗における近世の碩学であり、啓蒙家でもあった渡辺海旭師はその著述『法然上人の選択主義』を以下の文章で結ぶ。

——機を見ること世尊の如く、時を知ること法然の如きに学べ。此の五濁の世に生きんとせば。すべからず法眼を開くべし。『選択』の二字は必ずや長夜の眠りを醒ますであらう。

政治の混乱、経済の乱舛、少年犯罪の頻発による道義の失墜。いま二十一世紀をむかえようとしての現況は遠く平安末期、戦国時代の到来を思わせる。「弥勒私年号」を呼称するにふさわしい環境と言える。

弥勒菩薩は採らないが、私たち浄土宗徒は「選択私年号」を、それこそ選択してもよいのではあるまいか。その選択元年である。私たちは勇進する念仏とともに雄々しくも明るく生きてゆきたい。

(成田有恒・浄土宗宗務総長)

『選択本願念仏集』撰述の背景

大橋俊雄

一

法然上人は十三歳から四十三歳までの三十二年間、比叡山ですごしたが、十二年のあいだ山から下ることなく学問を究め、修行に精出すと誓った。籠山ろうざんの制にもとづいて山中で生活した二十四歳までの十二年と、何らの拘束も受けることなく、学問を修め思索をねつた、その後の十八年とでは、同じ比叡山ですごしたといっても大きな違いがあった。前の十二年間は厳しい修行と、師について学問を究め

た修学期しゅうがくきであつたが、あとの十八年は貴族も武士・庶民も、男も女も、老人も若い人も、すべての人を救うにはどうすればよいか、どのような教えがあるかを真剣に考えた求法期ぐほうきであつた。

上人は、この時期をかえりみて「なげきなげき経藏きやうざうに入り、悲しみかなしみ聖教しやうきやうに向いて」と言っている。経藏きやうざうといえは、仏の教えを書いた本がおさまっている図書館のような施設であるが、来る日もくる日も毎日経藏に入つて、一冊一冊本を取りだしては、すべての人の救われる教えを書いた本はないものか、

と探し求めた。その結果、求め得たのが、中国・唐の善導大師の書いた『観経疏 散善義』であった。『散善義』には「心をひとすじにして、もっぱら阿弥陀仏のみ名を称え、歩いてゐるときも止ま^{とど}まっているときも、起きていても寝^ふていても、時間の長い短いの別なく、片時もやめることなく、念仏すれば、必ず阿弥陀仏は救^{すく}ってくたさる。この行こそ阿弥陀仏が遠い昔誓い、成就することがなかったならば、仏に成らないと誓った行であるからだ」と記されていた。

この文に接して、法然上人は浄土宗を開く意志をかためた。承安五年（一一七五）四十三歳のときのことである。『選択本願念仏集』を執筆したのは、それから二十三年後のことであつた。この間、多くのの人たちに教えを説き、また多くの人たちが上人の教えに耳を傾けた。そうした人たちの中には、九条兼実もその一人であつたが、上人が教えの対象としたのは、

そのような名のあるエリートではなく、一般民衆であつた。

二

法然上人が浄土宗を開くまでの社会では、宗教的には難行苦行をつみ、造寺造塔に心をよせ、仏の教えを聞き、厳しい修行をし、人間的には正直・慈悲に徹した人柄と生活態度が要求された。こうしたことは誰にでもできることではない。できないことを条件としても詮^{せん}なきこと。そこで上人は、もし仏像を造り寺を建てること、智慧があり才能のすぐれていること、学問のあること、厳しい戒律をたもつことを往生の条件とすれば、貧しく困っている人、愚かで智慧の低い人、学問のない人、戒律をたもつことのできない人は、阿弥陀仏の救いからもれてしまう。この世にはそうした救いにあずかれない人が多い。こうした条件を基準にすれば、極楽浄土に往生で

きる人は少なく、往生できない人はきわめて多い。そのようなことがあつてはならない。

阿弥陀仏はそのように差別しようとは毛頭考へていない。一般民衆を救うこと、一般民衆に救いの手をさしのべることが、阿弥陀仏のご本願の真心であり、法然上人の真意もここにあつた。その教えが専修念仏であつた。

専修念仏は誰もが、どこでも称えられる教え（易）であるばかりでなく、多くの教えのなかから選びぬかれた勝れた教え（勝）であつたから、多くの人たちのなかに広まつていった。しかし、その教えは多く耳から聞いたものであつた。耳から聞いた教えは、そのとき感激をもつて聞いたとしても、そのすべてを覚えてゐるわけにはいかない。覚えてゐるのは、そのはしだけ。脈絡も思うようにならない。上人のもとにいれば、いつでも教えを聞くことはできるが、上人のもとを離れ、いざ人に説こうということになれば、一抹の不安がないでもない。そこで、師のもと

をはなれた人たちは、上人に手紙をしたためて教えを請ひ、疑問とするところを質問した。それにしても門弟たちはいつ都を遠く離れないともかぎらないし、上人も健在でいてくれればよいが、永世生きつづけることはできない。教えを簡明に記した教義書がほしい、という要求は、上人の病篤しの報せを聞くにおよんで切実に感じられた。

三

上人が病床に臥したのは、建久九年（一一九八）六十六歳のときであつた。正月早々風邪をひいたらしい。風邪ひきは常のことであつたから、別にこれといつて気にとめることもなく、たいしたことあるまいと思ひ、五十日の別時念仏をつづけた。別時念仏は毎年正月一日から勤めるのを常としていた。ところが無理がたたつたのであろうか。二月十日ごろから高熱で口がかわくようになった。あ

と十日もつとめれば満行になるからと頑張りつづけた。病状については、四月二十六日付で、上人が津野三郎為守におくった手紙で知ることができ、四月の初めには病状はもつともひどかったようで、四月八日『没後遺誠』と呼ばれている遺言状を書いている。

専修念仏を主唱したといっても、それが比叡山にいたときであれば、さして問題ではない。『往生要集』を書いた源信にしても比叡山の横川を中心に浄土教を説き、多くの信者をもっていた。ところが、法然上人は比叡山を下り天台宗教団からはなれて、京都の東山で教えを説いていた。それが無名の時代であり、影響がなければ問題はないが、教えはひとじめにすることはできない。多くの人に広めることが大切である。誰でもが信じ称えらる念仏の教えは、池のなかに投じた石によって渦の輪が広がっていくように、門弟を核に多くの信者がいた。その数は畿内だけでも数万人はいたであろう。『七箇条制誠』にも署

名していない大和国在住の正行房は、阿弥陀如来像（現・奈良市興善寺に安置）を造立するにあたり一五四八人から結縁を受けている。正行房が法然上人の弟子であったことは、胎内に納められている文書に、上人から送られたお手紙がおさめられていたことよって知られる。結縁した人は、阿弥陀仏信仰に深い関心をもっていた人としてよいであろう。このうちの、少くとも一割の一五〇人が信者であったとみれば、『七箇条制誠』に署名している一九〇名の門弟が、それぞれ一五〇人の有力な信者をもっていたとすれば二万八五〇〇人、二割とすれば五万七〇〇〇人になる。当時の京都の人口は二十万人と推定されている。二〇万人に対して数万、旧教団の人たちにとつては脅威であつたに違いない。有力な門弟源智は一人で四万五〇〇〇人の結縁者を集めて、阿弥陀如来像を造立している（現・滋賀県玉桂寺に安置）。

天台宗教団をはじめ、南都の教団も法然上

人を頂点和仰ぐ念仏宗に対し、その発展のすがたをいらだちの心をもって見張っていたであらう。それを知らない法然上人ではない。

『選択本願念仏集』の末尾に「どうぞ一たびご覧になったあとは、中国の話にもあるように、壁の中に塗りこめるなどして、人目につかないようにしていただきたい。もし信ずる心のない人がこれを見て、念仏の教えを謗そるようなことがあると、正しい教えを謗そった罪により、苦しみの世界に墮おちるであらうことを、おそれるからである」と記しているのは、當時すでに念仏の教えを謗そる人がいたからであつた。本に書き残しておくと、証拠をのこすことになる。こうしたことで書き残すことに躊躇ちゆうちよしていた。それが九条兼実の要請で執筆することになった。

四

『選択本願念仏集』を撰述した年は、永承

七年（一〇五二）を末法第一年とすれば一四七年目のことであつたが、このころを境に念仏宗に対する弾圧がじわじわとおしよせてきた。一五四年後の元久元年（一二〇四）には延暦寺の衆徒が専修念仏の停止を天台座主眞性に訴えたので、法然上人はこれに対し『七箇条制誡』を制定して門弟を誡めているが、翌二年九月南都興福寺の衆徒は念仏宗を禁止するようにと訴え、つづいて上人自身も流罪になつて、四国の配所におもむいた。弾圧はその後もつづいている。正しく末法の時代であり、新宗教への弾圧は日蓮を含めて百年もつづいた。

それより前、建久七年には上人にとつての外護者九条兼実の身邊に政変がおこつた。建久七年の政変と呼ばれているのが、それである。後鳥羽天皇の中宮となつた兼実の娘任子（宣秋門院）は建久六年八月出産（皇女、香華門院）したが、兼実の祈願も空しく早逝した。任子とはば同じころ後宮に入った源通親

の養女在子（承明門院）はその年の十一月一日皇子為仁親王を産んだ。のちの土御門天皇である。皇子と皇女の出生、それは男女の差には違いないが、一生を左右する大きな問題であった。

皇子の出生は、通親にとって外孫の出生であり、皇子は天皇になることを約束したも同然であったが、皇子の出生によって通親は外祖父としての權威をふるいはじめた。その反面、九条家には駭り（だまり）がうまれた。翌七年十一月任子は俄かに内裏から退出させられ、二十

五日兼実（かねみ）は関白の座をおわれ、その長子良経（よしみ）は当時内大臣であったが、籠居（ろうきょ）（謹慎）の身となり、弟慈円も天台座主の職をうばわれた。政変以来、兼実は病床に臥しがちとなり、失意のうちに信仰を求め深めていった。分りやすい念仏の教えを書いて欲しいという願いは、法然上人の思いもかけない病いと、兼実自身の心のなかの葛藤（かつどう）によって上人に伝えられ、上人も懇情もだしがたく、筆を執ることになった。

（文学博士）

京都一千年の歴史に

育まれた巧みの技

京仏壇・佛具は当店に!!

☎ 六一五—〇八八四

京都市右京区西京極郡町一〇三番地三

(株) 島津法衣佛具店

☎ 〇七五—三一四—七七六八

FAX 〇七五—三一五—三七五三

総力特集

〔選択本願念仏集〕奉戴八百年

人物 選択集をめぐる

◆選択集をめぐる人物

選択集執筆上人のこと

深貝慈孝

一

法然上人の『選択本願念仏集』ご撰述時の

模様は、『法然上人行狀絵図』（四十八巻伝）

第十一巻第三図の下の詞書にくわしいですが、

これによりますと『選択集』ご述作に関った

お弟子としては安樂房遵西と真觀房感西の二

人を挙げる事ができます。それはそれとし

て、浄土宗を中興されました第七祖聖岡上人

（二三四一一四一〇）は、浄土宗第三祖良忠

上人（一一九九一一二八七）の『選択伝弘決疑

鈔』にある『選択集』撰述時の様子をさらに

説明されまして、著書の『決疑鈔直牒』（けつ

ぎしようじきてつ）に、

問う、或がいわく、相伝にいわく、この

『選択集』には多く執筆あり、いわく『選択

本願』より「念仏為先」の註に至るまで、

上人のご自筆なり。第一篇より第三本願章

「よく瓦礫をして変じて金と成さしむ」の

文に至るまで、安樂房の執筆なり。「問うて

いわく、一切の菩薩はその願を立つといえ

ども」より第十二付属章に至るまで、真觀

房の執筆なり。第十三章より第十六章の「私にいわく」より「もっぱら経法のごとくせよ、まさに知るべし」までは他筆なり、名を失す。「静かにおもんみれば善導の」以下は、また真観房の執筆なり云。今はまったく真観房の執筆という、相違如何。答う、知りがたし、云。或は多分真観房執筆なれば今の相伝は多分に依るか。

と述べておられます。これは良忠上人が、『選択集』の執筆は、真観房感西が法然上人から命ぜられた、と記しておられる段の具釈ですけれども、この相伝の説によりますと、『選択集』の執筆は、

選択本願念仏集

南無阿弥陀仏 往生之業 念仏為先

(法然上人筆)

第一篇から第三篇「能令瓦礫變成金」まで(安樂房遵西筆)

第三篇「問曰一切菩薩立其願」から第十

二篇終りまで(真観房感西筆)

第十三章から第十六章「私曰」より「一如経法心知」まで(他筆名を失す)

第十六章「静以善導」から終りまで(真観房感西筆)

ということになります。

二

さて、このように『選択集』は執筆された、という相伝の説が真実であることを証明する『選択集』の原本が現存します。ご承知の、京都は御所の東、浄土宗大本山清浄華院の南側、元天台宗の廬山寺所蔵のいわゆる廬山寺本『選択集』がこれです。重要文化財に指定されています。この廬山寺本『選択集』の書体が聖岡上人の相伝の説の通りになっているわけです。『選択集』は諸本が存在し、学者間で書誌学上の論議も盛んですが、この廬山寺本は鎌倉期のもので、確かに草稿本という

る体裁のものですし、しかも執筆の異なりが相伝通りですから、『選撰集』のテキストとしては一番貴重であるわけです。

問題は聖岡上人が他筆と伝え「名を失す」といわれる人物は誰であろうか、ということ

ですが、これは先年遷化されました西山浄土宗管長、西山短期大学学長上田良準先生によつて、現存証空上人の消息文や、京都嵯峨二尊院所蔵『七箇条起請文』の証空上人の署名の筆跡等と、廬山寺本『選撰集』の他筆の部分の筆跡の検討がなされました結果、他筆は証空上人の筆に間違いはないということになりました。まさに大発見です。今日に至るまで反対の意見はありませんので、廬山寺本『選撰集』の他筆の部分は証空上人の執筆、ということに落着きそうです。したがって『選撰集』の原本は本文全十六篇が遵西、感西、証空上人、感西の順に三師によつて四段に執筆されたということになります。以下三師と『選撰集』の関係について、ごく簡単に述べてみ

ましよう。

三

安樂房遵西（一一二〇七）は、法然上人をお招きして『逆修説法』と修した外記入道師秀（もろひで）の子です。俗姓は中原氏で師広といいました。普通は住蓮、安樂と二僧と一緒にいますが、それは建永元年（一二〇六）十二月、後鳥羽上皇の熊野行幸の間に、御所の女房が二僧のもとで出家するという事件が起こり、両僧は斬刑、法然上人は四国へ流罪、一方では専修念仏の停止が決定するという建永の法難のもとをつくった人物として有名であるからでしょう。この遵西は、自分の能筆を誇りましたので、法然上人は「この僧驕慢の心深し」と判断され、執筆の役を下ろされ、替つて感西が任にあたつたと『四十八巻伝』には書かれてあります。

真觀房感西（一一二〇〇）は、法然上人が

病を得られた時にお書きになった建久九年（一一九八）四月八日付の遺言状『没後起請文』にその名が出てきます。

弟子多しといえども入室の者はわずかに七人なり、いわゆる信空、感西、証空、円親、長尊、感聖、良清なり。（略）

感西大徳はまたこれ年来常随給仕の弟子なり。その思い相共にして浅からず、またいささか付属する所あり、いわく、吉水の中の房本、西山広谷にあり。高畠の地一所ただし売買の時半直これを与う。これを付属しおわんぬ。

とありますので、法然上人から親しく教えを受けた常随給仕の弟子であつたことがわかります。『四十八巻伝』第四十八巻第五図の下には「真観房感西進士入道これなり」は十九歳にてはじめて上人の門室にいる。師として仕えて法要を咨詢すること多くの年なり。選択を草せられけるにも、この人を執筆とせられけり（略）しかるに上人に先立ちて正治二年

閏二月六日生年四十八にて往生を遂ぐ。上人念仏を勧め給いけるが、我を捨てておわすることよとて、涙を落し給いける」のを得られた時にお書きになった建久九年（一一九八）四月八日付の遺言状『没後起請文』にその名が出てきます。

詞書があります。『選択集』の執筆といい、『没後起請文』における付属といい、門弟の中では最も期待された愛弟子であつたことがわかります。

善慧房証空（一一七七—一二四七）は西山浄土宗派祖で、その伝は『四十八巻伝』に、第四十七巻全部を割いて書かれてあります。法然上人門弟中の高弟でも指折りのお方であつたことはご周知の通りでして、短文では綴られませんが、『四十八巻伝』の記述に譲りますが、実は証空上人は『選択集』撰述の際には一番関つておられたことが、証空上人の孫弟子の行観の『選択本願念仏秘鈔』によって知ることができます。それどころか証空上人

には歴とした『選択密要決』という五巻の書物がありまして、『選択集』撰述時の模様を書きとどめておられるのです。ただしこの書物は偽作という説も昔からありますし、最近でも西山浄土宗の新鋭の学者の中には、あらためて偽作説を唱える方もあります。しかし従来の西山浄土宗では、もちろん証空上人の真撰とされて来た書物ではあります。これによりますと、『選択集』撰述時のありさまは、上人六十六の春建久元年三月、この文を撰せらるる時、人を簡んで座に在らしめず。真観あつて法門の義を談じ、証空あつて経釈の要文を引き、安樂あつて筆を取つてこれを書す。この外に人を簡んで在座せめられず(略)第二章に至つて、安樂筆を聞(さしお)いていわく、この文選作の座に召され、執筆すること生涯の面目なり。上人いわく、後世に名を称せられんと欲するか(略)その心正しからずと、よつて第三章より真観執筆して安樂を棄てらる。

と記されてあります。このように証空上人は「経釈の要文を引く」という勸文の大役を務められたことを自身でいわれているのですから、『選択集』述作のありさまは、本来ならば、この『選択密要決』の記事にも大いによるべきですが、二十二歳の若さで勸文の役は無理とされる大正大学故玉山成元先生の説もありますし、この書物全体が自ら「この集は口伝をもつて見るべきなり」と述べますように、法然上人のご撰述の意趣にはそぐわないような独自の理解が示してありまして、先にふれました孫弟子行観の『選択本願念仏集秘鈔』の釈義にも合しないことが多くありますので、全幅の信頼は寄せられないものがあるようです。いずれにいたしましても証空上人は法然上人門弟中の高弟です。ただ入門の時が若年(十四歳)で、法然上人滅後における自行化他の活躍が大きく、独自の領解を行われた結果、行門、観門、弘願門の三義をお立てになり、弘願門の念仏の領解を第一とする安心尊重の

念仏義を主張されましたので、浄土宗第二祖
弁長上人（一一六二—一二三八）からは、法然
上人の念仏義でない、と批判されたお方でも
あります。ともあれ証空上人は何の色どりも

ない白木の念仏を説きつつ諸国を遊化され、
宝治元年（一二四七）十一月二十六日、往生
の素懷を遂げられました。御年七十一歳であ
りました。

（佛教大学教授）

◆選択集をめぐる人物

「九條兼実公について」

問川彰道

◎九條兼実公とは、『選択本願念仏集』の作成
を法然上人にご依頼した方である。

京都・三十三間堂境内の小庭園に「法性寺
殿趾」とした京都市の立札がある。さらにそ
の付近に「南無阿弥陀佛」の石碑があり、こ
れは法然上人のご真筆であるということだ。

「法性寺殿」とは兼実公のことであるが、そ
の以前は、父である忠通も使っていた名であ
る。そのほか兼実公は、「月輪殿下」とも呼ば
れていた。つまり兼実の邸宅がこの地にあり、
法然上人が時折ここを訪れては、親しく法話
等、經典の解説されていたことと思われる。

九條兼実は久安五年（一一四九）、関白藤原忠通の三男としてお生まれになった（母は加賀局）。藤原時代にその栄華を大にした道長は、忠通の弟にあたるという名門の家系である。

十歳にして元服、正五位に叙せられ、昇殿を許可される。その後も累進して近衛中将に至る、永暦元年（一一六〇）十二歳の時、従三位中納言。二條天皇の折に大納言近衛大将を任ぜられ、長寛二年の春、父忠通薨去するに及んで内大臣に進む、まさに十六歳の年である。

仁安元年、十八歳にして皇太子を兼任し、やがて右大臣へと栄転する。さまに博覧多識にして、当時その右に出る者なしと称されていたことにより、公の偉大なる人徳をうかがい知ることができるのである。

文治元年（一一八五）、後白河法皇が源頼朝追悼の命令を下そうとした折、これに反対したが成功せず、しかしそのため頼朝からは大

いに信任を受けることになったのである。更に義経が京都を没落するに至って、頼朝より摂政・氏長者・公卿へと推せんされ、かくて文治二年三月、摂生氏長者となる（三十九歳頃）。文治五年十二月、太政大臣となり鋭意なる政治を施行したために、間もなく「良相」の名を得る、更に建久二年（一一九二）十二月摂政を改めて、この時「関白」となったのである。

建久七年（一一九六）、政変のため関白氏長者を免ぜられ（四十八歳頃）失脚、ここに政治的生涯の終末を告げるのである。

これより以降、かねてより強き尊信の心を傾けていた法然上人との交流を深め、建久九年春三月（一一九八）、『選撰本願念仏集』の撰述を懇請し、浄土法門の要義が上人によって確立された。

「建久九年公遂ニ往生浄土ノ一義ヲ究ント欲シ元祖ニ漏シテ浄土ノ法門念仏ノ要義ヲ撰ハシム、元祖乃チ一部ニ卷ノ書ヲ録シテ之ヲ

公ニ示ス、選撰本願念仏集是ナリ、是レ実ニ
一宗建立ノ基礎ニシテ念仏弘通ノ公案トナリ
公此書ニ依テ淨教ノ奥旨ニ達シ是ヨリ元祖ト
深キ契ヲ結フ」(月輪兼実公伝)

建仁二年正月、法然上人のもとにて出家、
法名を圓證として、月輪殿と呼称されるよう
になった。

建仁二年二月、法然上人に四国配流の沙汰
が決まると、兼実は上人を法性寺の御堂に招
き、惜別の至誠をつくした、また配所を自己
の所領に改めるようその便を計った。

同年四月、藤原光親を呼び上人の赦免につ
き盡力するよう遺言して薨去、ここにその生
涯の幕を閉じたのである、時に兼実は五十九
歳の春であった。

九條家はこの兼実を始祖とし、兼実が関白
となった折、九條氏を称号した、兄・基実が
近衛家を起こし、同家から鷹司家が分かれた。
その後、九條家は三千石を領しつつ明治維新
に進み、やがて華族に列せられ、次に公爵を



九條兼実公墓所 (写真二点〇筆者撮影)

授けられたのである。

兼実の日記を『玉葉』と称し、長寛二年より正治二年までの日常の見聞がよく記載しており、政局の機微をよく伝え、この時代の王朝内部の史料としては最も貴重なる文献である。また法然上人と兼実の交流についてもこの『玉葉』が根本資料となるのである。

(東京教区教化団副団長)



総力特集

〔選択本願念仏集〕奉戴八百年

選択集との 出会い

◆選択集との出会

『選択集』と私

松原泰道

「ここに予がごときは、すでに戒定慧の三学の器にあらず、この三学のほかにわが心に相應する法門ありや。この身に堪能なる修行ありやと、万人の智者にもとめ、一切の学者を訪えども、これを教ゆる人なく、これを示すともがらなし」(聖光房弁長『徹選択集』)

数えてみると二十五年も前のことです。私は祥伝社の当時編集長だった伊賀弘三郎さんから、『仏教入門』の執筆をすすめられました。伊賀さんは、「仏教にはたくさんさんの宗旨があつて、こみいっていてわかりにくい。わが家の宗旨と、仏教全体との関係も一般には明

らかでない。〃仏教の信仰路線の交通標識〃を設定してほしい」と、私に要望されるのです。

私は禪寺に生まれたので、禪門の行的なことはともかく、学問としての仏教は全く独学なので、伊賀さんの編集要望に應えるのはむずかしいことです。しかし自分の勉強になるので、あつかましく引受けましたものの、さあそれからが大変です。まず各宗のお祖師さま一人ひとりの学習から入って、浄土宗の法然上人にいたしました。

たまたま私は昭和四十五年以来、毎年一回、長野善光寺大本願の『道心会』主催の「青年

の為の仏教講座」に出講する縁をいたたいて
います。この講座は、昭和三十八年六月に、
故増谷文雄博士によって開かれてから今日ま
で、一回の休会もなく続けられています。大
本願は浄土宗ですから、浄土宗については出
講することいろいろ学ぶことができるので、
私は善光寺詣りが楽しみです。

いつのときの講座でしたか、同寺で本稿の
冒頭に掲げた『徹選撰本願念佛集』の一節の
抜き刷をいただきました。『徹選撰本願念佛
集』は『徹選撰(集)』との略称で知られてい
ます。その書題の意味は、△宗祖法然聖人の著
書『選撰本願念佛集(『選撰集』)』の内容を述
べ徹し尽くすというので、『選撰集』の注釈
書です。

『徹選撰』の著者は、宗祖の後を継いで浄
土宗第二祖となった聖光房弁長です。法然の
高弟による聞き書きですから貴重な一文です。
現代文に直すと次のようになります。

「私(法然)のような人間は、戒学・定学・

慧学^{えがく}の三学(仏道修行者の必修の三項目)の
修行が^{つとまる}わけがない。こんな私にも堪
えられる修行があるのか、と多くの知恵のあ
る人や学者にたずねたが、私に教えられる人
は一人もなかった」

法然上人のうめき声が聞こえてまいります。
上人は幼い頃から「文殊菩薩の生まれ変わ
り」とたたえられ、叡山でも「智慧第一」と
みなから尊敬されました。その上人にして、
このお言葉です。

弁長が紹介する上人のお言葉は、謙遜とか、
反省とかいう人間の思い上りからのほからい
ではありません。人間の知性のはかなさへの
声なき慟哭^{どうきく}です。私は帰りの電車の中で、何
べんも抜き刷を拝見して感動したのが、法然
上人の著わされた『選撰集』への導きとなっ
たのです。帰京して直ちに、石井教道師の高
著『選撰集全講』(平楽寺書店版)を買ひ需め
て勉強をはじめました。

この原稿を書いている今、仏教伝道協会か

ら、『英訳大蔵經』の第十二回配本の「選択本願念仏集」が届けられたのも不思議のご縁です。同協会は故沼田惠範氏の発願から創立され、『仏教聖典』の全世界の各ホテルへの贈呈や、英訳大蔵經のシリーズの刊行等で、仏教思想の地球化につとめています。

仏教伝道協会の英訳「選択集」もSENC HAKUと浄土宗の読み方になっています。

選択には、取捨（一をとり他を捨てる）と撰取（選びとる）の二義がありますが、仏教思想では相対的な思考でなく、両者を高い立場で統一し、新しい価値を創造します。西洋哲学の止揚に似ていますが、仏教語の「中」に似ているので、私はこれを「中する」と申します。取捨と撰取とを中されたのが「選択」であると存じます。

この選択は法然上人でなく阿弥陀仏によって選択された——と人間のはからいてないはからいに絶対の選択があります。すなわち念仏を選択して本願とする、本願念仏に関する

信心のすべてを学ばさせていただきました。中でも

「生死の家には、疑いをもって所止となし、涅槃の城には、信をもって能入となす。」は、浄土門に限らず、どの宗旨宗派にあっても大切な心得です。「疑う心のある限り、いつまでも迷いの世界から出ることはできない、信こそ第一要件」なのです。

私どもの「南無の会」では、毎年夏に「南無行」といって、各宗本山を歴法して二泊三日間、それぞれの宗派の行を実修することになっています。数年前の夏の盛りに、長野の善光寺さまで「別時念仏」を修行させていただきました。このときは法華信者も、禪者もみな一緒に「南無阿弥陀」の名号を、木魚を打ちつつ汗びっしょりになって称えました。

法然上人が『七箇条起請文』で、「ときどき別時の念仏を修して、心をも身をもはげまし、ととのへすむべき也」とのおすめに随い称名行に励んだ思い出は、参加者の誰もが生

涯忘れることはないでしょう。東京大学の数江教一先生が、「念仏とは、孤独なる魂が孤独の底において阿弥陀仏とむすびつくことである」(『本願念仏のえらび』『日本の仏教』・筑摩書房)といわれたことを思い出したことです。法然上人はおそらく、父の漆間時国が土地の豪族の明石源内武者定明に殺されたとき、時国が幼い上人の勢至丸に、「復讐をしてはならぬ。恨みに恨みをもつてするなら、永遠に恨みの尽きるときはない、恨みなきあらぎの心を手に入れよ」と言い遺された一言は、夢の間もお忘れなかったでしょう。しかし青春の上人の胸中には、父を殺した定明の面影がちらつき、彼を憎しむ心は、上人の賢明さをもっても消すことができないのです。学識が進めば進む程、定明を恨む心は燃えさかるのです。

上人は、今なお修羅の巷を離れられない自分を、「愚痴の法然房・十悪の法然房」とお責めになるのです。お悩みになるのです。しか

し上人は、この愚痴と十悪に導かれて、善導大師の『観経疏』、さらに恵心僧都の『往生要集』の教えに出会われるのです。そしてここに上人は、ご自分の心中に静かではあるが大きな爆発を感じられます。「十悪の法然房、愚痴の法然房が念仏して往生せんと言うなり」と。

余談ですが、第二次世界大戦末期の金属回収で、お寺の釣鐘も家庭の蚊帳をつる金具も供出させられました。もちろん銅像もです。ご本山知恩院境内の勢至丸の銅像も軍部に引き上げられ、いずれも溶解して兵器になる運命でした。ところが、いたいけな勢至丸が無心に合掌して念仏を称える敬虔な姿に、誰もが溶鉱炉へ投げこめなくて、戦後知恩院に返還された——と、私は聞き及んでいます。

私は知恩院へおまいりする度に、この逸話を思い出します。法然上人の伝記作者が、「われ幼年の昔より父の遺言忘れがたくして」と記されるゆえんです。自分につらくあたる敵

にも合掌し、念仏を称える勢至丸のお像に、私は今日の私たちの生き方が象徴されていると思うのです。

それは現代人は直情径行（ちよじやうけいこう）（相手の心など考えずに、自分の感情のままに行動すること）し過ぎます。恨みや憎しみをストレートに恨み

◆選択集との出会い

『選択集と私』

わが青春と服部教室――

袖山榮眞

（「南無の会」会長）

誰しも還暦をすぎて振り返れば、今からでも穴があつたら入りたいぐらいの思い出のトゲが二本や三本、心のヒダに突き刺さっているものです。『選択集』にまつわるザンゲばなしに、しばらくお付き合い下さい。

三十四年まえのことですが、そのころ私ども長野市及び近郊の浄土宗青年僧たちは、服

や憎しみで返します。法然上人がかた時も忘れなかった父の遺言、「恨みを恨みて返すなら、恨みの尽きることはない」つまり世界の平和はあり得ない事実を学ばなければならな

部英淳先生に名誉会長をお願いして「道心会」を設立し、増谷文雄先生を隔月お招きして『青年の為の仏教講座』を始めたばかりでした。闇夜に漕ぎ出した舟の行方に曙光が感じられるようになったころ一周年を迎えることになり、両先生ご臨席のもとささやかな反省と感謝のパーティを催した席上、今は亡き

吉水圓晋さんの発案で幹事研修の月例会を開くことになったのです。

善は急げと旬日ならずして、昭和三九年六月二七日を皮切りに服部先生のご自坊、川中島大塚の安養寺に参上して「選択集」の講義を頂くことになりました。今でこそ交通至便な郊外地に変貌を遂げた安養寺さんの周囲も当時は見渡す限り水田地帯で、自家用車など珍らしい時代でしたから、ほとんど全員がバスで通いました。バス停から一キロ近い農道に、左右の水田から圧し寄せて来た「草いきれ」が、苦い懐かしさを帯びて思い出されます。なぜ、苦いのかって？ 図星！ 文字どおりの三日××で、八月の第三回をもってお開きにしてしまったのです。実はこの秋、宗会議員の選挙があり、「道心会」を認知させるためには浄土宗教師としてあらゆる活動をすべしとの信念から、私たちも積極的に選挙運動に参画し、九月十月と続けて「休講」をお願いするうち段々敷居が高くなって、そのままズル

ズルと開店休業になってしまった——と最近まで思いこんでいました。

ところが、この原稿の資料にと三十余年まえのメモ帳と日記を対照した結果、とんでもない事実誤認のあることに気がきました。なんと昭和四〇年のメモ帳には三月から五月までの三回分「服部教室」予定日が明記されており、それにもかかわらず日記と照合すると三回とも「都合によりとりやめ」になっているのです。前年の無礼については目をつむって「また始めよう」とお誘い頂きながら、我々は先生の御好意を又もや踏みにじっていたのです。

「全く腑甲斐ない弟子どもであることよ！」との先生のご慷慨は想像に余るところで「先生ゴメンナサイ」とひたすらお詫びするばかりありませんが、それ以上に呆れ果てたのは、自分にとって都合の悪い事実を、いつしか完全に忘れてしまっていた」わが性のおどましさでありました。

いいわけじみていますが、直後に突発した予想外の事態が、この恥すべき事実についての私の記憶を吹き飛ばしたのかもしれませんが。お呼びが掛って六月十九日、高い敷居を跨いだ私たち三人（水野善朝会長、若麻績侑孝さんと私）に「ワシはこれから入院してガンの手術をする。後のことは君たちに頼んだぞ」と申し渡されても、周章狼狽するばかりでしたから……。

仏力加祐して本復された先生に『仏教講座』には時々ご出講ねがいがら、研修会再会の話を切り出すまでに五年を経ているのも、私たちの「罪の意識」の深度を物語るものかもしれません。ともかく「今度はゼツタイに潰しませんから」と固く約束した上で、弟子どもが集るのに地の利を得た私の自坊・十念寺にお招きする新方式のもと、昭和四五年九月に再開された月例会が二三年も継続されようとは夢想もいたしませんでした。『論註』六七回、『観経疏』八四回、『一紙小消息・一枚

起請文』一六回、『往生礼讃』二五回、『観念法門』二四回と都合二一六回にわたって「愛楽仏法味」のフルコースに舌鼓を打たせて頂くことになったのです。

むかし英文科の学生だったころ、中野好夫先生の『ヘンリー四世』を受講したことがありますが、いわゆる「独演会」方式でテキストの原文を音読し、続いて和訳しながらそのシーンを理解し享受するのに必要な、古今東西森羅万象あらゆる蘊蓄を惜しみなく傾け尽す学識の深広さと文学に対する愛情の熱烈さによって、「学ぶよろこび」を掻き立てられる思いでした。中野先生に比べれば地味な学風ながら木版刷り原典の一句一句を訓読しながら、その句が『論註』の中で、いや浄土思想あるいは仏教全体系の中で占める意味を常に意識させるように博識を駆使される服部先生の「独演会」も、弟子どもの胸に「ホンモノを学ぶよろこび」を深く根付かせる名講義でありました。

「名講義」ということばから少し脱線させて下さい。私は中野、服部両先生の「講義」をお聴きしたことは何辺もあります、失礼ながら両先生とも原典講読の「独演会」ほどの深い感銘を得ることはありませんでした。原典を読み進むうち適切な個所で披瀝される、先生ならではの卓見のほうに遥かに鋭い説得力が感じられるのです。

たとえば登山のばあい、その山の地勢、氣象、植生・景觀など掌をさすように知り尽くして、しかも登山の技量拔群のガイドさんに、その都度適切な指示をうけて登るほうがその山の魅力を満喫できるようなもので、いまカルチャーセンターで「○○を読む」という講座に人気が高いのも、このような方式によってしか味わうことのできない「学ぶよろこび」が、弘く希求されている証左の一つと考えて良いのではないでしょうか。

ついでながら昭和六〇年に「長野県カルチャーセンター」が発足し講師の依頼をうけた

とき、ご恩返しの一端にもと文字どおりの浅学ではありますが、大先生のヒソミに習って「学ぶよろこび」を受講者の心に育てることを念じ、また今の日本人の漢文の能力も考慮に入れたうえ「現代語で仏典を読む」と銘打って、ホンヤクのテキストによる原典（？）講読を試みたいと相談申し上げた時、先生の目差しに籠められた「我が意を得たり」の輝きは、弟子冥利に尽きるものでありました。いよいよ四年目に『選択集』に取組むことになった最初の日、受講生の中に先生の奥さまと奥さまのお兄さんの顔を発見したときの驚喜を、いまあらためて反芻できるのも、ご夫妻が浄土から発せられるエールにはかならず「還相廻向」の真实性を実感せずにはいられません。

週一回、一二〇分の三四回をもって読了することができたのも、疑問点を月一回の「服部教室」で氷解できるという無比の好条件に支えられてのことでした。もちろんテキスト

吉野法衣店

各大本山御用達浄土宗袈裟法衣専門



〒160-0012
東京都新宿区南元町17
TEL 03-3355-1216
振替 東京21-76372

は先生の『現代語訳選訳集』（大東出版）を利用させて頂きましたが、「白文と現代語訳併記」というこの版のもとになった「全文現代語訳」の『新譯選擇集』の出版が、戦後まもない、しかも浄土宗にとっては古今未曾有の大混乱期であった昭和三年に行われ、『選訳集』撰述七五〇年を記念する恐らく唯一の浄業であったことも顕彰されるべきでありましょう。幸い絶版となつて久しい大東出版社版に代つて、「読み下し文・現代語訳併記」を原則に、さらに親切な配慮の施された新々版が、服部淳一さんの追孝の一環として今秋、文化書院から刊行されると聞いております。「奉戴

八百年」を彩る名著として、永く弘く愛読されることが期待できます。

ところで、生前おききしようと思いつつも、ききそびれてしまったことがあります。最初に教えようとなさつたデキストが『選訳集』だったのに、再開された時は『論註』だったのは、なぜなのか？長いあいだ抱き続けて来たこの疑問を解くカギを、ことしの正月映画『セブン・イヤーズ・イン・チベット』の一場面から把むことができましたので、その報告をするつもりで執つた筆が思わぬ方向を辿つてしまいました。いつか別の機会にお話しいたしましょう。

◆選択集との出会い

『選択集』と私

近藤徹稱

一、仏さまとご縁

尼僧という存在は、一般家庭から見ると特殊な存在なのか「どうして尼僧になったの」とよく聞かれる。私は「仏縁があったからでしょう」と答える。なかには「失恋でもしたのですか」と、まじめとも面白半分ともとれるような質問をする人もある。そんなときには「お気の毒さま、ご期待にそえなくて、私など誰も相手にしてくれなくて、失恋したくてもできなかったんですよ」と答えておく。

実際、私どもには青春時代とよべるものは

なかったように思う。常に死に直面していた時代で、私が男だったら学徒出陣で戦死していたかもしれないと思う。またふるさとの空襲で焼死した十数人の友人のことを思うと、もし私がふるさとにいたら、その仲間入りをしていたかもしれないと思う。

戦争という外から押しよせた大波にさらわれて、私は自分の生きかたを考えざるをえない立場に追いこまれた。選択肢は多々あったが、他の道を選ばないで、仏さまの道を歩みだしたことは不思議なご縁としか言いようがない。

私の家は真言宗の檀家であつたが、私には真言宗に関する記憶が殆どなくて、あるのは、もっぱら禪的雰囲気である。

母は寝室に入る前に仏壇の前に坐る習慣があつた。末っ子の私は幼少のころ、ねむくなると母を仏間にひっぱっていつて、母が『観音経』をあげるのを聞きながら、その横で眠ることが多かった。おかげで「ねんぴかんのりき（念彼観音力）」というお経の一節が子守唄のように今でも私の耳に残っている。

母はまた遠方から托鉢にこられた雲水さんに点心を差しあげたり、お宿をしてあげたりすることも屢々あつて、そのたびに雲水さんが『般若心経』をとなえられるので、私はいつのまにか『心経』をすっかりそらんじてしまった。

母がこのように禪に関心をもつたのは、足利紫山老師という母の叔父さんの影響である。紫山老師は浜松の方広寺で長らく臨済宗の院長をしておられた。自分の修行には厳しい人

だったが、人びとには春風のように温かく接せられ、広く人びとに慕われつつ昭和三十四年に百一歳でなくなっている。

二、浄土教とのご縁

昭和二十一年、敗戦後の混乱のなかで私はふと仏教への親近感をおぼえて、人に勧められるまま知恩院山内の尼衆学校に入った。女子大を出ているからという理由で四年生に飛び入学した。そのころ『選択集』は三年生の教課で、四年生にはその注釈書である『決疑鈔』が読まれていた。『選択集』を読んだことのない者にいきなりその注釈書など読めるわけがない。結局なにもわからないままに、それでも卒業させてもらった。

尼衆学校で学ぶかたわら、私は京都大学の久松真一先生が指導される学道道場に入っていた。毎週土曜の夕方六時に北野の選仏寺に集まって、坐禅一時間半、論究一時

間半という字行一如のはりつめた時を送った。久松先生は真劍勝負をいどむように鋭い切っ先をつきつけて皆を励まされた。学生の中には禪者ばかりでなく、浄土教者も、キリスト教者も科学者もあり、それぞれの立場からの論究は時間を忘れて聞きいる魅力にあふれていた。

しかし仏教の勉強をするのにはやはり大学に入った方がよいと考えて、旧制の大谷大学に入った。戦争中、勉学の道が中断されたあとだけに学びなおしたいという思いが強かったのも事実である。

その後、知恩院に宗学研究所が開設され、そこで私は、浄土宗の諸先生方のご高説を伺いながら浄土教を学ぶ幸運にめぐまれた。ところが『無量寿経』やご法語は読んでも『選択集』は敬遠して読もうとしなかった。自分で読んでみても、初めの一編はなんということもなく判らずに読み終ったからである。

後に私は、天台の高僧であった毘沙門堂の

明禪法印が、その述懐鈔のなかで、「初めの一編は何んということなく判らずに読み終った。二度目には偏った見解であるという非難を招くかも知れないと思いながら読み終った。三回目には深遠な意味があるように思ったので、四回五回と繰り返して読んでゆくに従って、念仏の法門を信じる心が深くなり、少しも疑う心がなくなつた」と述べている文章を見いだして、高僧でも一遍『選択集』を読んだだけではその真意がわからなかつたと仰言っているのに、私のようなものが一度で判らうと思うほうが間違っていたと深く恥じ入った。やがて私が『選択集』を徹底的に読まなければならぬことになるとは、その時には自分でも予想しなかつた。

三、『選択集』とのご縁

一九七五年、私はたまたまアメリカへ行くチャンスにめぐまれて、一年あまり滞在した。

その間に、禪センターでアメリカの若者が熱心に自己を問う姿に接して、鈴木大拙先生の英訳事業の偉大さを改めて知ることができた。鈴木先生は禪とともに親鸞の教えも英訳しておられるので、浄土教といえば親鸞の教えだと思っっているアメリカ人が多かった。現に地域に根ざして浄土教を広めているのは真宗の二世たちである。

法然上人に関する英文の本はと言えば『勅修御伝』の英訳があるだけである。一九二五年に知恩院から出版されている。その中に、『選択集』の概要はのべられているが、『選択集』そのものの英訳はない。それに「五十年も前の文章は古くて現代人には読めませんよ」という声を聞いて、帰国したら『選択集』を英訳しなければと使命のようなものを感じた。ちょうど関西大学のモリス・オーガステインさんが一緒に勉強しようと申しでられたので共訳することになった。しかし私の英語がおぼつかない上に彼の日本語もあやしいもの

だから、一行の文章の上をゆきつ戻りつ何時間も議論するという日が続いて、いつ果てるとも知れなかった。「今まで何人も『選択集』の英訳を手がけた人があったが、むずかしくて皆途中でやめている」という話も何となくわかるような気がした。それだけに何としても完結させたいと願って根気よく続けた。

途中一年ほど中断したこともあったが、何とか終りまでこぎつけた。既に数年がたっていた。訳していて一番困ったことは、何と訳すべきか判らないところに限って、どの参考書も答えてくれなかったことである。

訳文はハワイ大学のジョージ・タナベさんに読んでいただき、その原稿をイースタン・ブデイスト協会に提出したが、枚数が多いからと、ことわられてしまった。

幸い、仏教伝道協会から出版される英訳大蔵経の中の『選択集』に私どもの共訳を採用するという通知があつて喜んだものの、今度、責任者の花山勝友師のご病氣とご遷化と

いう悲報のうちに、やむなく延引となつてしまつた。(今年新しいスタッフで出版された。)

出版が停滞している間に、龍谷大学の稲垣久雄先生が訪ねてこられて、ご自分で出版しておられるジャーナル『ビュア・ランド』に載せさせてほしいということと、一九八三年から八七年まで数回にわけて、英文に手をいれながら掲載して下さつた。

このように多くの方がたのご好意とご協力

をいただいて出版にまでこぎつけたことを感謝すると共に、英訳を通して一人でも多くの方が、法然上人の目ざされた「まこと」の世界に目ざめて下さるように祈るばかりである。

「まこと」とは真実のこと(言、事)、つまり真実の言葉であり、事が真実になるということである。英訳するためとはいえ、本文を何回も読み、その「まこと」に触れることができたことは望外の歓びである。

(吉水尼僧道場道場長)



中里介山

『法然』より

法然上人の念佛本願「撰擇集」は月輪殿の請によつて選んだものであるが、その要請を少々記して見ると、

まず第一段に道緯禪師が聖道浄土の二門を樹て、聖道門を捨て、浄土門に歸するの文、一切衆生が皆佛性があるといふの今に至る迄生死に輪廻して救はれないのは、二種の勝法があるのに、それによつて生死を拂はないせいである。その二種の勝法とは何ぞ、聖道門と浄土門であるが、この二つの門のうち聖道門はなかく修行がむづかしく、末世の凡夫はこの聖道の修行によつて救はれることは出来ない、それが浄土の門に行くに極めて安らかな修行によつて救はれる方便がある。そこで、今時の人は聖道門を捨てて浄土門に歸するがよいといふ。

阿彌陀如来は他の行を以て往生の本願とせず、只念佛をもつて本願とする。

無量壽經上卷の本願の文を引いて云ふ、念佛は最も優れ餘行は劣る、それは名號の中には萬徳が備はつてゐるからである。例へば家といへば、その建物全部を稱へけれども、棟とか梁とか柱とか縁とか云つたのでは一部分しか含まれていなる、そこで家といへば全體を云ふように、彌陀の名號を稱へれば全體の功徳に呼びかけることが出来る。佛像を作つたり、塔を建てたりすることが本願ならば貧乏人は往生出来ないことになる。智慧があり才學の高いのをもつて本願とすれば愚鈍不知のものは往生の望みがなくなる。自戒自律を以て本願とすれば破戒無戒の人は永久に救はれないということになる。そこで阿彌陀如来が法藏比丘の昔平等の慈悲に催されて普く一切を救はんが爲に唱名念佛の本願を建てられたのである。

右の主旨を多くの經文を引いてつづきに述べられたのが即ち撰擇本願念佛集である。(昭和六年 三省堂版)

『選択本願念仏集』 ゆかりの

寺々

編集部



『選択本願念仏集』(以下『選択集』)を今に伝える寺院が三か寺ある。

京都の廬山天台講寺(円浄宗)、法然院(単立)、そして奈良の當麻寺奥院(浄土宗)だ。

この三つの寺の紹介と、それぞれに残る『選択集』に焦点をあててみる。

廬山天台講寺(廬山寺)

京都府京都市上京区寺町広小路上ル

京都には神社仏閣が多い。京都の人が「そうどす、この前の火事で焼けまして……」という時の火事は応仁の乱の兵火をさす、と聞いたことがある。応仁の乱!? 驚きとともになるほど古都京都、と恐れ入ったのを覚えている。

その京都の御所の近くに廬山寺はある。

法然上人の弟子、覚諭上人が一二五年に出雲路に結んだ草庵、廬山天台講寺。この廬山天台講寺の三世だった明導照源上人は、九三八年に天台の慈恵大師良源(元三大師)が北山に開いた興願金剛院の管主を兼務していたが、二つの寺が離れていて仕事に差し障りがでると、二つの寺を一方所に集めた。同時にそれまでともに天台だった両寺を円、浄土、戒、密の四修兼学道場としたのが、この廬山寺である。その後、応仁の乱(一四六七年)の兵火で消失、一五七三年に現在地



京都駅ビルとのぞみ

に再興された。

現在、廬山寺は円浄宗という宗派の本山である。もともと天台から四修兼学道場になった廬山寺だが、寺院の本末制度統合令解除の時に、あえて末寺や塔頭寺院を入れずに単独で宗派をおこしたからである。

円浄宗の円とは天台の法華経を、浄とは法然の浄土教をさす。朝題目、夕念仏、そして昼には坐禪という天台宗から四修兼学道場となった「廬山寺らしさ」が、この円浄宗に脈打っているのである。

さて、重要文化財の『選択集』も「廬山寺本」と呼ばれ、実物は京都博物館にあるが、管長の町田泰宣師は『選択集』をこう読まれている。

「冒頭の南無阿弥陀仏・往生之業 念佛爲先が法然上人の記されたところですが、念仏を先と表現されたところに法然上人の真意があるように思えます。法然上人の回りには民衆から優秀なお弟子さんたちまで、いろいろな人々がいましたからね」

廬山寺は京都御所の東側にあり、浄土宗の大本山清浄華院と並んでいる。ちなみに清浄華院ももとは天台宗だ。

元三大師の祈願寺として五千人以上の信者がいる廬山寺だ



廬山寺開山の元三大師堂

が、節分の鬼の法楽と呼ばれる悪疫退散の行事や、紫式部の
庭園も有名で、また拝観できる寺宝も数多いだけに機会を作
って訪れてみてはいかがだろうか。



京都御所



鎌山寺の庭園

當麻寺奥院

奈良県北葛城郡當麻町當麻一二六三

奈良県北葛城郡當麻町當麻に奥院はある。この奥院にある『選択集』は浄土宗の宗宝だが、あらたに重要文化財の指定を受けることになった。前述の「廬山寺本」とともに重要文化財になったわけだが、奥院にはもちろん、『選択本願念仏集』奉戴八百年を迎える浄土宗によい知らせだ。

さて、奥院は當麻曼陀羅で知られる當麻寺の曼陀羅堂の右奥に佇む浄土宗の寺院である。往生院とも呼ぶこの寺は一三七〇年、浄土宗大本山知恩院の第十二世誓阿普観上人が、南北朝の戦乱にあった京都からこの静かな當麻に知恩院の奥の院として建立した寺で、普観上人は勅許をえて、元祖法然上人の御影像などの宝物も携えてきた。

奥院を迎え入れた當麻寺の創建は古く、六二二年に遡る。聖徳太子の弟が二上山の麓に「萬法藏院禪林寺」と号して建



近鉄の當麻寺駅

立、六八一年現在地に移転し、地方豪族の當麻氏の氏寺となり、やがて「當麻寺」と呼ばれるようになった當麻寺はもと
は南都六宗のひとつ、三論宗だったが、空海の時代に真言宗
に改宗。浄土信仰が広がる平安末期から鎌倉時代にかけて、西
方浄土の有り様を描いた當麻曼陀羅が篤く信仰されたが、浄
土宗の奥院の建立でさらに信仰の地として多くの人々が参拝
し、浄土信仰の一大聖地となったのである。

この當麻曼陀羅だが、いわば大きな一枚の紙芝居のような
もので、字が読めなくとも極楽の様子が拝むことができる大
きな掛け軸だ。その上、この當麻曼陀羅は中将姫の物語りと
も結び付いている。物語の内容は省くが、中将姫が極楽から
の来迎をうける様子を演じたのが練り供養で、今も當麻寺最
大の行事として続いている。現在は五月十四日に厳修される
が、近隣の学校も午後を休校にするなど、練り供養は地域と
一体化した大きな行事となっている。

第六十世になられる川中光教住職が語る。

「この寺の成り立ちからいいまでも、ここに残る『選択集』
は門主（知恩院の住職）用のものだったと思います。読み下
しも複数の方によるでしょうし、いろいろ調べてみたいと思
っています」



奥院から東西両塔を望む

當麻寺の住職は真言宗と浄土宗が一年交代で務めるが、法要は奥院住職がいつも行うという。三十歳代で奥院住職となつてから、練り供養を始め多くの法要を努めてきた川中住職はその重責を果たしつつ、『選択集』の研究にも余念がないようだ。

誌面の都合上、境内や寺宝の紹介は省くが、本誌連載の「寺院紀行」の候補にあげさせていただきたい名刹である。

中将姫は出家し本願尼となつた



奥院の庭園



鹿ヶ谷・法然院

京都府京都市左京区鹿ヶ谷御所ノ段町三十

さて、再び京都に戻る。

京の町の東、哲学の道から入ったところ、銀閣寺のすぐ南に法然院はある。東山三十六峯の一つ善気山の山麓に広がる境内は自然の懷に抱かれ、四季折々の風情あふれるところだ。

そしてこの地は『選択集』を残した法然上人が弟子の安樂、往蓮とともに念仏三昧をし、六時礼讃を称えられた地だ。

法然院の正式名称は善気山法然院萬無教寺といい、単立（たんにつ）の寺だ。単立とはどの宗派にも属さない寺院のことをいう。法然院は一六八〇年浄土宗の総本山知恩院の三八世萬無和尚によって現在の伽藍が築かれた浄土宗の寺院だったが、昭和二十八年に単立となった。だが、本尊は阿弥陀如来、また念仏道場として多くの浄土宗僧侶がこの寺に入るなど、浄土宗との関わりは深い。

京都市中を流れる鴨川



第三十一世の梶田真章貫主も浄土宗寺院の生まれだ。その梶田貫主に時間をいただいた。

「なぜ、『選択集』がここに残ったかは不思議ですね。学園寺として書物を大事にしていたとは思いますが、こういう寺は他にいくらかでもあるはずですし……」

また、『選択集』の最後に法然上人が、これを読み終わったら壁に塗り込んでください、と書いてあることについては「なぜ、上人がそう書いたかはわかりませんが、誤解を生むことを恐れたからでしょうか」とこちらの不躺な質問に答えてくれた。

観光客が多い京都では、やはり有名寺院に人気が集まる。

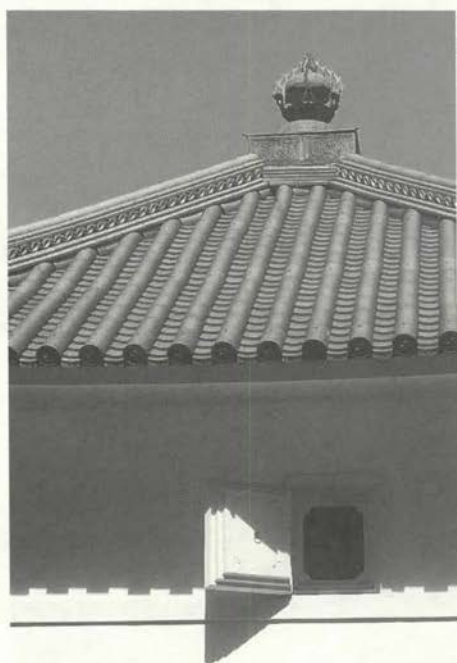
哲学の道からちよつと入った法然院を訪れる観光客はリピーターが多いという。しかしここ数年、その山門からの佇まいや白砂壇、四季折々の鼻を二十五菩薩の象徴とし本尊前に散華する莊嚴などが口コミで広がり、年々どころか季節ごとに観光客が増えているという。確かにこじんまりした落ち着きある寺院で、ちよつと足をのばす価値は十分過ぎるほどある。墓地には土まんじゅうの上に小さな石塔が載った法然上人塔や、インドで仏教を保護した阿育王の塔などもあり、伽藍ともども十分に楽しめる。



法然院の山門への階段



境内。手前が白砂壇



法然院経蔵

『選択集』縁の寺々 《解説》『選択集』の 原本を求めて

林田康順

「お宝拝見！」

昨今、骨董品がお茶の間を賑わせています。その道の大家が自ら手がけた絵画や彫刻、焼き物の類は実に貴重ですし、文豪達の生原稿も記念館に所狭しと陳列されています。

今年平成十年は、建久九年春三月法然上人が『選択集』をお著しになり浄土宗のみ教えを大成されてから八百年目を迎えます。その間、『選択集』の教えの尊さから、多くの先徳方があつい信仰を胸に『選択集』を書写され、その教えを伝えようと次々と出版されてきました。なかでも、法然上人が自ら筆をとられた『選択集』の写本や最古の版本こそは、お念仏の道に生き生かされている私たちにとってまぎれもなく「お宝中のお宝」でありましょう。そうした古い形を保めている三種類の『選択集』を紹介しましょう。

1、廬山寺蔵『選択集』（廬山寺本）

廬山寺本は、法然上人が九条兼実公に謹呈

する以前の草稿本として広く「稿本」と呼ばれる写本です。一部の箇所を除いて返り点や訓読・送り仮名のない白文で記されています。

選択本願念仏集

南無阿弥陀佛 往生之業／念佛為先

この冒頭の二十一文字は法然上人のご自筆と伝えられています。そして、この箇所を模写し額や軸にして広く貴ばれています。

本文は、法然上人の弟子、安樂房や真観房等によって記されています。後に成立した諸本と比べると小さく書かれた補足箇所や訂正箇所が多く、移動が指示されている箇所もあり、草稿本としての面影が偲ばれます。特に第三章の第十八念仏往生願が成就されているか否かについての問答である百十六文字と第十二章の『無量寿経』と『観無量寿経』の成立前後についての問答である五百七十二文字とは粹で囲まれており、他の諸本では見られなくなった代表的な部分です。正に廬山寺本は、法然上人による『選択集』撰述当時の息

吹が聞こえてくる大切な写本なのです。（重要文化財指定）

2、當麻寺奥院『選択集』（往生院本）

先の廬山寺本と異なり往生院本は、返り点や訓読・送り仮名が施され読みやすい写本です。末尾に付された一文（奥書）には次のようにあります。

元久元年十一月二十八日書寫了

この記述から、元久元年（二二〇四年）、法然上人ご在世時に書寫されたことが分かります。そして、同じページの最終行には次のようにあります。

元久元年十二月十七日 源空花押

このように同年十二月に法然上人がご覧になり、署名され花押を施されたと記されているのです。こうした貴重な本であることから、僧侶養成に用いられる『選択集』（土川勸学宗学興隆会刊行本）の元となる本（底本）として採用されるなど、広く一般書店に陳列され

ている各種『選択集』の基本的テキストとして重んぜられているのです。(本年四月、重要文化財指定)

3、法然院蔵『選択集』(延応本)

先の二種の写本とは異なり延応本は版本です。その末尾に付された刊記には次のようにあります。

延応第一之曆沽洗第六之点、根源正本を校し、展転錯謬を直す…(原漢文)

この記述から、延応元年(一二三九年)三月六日に開版されたものであることが分かります。ここに記されているように、「根源正本」と呼ばれる『選択集』を対校・整理して成立したことが分かります。本文のみ活字版で、返り点や訓読・送り仮名は後の書き入れです。建暦年間に開版された建暦本が伝わらない現在、版本としては最古の『選択集』です。

先の廬山寺本や往生院本のように法然上人

ご自身の目を通しているわけではないようです。けれども、広く流通されることを目的として開版された以上、当時の出版状況から考えれば多くの僧俗の労苦が必要であり、それだけ信頼性も高いといえるでしょう。そうした意味でも実に価値の高い版本です。

残念ながら、これら三種類の『選択集』を直接手にとって拝読することは叶いません。けれども、次のような影印版を拝読することは可能です。

- ①『重要文化財 廬山寺蔵選択本願念仏集(原寸原装版)』(昭和五十四年六月、法蔵館発行)(藤堂恭俊師、木下正雄師解説)
- ②水谷真成師監修『延応本／往生院本 選択本願念仏集』(昭和五十五年十一月、法蔵館発行)

おそらく前者は書店などで手に入りませんので図書館などでご覧いただくこととなるでしょう。後者は書店でも購入可能です。



紙面の都合上、三種類の尊い『選択集』に限ってみてまいりました。多くの先徳方によってこうした尊い『選択集』が大切に守られ、念仏信仰の灯となってきました。私たちは、

そうした先徳のご尽力に心から感謝し、お念仏を称えて、そのみ教えがより一層広がるように心がけたいものです。

合掌。

大正大学講師

法然上人の 善導大師観

高橋弘次

一、はじめに

法然上人（一二三三～一二二二）が浄土宗を開宗されたのは、承安五年（一一七五）上人四十三歳の時であり、それは善導大師（六一三～六八一）の著述『観無量寿仏経疏』（次下『観経疏』という）に出会ったことによるといわれています。この時のあり様を法然上人のお弟子・二祖聖光房弁長上人（一一六二～一二三八）は『徹選択本願念仏集』上に、

善導和尚の観経の疏に、一心専念^ニ弥陀名号^一 行往坐臥 不^レ問^ニ時節久

近^ニ念^ニ念^ニ不^レ捨^ニ捨^ニ者^一 是名^ニ正定之業^一

順^ニ彼仏願^一 故^ニといえる文を見得る

ののち、われらがごとき無智の身は、ひとえにこの文をあおぎ、もはらこのことわりをたのみ、念念不捨の称名を修して、決定往生の業因にそなうれば、ただ善導の遺教を信するのみにあらず、亦あつく弥陀の弘願に順ず。順彼仏願故の文たま

しいにそみ、心にとどまるのみ。
と伝えておられます。

法然上人は善導大師の『観経疏』（散善義）

によって、浄土宗を開宗されたのであります。

それ以来法然上人は「偏に善導一師に依る」

（『選択集』第十六章）と表明されて、この姿勢

を崩すことなく貫かれたのであります。『無量

寿経』を解釈されるときも、巻頭に「正に善

導に依り、傍に諸師に依つて愚懷を述ぶ」と

あり、『観無量寿経』を解釈されるときも、巻頭

に「諸師の解釈多しと雖も、今は則ち正しく

善導に依り、傍に余師の釈をもつて善導を輔

助す」とあります。また『阿弥陀経』を解釈

されるときも、文中に「経（浄土三部経）の大

旨、念仏の深義に至つては、専ら善導和尚を

もつて、用いて依憑とす」とあります。

いうならば『浄土三部経』の解説は善導大

師の解釈を通してなされるべきで、自分勝手

な解説は許されない、という姿勢であります。

こうした法然上人の姿勢によって、わが国の

念仏の教え（浄土教）は成立するのであります。

すが、それは善導大師の『観経疏』をほかに
して、わが国の浄土教、今日の法然上人の浄
土宗、証空上人（一一七七―一二四七）の西
山浄土宗も、親鸞聖人（一一七三―一二六二）
の浄土真宗もありえなかった、ということが
できるのであります。

二、『観経疏』との出会い

善導大師が生存されたのは初唐の時代であ
り、わが国の留学僧もさかんに入唐・留学し
ていた時期であり、日唐交流貿易もさかんに
おこなわれており、当時、『観無量寿経』の浄
土変相図や善導大師の著作もわが国に多く持
ち帰られたことは充分に推測されるのであり
ます。聖徳太子の法隆寺に極楽浄土の壁画が
残り、太子のために天寿図繡帳が造られ、天
平の盛期（天平宝字七年―七六三）には、當
麻寺の浄土大變相図、つまり當麻曼陀羅が造
られ、それが善導大師の『観経疏』の特色あ
る説相に合致することも指摘されているので

あります。

善導大師の著作がわが国の天平写経に書写されていることは早くから知られているのであります。つまり善導大師の著作のほとんどが、天平年間にわが国に将来され書写されていたということであります。観経疏、西方法事讃、往生礼讃、六時行道、般舟讃などであり、善導大師の五部九巻といわれている著作のほとんどであります。比叡山の浄土教の祖師、恵心僧都の『往生要集』、源隆国と延暦寺阿闍梨による『安養集』、さらに永観の『往生拾因』など、法然上人以前の浄土教祖師の著作のなかに、善導大師の著作が介在して、大きくその思想的影響をあたえていたことも否めない事実であります。

法然上人が善導大師の『観経疏』の文に出会ったのも、恵心僧都の『往生要集』のなかに引かれている善導大師の『往生礼讃』の「念念相續して畢命を期とするものは、十は即ち十生じ、百は即ち百生ず」とある文によって、善導大師の『観経疏』に近づいてい

かれたものと思われるのであります。法然上人は前関白藤原兼実の要請によりまして『選撰本願念仏集』を撰述されましたが、その『選撰集』の最後のところてつぎのように記しておられます。

静におもんみれば、善導の観経の疏は、これ西方の指南・行者の目足なり。しかればすなわち西方の行人かならずすべからく珍敬すべし。——中略——ここにおいて貧道（私は）、昔この典（観経疏）を披閱してはば素意を識り、立ちどころに余行を捨てて、云に念仏に帰す。それよりこのかた今日に至るまで、自行化他ただ念仏を緯とす。しかればすなわちまれに津を問うものには、示すに西方の通津をもつてし、たまたま行を尋ぬるものには、誨えるに念仏の別行をもつてす。これを信するものは多く、信ぜざるものは少し。浄土の教、時機を叩きて行運にあたり、念仏の行、水月を感じて昇降をえたり。

法然上人が善導大師の『観経疏』の文に出

会いたことによつて、念仏の教えを自らの教えとして、またすべての人びとの救いの教えとして、いかに決定づけられたかを窺い知ることができるのであります。「貧道ひんどう法然上人ご自身の謙遜語、昔この典でん『観経疏』をいう」を披閲して」とは、法然上人が恵心僧都の『往生要集』に導かれて、善導大師の『観経疏』に出会った時のことであります。そして「それよりこのかた今日に至るまで、自行化他ただ念仏を緯こととす」というのであります。『観経疏』において「念仏の教え」を発見、確信して、浄土開宗して以来は、自らも念仏を修し、他に誨おしええるのも念仏の教えであつたといふのであります。

三、三昧発得の人師

善導大師の『観経疏』には、人間だれもがわけへだてなく救われていく、凡夫が報土（浄土）に往生していく教えを、中国においてはじめて説き示されているのであります。それ

はその『観経疏』を『古今楷定之疏』といい、善導大師によつてはじめて『観経』の真意が開顯されたことをいい表わしています。そのことを善導大師は『観経疏』の終りにおいて、諸師の『観経』を解釈しているなかにおいて、自分がつとも『観経』の真意を開顯しえたのは、たんに『観経』の文意に解釈をほどこしたのではなく、深い宗教経験のなかに、仏の照鑑をたのみ、靈驗を請うて、そのうえで仏の指授によるものであることを、自ら記しておられます。

このことについて法然上人は、『選択集』のおわりに、

なかについて毎夜夢中にありて玄義を指授す。僧はおそらくはこれ弥陀の応現ならん。しからばいふべし。この疏（観経疏）はこれ弥陀の伝説なりと。いかにいわんや、大唐に相伝えていわく、善導はこれ弥陀の化身なりと。しからばいふべし。またこの文（観経疏）はこれ弥陀の直説なりと。すでに写さんと欲するも

のは、もはら経法のごとくせよといえり。
この言は誠なるかな。

と述べておられます。このように法然上人は、善導大師の『観経疏』を、まさに「弥陀の伝説」、「弥陀の直説」とまでいって、一句一字も加減することを許されなかつたのであります。いかに『観経疏』を尊重されたかを窺い知ることができます。

また法然上人は善導大師の『観経疏』によつて「念仏の教え」を確信し、その弘通にこころを砕くのでありますが、この間の事情を『法然上人伝記』（醍醐本）に、

ただし自身の出離においては、すでに思い定めおわんぬ。他人のためにこれを弘めんと欲すといえども、時機かないがたし。ゆえに煩いて眠る夢の中に、紫雲大いにたなびいて、日本国を覆う。たちまち生身の善導に値いたてまつる。腰より下は金色なり。

と記されています。法然上人は夢定中において、半金色の善導大師のお姿を感じて、念

仏の教えに強い確信をえて、念仏の弘通につとめられるのであります。

法然上人におけるこうした宗教経験が、念仏の教えに強い確信をもたせたことはいうまでもありませんが、いま一つ「偏に善導一師に依る」と法然上人を言わしめたのは、「善導和尚はこれ三昧発得の人なり。道において既にその証あり。故にしばらくこれを用いる」（『選択集』）とありますように、善導大師が三昧発得の人であつたからであります。

四、善導大師の十徳

法然上人は善導大師のお徳を称えて『善導十徳』という文を記しておられます。それは『漢語灯録』九に、

一、至誠念仏徳——眞実の心をこめて一心に称名念仏したこと。

二、三昧発得徳——称名念仏の深まりのなか定中（精神統一）において浄土の莊嚴（見仏）を見たこと。

三^{ニハ} 光徒^{ニハ}口出^ル徳——阿弥陀仏を念ずる一声ごとに、口から光明（化仏）が出たこと。

四^{ニハ} 為^レ師決^ス疑^フ徳——師僧で

ある道綽禪師の疑問を解決し往生せしめたこと。

五^{ニハ} 造^ル疏感^ス夢^ノ徳——觀經疏を撰述する前後に靈驗を得たこと。

六^{ニハ} 化^ス導盛^ニ廣^ニ徳——熱烈な念仏信仰によつて人びとを無数に教化したこと。

七^{ニハ} 遺^ス身入^リ滅^ス徳——浄土に往生したいと願つて、西に向つて柳の樹上から身を投じた信者のあつたこと。

八^{ニハ} 帝^ノ王^ノ婦^ノ敬^ス徳——当時の皇帝高宗

（妃は則天武后）が、善導の威徳を知り、入

滅後に光明寺の寺額を下賜したこと。

九^{ニハ} 遺^ス文放^ス光^ス徳——中唐の少康後善導と呼ばれた）が、善導の著書から光明が放たれているのを見たこと。

十^{ニハ} 形^ノ像^ノ神^ノ變^ノ徳——少康が、善導の像が不思議な力

（神變）をあらわすのを見たこと。

このように記されています。この法然上人の『善導十徳』は、善導大師の著作やいろいろな伝記にもとづいて、善導大師の威徳を称えたものであります。史実としては認めがたい内容もありますが、法然上人が善導大師の人格、威徳をいかに称えたかを知ることができます。

（佛教大学学長）

『選択』とは何か？

ひろさちや

法然上人は平安時代の仏教者です。

法然上人を鎌倉時代の仏教者の一人に数える人が多いようですが、鎌倉幕府が開かれたのは法然上人の六十歳のとき、八十歳で入滅された上人は、最後の二十年、四分の一だけを鎌倉時代の人として過ごされました。人生の四分の三は平安時代の人です。

それに、浄土宗の立宗は法然上人四十三歳のとき、平安時代の出来事です。ただ、『選択本願念仏集』を著されたのは、鎌倉時代になってからです。

*

わたしが平安時代にこだわっているのは、平安時代の日本の仏教者の仕事は、仏教を、—— 選択すること ——

だったからです。仏教はインドのお釈迦さまにはじまるものですが、お釈迦さまの教えは「八万四千の法門」と言われているように、さまざまな法門（教えの入口）があります。その多数の法門のうち、自分はどの入口から入るか、仏教者にとって大事な選択です。

その選択の仕事が、平安時代の仏教者に課せられたものでした。

そして、まず、伝教大師最澄は、大乘仏教を自己の仏教として選択しました。それは、小乗仏教を劣った仏教として捨てることを意味します。

弘法大師空海は、密教を選択しました。それは顕教よりも次元の高い仏教として、密教を位置づけたわけです。

伝教大師、弘法大師とともに平安初期の仏教者です。法然上人は平安末期の仏教者。そのあいだに三百五十年ばかりの時間がありますが、法然上人も同じく仏教の選択をされました。その選択は、聖道門の仏教ではなく、浄土門の仏教を選ぶことでありました。

この平安時代の三人の仏教者——伝教大師最澄、弘法大師空海、法然上人——が仏教の選択をし、その選択の上に立って、その選択をより深める仕事をしたのが、次の鎌倉時代の仏教者です。具体的にいえば、親鸞聖人、道元禪師、日蓮聖人です。わたしはそうように考え

ています。

*

仏教を選択するということは、どのような意味でしょうか。

お釈迦さまは入滅の直前に、

「自灯明・法灯明」

と遺言されました。お釈迦さまが入滅されると、この世は闇になります。その闇の中を、わたしたちは歩かねばなりません。そのとき、何が灯明になるでしょうか。

もちろん、お釈迦さまが教えられた「法」が灯明になります。「法」とは真理・教えといった意味です。お釈迦さまが教えられた八万四千の法門は、この世の闇を照らしてくれる灯明です。

それが「法灯明」です。

だが、その前に、お釈迦さまは「自灯明」と言われました。あなたがたは、自分自身を灯明にしなさい、と言われたのです。

なぜでしょうか……？

人間はみんな同じではないからです。

さまざまなタイプの人間がいます。すべての人は、自分にふさわしい道歩むべきです。他人の道歩んでも、それでその人が自分の人生を生きたことにはなりません。

また、時代が違えば、道も変わってきます。さらに、土地が違えば、道も違ってきます。

お釈迦さまの時代、インドの民衆が歩むことのできた道を、それから千五百年後の日本において歩めるかどうか、きつと無理だと思っています。

お釈迦さまはそのことをよく知っておられました。だから、「自灯明」を言われたのです。あなたがたは、自分にふさわしい道を見つけて、その道をしっかりと歩むのですよ……と。それ故、わたしたちは選択をせねばなりません。いま・ここで・わたしが歩むべき道は何か、を。

日本の平安時代の仏教者は、その選択をしました。インドから中国を経て伝わってきた仏教を、日本という土地において実践するために、しっかりと仏教を選択する必要性を彼

らは知っていたのです。奈良時代の仏教は、いわば輸入仏教であり、日本人の主体性による選択はなされていなかったのですが、平安時代の最澄上人、空海上人、法然上人の三人が、その選択をしました。その選択によって、はじめて、

——日本仏教——

が成立したといえます。わたしはそのように、三人の高僧を位置づけています。

*

いささか繰り返しになりますが、最澄上人は、小乗仏教を斥け、大乘仏教を選択しました。小乗仏教は本質的に出家仏教であり、わが日本の土地にはふさわしくありません。だから、最澄上人は、日本にふさわしい仏教として大乘仏教を選んだのです。

空海上人は、密教こそが最上の仏教であるとして、顕教を斥けて密教を選びました。

法然上人は浄土門の仏教を選びました。だが、法然上人のこの選択は、最澄上人、空海上人の選択と、ちよつと基準が違ってい

ます。

というのは、最澄上人や空海上人は、仏教を優劣の基準で選んでおられます。大乘仏教のほうが小乗仏教よりもすばらしいから大乘仏教を選び、顕教よりも密教のほうがすばらしいから密教を選択されたのです。

法然上人は違います。法然上人は聖道門の仏教ではなしに浄土門の仏教を選択されましたが、それは浄土門の仏教のほうが優れているからではありません。そうではなくて、いくら優れた仏教であっても、末法の世に生きるわたしの救いにならないから、しばらく聖道門の仏教を捨てられたのです。そして、このわたしのための仏教として浄土門の仏教を選択されました。

わたしは、この選択の基準の違いを、

——ディラー（販売業者）の論理

——ユーザー（消費者）の論理——

と名づけています。最澄上人や空海上人はディラーの立場から仏教を選択されました。

この商品がすばらしいですよ……と売るのがディラーの論理です。しかし、いくらすばらしい商品でも、それを買う資金のない消費者もいれば、それを買っても利用できない人もいます。そういうユーザーの都合のほうから仏教を選択されたのが法然上人です。末法の世に生きる民衆の立場からの選択でした。

その意味で、わたしは、法然上人のこの選択こそ、お釈迦さまの「自灯明」につながるものだと思っています。つまり、法然上人は、わたしたち凡夫がそれぞれの仏道を歩ませていただけるように、浄土門の仏教を選択してくださったのです。

だとすれば、わたしたちが毎日の生活の中でお念仏を称えさせていただくことが、法然上人の選択に応える方法だと思えます。法然上人は、わたしたちのために、お念仏の法門を選択してくださったからです。

（評論家）

逆転の発想

—『選択集』の示すもの—

梶村 昇

サッチャー首相 のこと

古い話だが昭和五十七年、イギリスのサッチャー首相が来日し、筑波学園都市を見学されたことがあった。その時、

ヨーロッパで生まれた基礎技術を日本はよくもここまで応用したものです。

と感想を漏らされたという。褒め言葉ではあるが、模倣のうまい日本人が、ヨーロッパで生まれた学問をすっかり取り込んで、本家を凌ぐ経済発展をしていることへの皮肉が多分にまじっていると思った。「学ぶ」とは「真似る」ことから始まるといわれるから、模倣は必ずしも悪いとは思わないが、サッチャーさんしてみれば、

学問は初めて創造することが大事なのですよ。

とおっしゃりたかったのだと思う。その通り

だが、それなら、

日本人も模倣ばかりしてきたわけではありません。今から八百年も前に、あなたと同じことを言って、世界の宗教思想を逆転された方がおります。法然上人です。

と申し上げたい。法然上人はこう述べている。学問ははじめてみたつるは、きはめて大事なり、師の説を伝習するはやすきなり（『四十八卷伝』巻五）。

と。「はじめてみたつる」とは、漢字で書くと「創見」となる。「学問は創見すること」が大事であつて、師匠の説を伝え習うことなど、たやすいことだ」というのである。まさにサッチャーさんの言いたかつたことではないか。

師の説を 伝え習うこと

法然上人にこんなエピソードがある。

上人がまた比叡山黒谷の叡空上人の許で

学んでいた時のことである。ある日、念仏について叡空上人と論じあつた。

念仏というのは、文字通り仏を念ずること、仏道修行の基本的行法の一つであるから、念ずる方法にもいろいろある。

叡空上人は、仏のお姿を心に観する念仏（観相念仏）がもつとも優れていると言ひ、法然上人は、口に南無阿弥陀仏を称える念仏（称名念仏）が優れていると言ひ、双方互いに根拠を示して譲らなかつた。すると叡空上人が、先のお師匠である良忍上人も観相念仏が優れていると仰せられている。

ときめつけるように言われた。良忍上人（一〇七三―一一三三）という方は、融通念仏宗の祖で、歴史に名をとどめる名僧である。その方が言っているというのは、大変な根拠になろう。ところが法然上人は、

良忍上人といつても、ただ先にお生まれになつただけのことではありませんか。

と言つたのである（『四十八卷伝』巻六）。

天下の良忍上人をつかまえて、「ただ先に生まれただけではないか」とは、まことに傲慢な言い分のように聞こえようが、これは驕慢でも慢罵でもなく、法然上人は求道の間に、良忍上人も含め、師の説を伝え習いはしてきしたが、そこに自分の目指しているものの答を見出すことができなかったからであろう。

法然上人の 目指したもの

法然上人が目指していたものは、万人がひとしく救われる教えは何か、ということであった。今までの仏教が、それを説いていなかったというのではない。たしかに説いてはいった。上人はそれをこう述べている。

仏の教えにはいろいろあるが、結局は戒・定・慧の三学を守れということ以外のものではない（『四十八卷伝』卷二六）。

と。要するに今までの仏教は、戒・定・慧の

三学を守って修行せよと説いていたというのである。これに対し上人は続けて、こう告白している。

戒を守れといわれても、その戒の一戒すら保てない。心を定めよといわれても、心は猿が枝から枝につたわるように散乱して定まることがない。煩惱を断ずる知恵を学べといわれても、その術もない（卷二六）。

と。「自分は三学を守れるような器ではない」というのである。後に『選択集』では、このことを敷衍して、こう記している。

もしも仏像や塔を寺を寄進することによって救われるのだとしたら、いったい貧乏人はどうしたらよいのだろうか。もしも頭がよく才能が豊かで多くの經典を学ぶことにより救いにあずかれるのだとしたら、頭のよくないお経もろくに理解できない人はどうなるのであろうか。もしも戒律をきちんと守ることによって救われるのだとしたら、意思が弱く、いつも罪に流されていくような人は、どうしたら救われるというの

であろうか。(第三章・取意)

と。カトリック司祭の井上治師が、

もう三十年も前、『選択集』の中から、この法然上人のお言葉に接したときの、涙の出るような感動を、私は今も決して忘れることはできません(『知恩』平成十年二月号)。

と述べておられるが、真実の声は、時空を越えて感応しあうものであることを、しみじみと思わせられる。

ともかくこのような人々は「伝え習った師の説」によっては救われない。とすれば何によって救われるというのであろうか。そこで「はじめてみたつる」以外に方法がないことになる。上人が「学問ははじめてみたつるは、きはめて大事なり」と述べたのは、単に一般論を言ったのではなく、この道以外に進むべき道がないという、ぎりぎりの立場に立たされての言葉であつたと思う。

「はじめてみたつる」こと

こうして上人の「はじめてみたつる」旅が始まった。しかしこの行脚は、そもそもの初めから無奈である。なぜなら、戒・定・慧三学を守ることが仏教の基本であるというのに、それを守らないで救われる道を仏教の中に探そうというのであるから、ジレンマと言おうか、二律背反もよいところである。これを見出だすことは容易なことではない。しかしここに世界の宗教思想を逆転する原点があるといえる。

考えてももらいたい。仏教にしても、キリスト教、イスラム教にしても、基本的には、善いことも積み重ねて、救われていこうと教えている。それができない者には、できるように努めなさいと説く。しかしそう言われて、できるようなことであれば、何も悩みはしな

い。どう教えられてもできないから苦しんでいるのではないか。それでもそうした人の救いについては何も説かず、相変わらず、できるように努めなさいと言うだけである。世界の宗教の基本は、みんなこうである。仮にこれを善人・悪人という名で呼べば、今の世界の宗教は、あくまでも「善人建て」の宗教であるといえる。

しかしおかしいと思わないか。実際にここという善人なる者が、存在するというのであろうか。ここで、いる、いないと議論するつもりはない。それぞれ自分の胸に手を当てて考えてもらえば分かることである。存在するものは悪人だけであって、三学を守っている人など、少なくとも私の周りには一人もいない。キリスト教、イスラム教にしても同じである。にも拘らずその存在もしない善人のために、救済の論理を精緻に組み立てているのが今の宗教界ではなからうか。おかしいとか言い様がない。そこで仕方なく、悪人でも善人のような顔をして暮らすか、頭を垂れて

従っていくか、開き直って悪人のまま生きていくか、というようなことになってしまふ。

逆転の 発想

法然上人は、長い求道の末に、ついに三学の器でないもの、すなわち悪人の救われる道に邂逅した。

一心に専ら阿弥陀仏のみ名を称え、行住坐臥、時間の長短を問わず、念々片時も称名を止めないものを正定業しやうていごふと名づける。なぜかといえば、それが阿弥陀仏の本願に添うものであるからである（第二章）。

というのである。阿弥陀仏の本願に乗じて、ひたすら念仏を称えれば、極楽浄土に往生できる。そこには戒も定も慧も要らない。これが悪人の救われる道である。しかもこの教えは、釈尊出世の本懐であると明らかにされた。これは「善人建て」の宗教ではない。それ

仙内隆案 藤書 須著

色紙・茶掛けなど揮毫の種本

仏教四文字熟語辞典

上・下 各3400円

極楽浄土（生も死も悦べる世界） 1000円

宗教人石川啄木 1440円

仏教故事名言辞典 4000円

仏教用語事典 13000円

仏教ことわざ事典 38000円

●お申し込みは
ハガキで下記まで
(一割引き)

〒040-0055

函館市船見町18-14

称名寺

を百八十度転回して、初めから戒も定も慧も守れない悪人のために説かれた「悪人建て」の教えである。悪人は頭を垂れて「善人建て」の宗教に従っていく必要はなくなった。

『選択集』はこの教えの総決算の書である。

『選択集』によって世界の宗教思想は逆転されたといえる。しかもこの教えは、弥陀、釈迦、諸仏によって選択されたものである（『選

択集』第十六章）。人間を超えた大いなるものによって選びぬかれた教えなのである。法然上人は長い遍歴の末に、この教えを「はじめてみたつる」大事にめぐりあえたのである。『選択集』が日本文化に創造の栄誉を与え、世界文化史上の不可欠の書であることを私は誇りとしている。

（浄土宗総合研究所客員教授・亜細亜大学名誉教授）

『選択集』と 日本宗教における その影響

アルフレッド・ブルーム

訳・小林良信

一九九八年と一九九九年は浄土教にとって日本の歴史における二つの重要な時代の記念となる年である。一つ目は一九九八年における念仏の有用性の宣言の書であり擁護の書である『選択本願念仏集』の撰述八百周年に当たるといふことであり、二つ目は法然上人の弟子である親鸞聖人によって開かれた宗派である浄土真宗の八祖である蓮如上人の五百回忌に当たるといふことである。

法然は大衆的で独立した浄土の教えを開いたが、一方蓮如は室町期の日本において親鸞の後継者として浄土の教えを宗教的に社会的に膨らませた。これらの二人の人物の歴史的宗教的な立場は異なるが、両者とも法然の著作が日本の宗教と社会に与えた巨大な影響を代表する人物である。

この小論は大衆の間に念仏の教えが広まる基盤となった法然上人の業績に焦点を合わせるものである。法然上人の教えが大衆に与えた影響のすさまじさは念仏が社会のあらゆる

階層に広まっていくのを快く思っていなかった日蓮を怒り狂わせた。彼は念仏が人を無間地獄に落とすとさえ言ったのであった。明恵上人は法然の教えを仏教に対する裏切りであり経典や念仏の教えの謝った解釈であると批判した。道元は称名念仏を蛙の鳴き声にすぎないと批判した。しかしながら、高僧たちのあらゆる批判にも関わらず、念仏の教えは大衆に対して慰めと希望を与えたのであった。

蓮如の業績は歴史的に親鸞の思想を介して法然の（社会に対して与えた）影響にまで廻れるものである。蓮如の説教や手紙は室町時代の民衆を奮い立たせ、大名や荘園主の支配から解き放ち、その結果その当時の政治に宗教的な影響を与えていた民間信仰の否定へとつながった。

その念仏と浄土往生に対する単純な信仰の表明という点において、浄土の教えは大きくは死後に焦点を合わせた別の世界に対する信仰と見られてきた。戦や飢饉や自然の災害や独裁的な支配者による強制的な取り立てに満

ちた予測不可能な世界に住んでいる古代の人々にとって祝福に満ちた将来の生活の姿は魅力的なものであった。寺院において静寂の中で悟りを求められない人々にとって、念仏の易行は困難な生活を耐えられるものにするまたとない代わりのものとなった。

念仏信仰はまた豪華で華美な寺院や貴族によって行われた儀式を必要なものとした。平等院のような大規模な寺院の建立は主として貴族の祝福された後生を安堵するためのものであった。庶民は、畑で働いている間でも、或いは猟や漁をしている間も、実際に阿弥陀仏の名を称えることによって阿弥陀仏を奉持し単純な信仰によって浄土の利益に与ることができた。経典や民話の中で語られる多くの物語がすべての人々に往生をもたらず念仏の功德について言及している。

法然の出現に先立って念仏をもつと広めようといういくつかの努力があった。市の聖と呼ばれた空也や天台宗の良忍は庶民を助けようと努力したことと有名である。比叡山の源

信によって組織された浄土教に帰依する在家貴族信者の結社があり、念仏聖たちもまた日本中に信仰の行を広め法然と彼の弟子たちの成功の道筋を準備したのである。

法然は念仏に対して末法の世の苦しむ大衆のために阿弥陀仏がその本願の中で特別に用意した行であるという説得力に富む教義的な支柱を提供した。この教義的な支柱の重要な表明が一一九八年の、法然にその教えの基本を説明してほしいと依頼していた九条兼実の明らかな懇請による『選択本願念仏集』（『選択集』）の撰述であった。この懇請に答えて法然は浄土教の綱領を述作し、それが世に知られるや、敵対者の憎悪をかき立てたが、その著作によって解放を見いだした信者の帰依を勝ち取ったのである。

論者は親鸞が研究の専門であるので、彼を法然の作品に啓発された帰依者の例としてあげることにする。親鸞は比叡山で九歳から二十年間悟りを得るために修行を重ねていた。悟りが得られず将来の運命に絶望し、たとえ

彼が邪悪であつても阿弥陀仏の本願に支えられた念仏によって救われることを約束する教えを説いている法然上人に帰依した。

親鸞は『教行信証』の中で自らの経験した解放感や安堵感について述べている。

「愚禿釈の鸞、建仁辛酉の暦、雑行を捨てて本願に帰す。」「慶ばしいかな、心を弘誓の仏地に樹て、思いを難思の法海に流す。深く如来の矜哀を知りて、まことに師教の恩厚を仰ぐ。慶喜いよいよ至り、至孝いよいよ重し。」（本派本願寺出版浄土真宗聖典、一九九三、四七二―四七三頁）彼は次いでどのようなように法然が『選択集』を書写することを許してくれたかについて述べている。

「元久乙丑の歳、恩怨を蒙りて『選択』を書しき。同じき年の初夏中旬第四日に、『選択本願念仏集』の内題の字、ならびに「南無阿弥陀仏 往生之業 念仏為本」と「釈の綽空」の字と、空の真筆をもつて、これを書かしめたまひき」

〔浄土真宗聖典、四七二頁〕

親鸞は彼の生涯を変えた『選択集』を非常に高く評価した。

「真宗の簡要、念仏の奥義、これに撰在せり。見るもの論り易し。まことにこれ希有最勝の華文、無上甚深の宝典なり。年を渉り日を渉りて、その教誨を蒙るの人、千万なりといへども、親といひ疎といひ、この見写を獲るの徒、はなはだもって難し。」

〔浄土真宗聖典、四七三頁〕

結局、師とその弟子は流罪によって引き離され、二度と会うことはなかった。親鸞はこのことについて次のように書いている。

「主上臣下、法に背き義に違し、忿りをなして怨みを結ぶ。これによりて、真宗興隆の大祖源空法師ならびに門徒数輩、罪科を考へず、猥^{あら}はしく死罪に坐す。あるいは僧儀を改めて姓名を賜うて遠流に処す——中略——空師ならびに弟子等、諸方の辺州に坐して五年の居諸を経たりき。皇帝佐渡の院諱守成聖代建曆辛未の歳、子月

の中旬第七日に、勅免を蒙りて入洛して」

〔浄土真宗聖典、四七一―四七二頁〕

親鸞はその述作の中で一貫して法然上人を尊崇しており、ことに高僧和讃の中で法然を讃歎している。

「源空存在せしときに、金色の光明はなたしむ、禪定博陸まのあたり、拝見せしめたまひけり」

（二〇四）

「源空勢至と示現し、あるいは弥陀と顕現す、上皇群臣尊敬し、京夷庶民欽仰す」

（二〇六）

「諸仏方便ときいたり、源空ひじりとしめしつつ、無上の信心おしへてぞ、涅槃のかどをばひらきける」

（二〇八）

「真の知識にあふことは、かたきがなかなはかたし、流転輪廻のきはなきは、疑情のさはりにしくぞなき」

（二〇九）

「源空光明はなたしめ、門徒につねにみせしめき、賢哲愚夫もえらばれず、豪貴鄙賤もへだてなし」

（二一〇）

「粟散片州に誕生して、念仏宗をひろめし

む、衆生化度のためにとて、この土にた
びたびきたらしむ」 (一一三)

「阿弥陀如来化してこそ、本師源空としめ
しけれ、化縁すでにつきぬれば、浄土に
かへりたまひにき」 (一一四)

「本師源空のをはりに、光明紫雲のごと
くなり、音楽哀婉雅亮にて、異香みぎり
に映芳す」 (一一五)

「本師源空命終時、建暦第二壬申歲、初春
下旬第五日、浄土に還歸せしめけり」 (一
一七) (浄土真宗聖典、五九六・五九八
頁)

親鸞が法然から承けた洞察は彼の生涯を通
して続き、遠く離れた東国での浄土教教化の
力となり、後には隠棲した京都における教化
の源となった。その長い生涯の間に親鸞は幾
度も法然から教えられた阿弥陀仏の無条件の
慈悲について述べている。

『選択集』の中の何が親鸞や他の指導的な弟
子たちによる法然に対するそのような信頼を
生んだかを考える時、そこにはいくつかの重

要な点があることがわかる。

1. 法然は明らかに教相判釈を行うことに
よって浄土教を大乘の宗派として位置づける
努力を行った。そのような教えの位置づけは
様々な大乘仏教の中で独立した宗派をうち立
てるためには不可欠なものであった。浄土教
の歴史の中で作られた浄土教を他の教えと区
別する数多くの独特な用語があった。これら
の中には難行道易行道(竜樹)、自力他力(曇
鸞)、聖道門浄土門(道綽)や善導の正雜二行
判などが含まれる。阿弥陀仏の名を称えるこ
とは浄土の信行の明確な中心となった。

『選択集』の中で、法然はこれらのすべて
の考え方を合わせて浄土の教えが末法におい
て、それが俗人であれ高僧であれ、すべての
人が救われる唯一の乗り物であることを宣言
した。念仏は普遍的であり、いかなる人にも
実行可能であった、一方他の行は、肉体的な
ものであったり知的なものであったり、時に
は財力であったりするのだが、なにがしかの
特別な能力を必要としたのである。

蓄積され、広範囲に広まった、しかしながら未だに組織化されていっていない浄土教の教えの先頭に立って、法然はその教えを日本の伝統教団の中の独立した宗派としたのであった。法然の弟子たちは師の考えを受け継ぎそれぞれ自分自身の教えや行のスタイルを確立していったのである。

2・教相判釈問題に関わる第二の重要な点は、すべての衆生が悟りを得て魂の解放を得られる理想の世界を建立するために法蔵菩薩がすべての仏国土全宇宙をくまなく見て回った努力の中に法然が見いだした「選び取り」と「拭き捨て」の課程をあらわした「選択」の概念である。

法然は教相判釈と法蔵菩薩の物語を結びつけ、浄土教により強固な經典による典拠を与えた。それはもはや単に仏によって弱く無知な人々に与えられた便利な手段ではなかった。むしろそれはそれによって凡人だけではなくエリートも含めたあらゆる人が最終的に悟りを得ることができると中心的な唯一の手段とな

ったのであった。それはすべて法蔵菩薩によってなされた選択によってもたらされたものであった。

このような説話の解釈は、宗教意識における決定的な要素が選択であることを示唆している。宗教的な信仰の中には常に選択が含まれるのである。それは現実に対するもつとも普遍的でもつとも深い理解あるいは解釈の選択である。それはさらに強固な宗教人の基盤となっている排他主義もしくは独尊性をあらわしている。このことは法然自身にも見いだされ、さらには処刑されたものもいる法然の弟子たちにも、そして親鸞にも、さらには後の一遍や蓮如にも見いだすことができるのである。

浄土教はしばしば外部からの力として理解される他力を強調するあまり、力の弱い人間のためのものと見なされてきた。しかしながら、生活の信条としての他力信仰は確固たる献身の基となりうるものであり、人がその現実を信じた時、阿弥陀仏がその人の人生を包

むのである。

3. 法然の考えの社会的な側面は阿弥陀仏の本願の真意を説明する部分で雄弁に語られている。法然は自らの言葉でそのことを明確に述べており、我々が付け加えるべきものはほとんど無い。

次難易義者念仏易修諸行難修—中略—故知念仏易故通於一切—中略—若夫以造像起塔而為本願者貧窮困之類定絶往生望然富貴者少愚痴者甚多 若以智慧高才而為本願者愚鈍下智者定絶往生望然智慧者少愚痴者甚多—中略—然則彌陀如來法藏比丘之昔披催平等慈悲普為攝於一切不以造像起塔等諸行為往生本願唯以称名念仏一行為其本願也

彼の時代のエリートに対して社会的な批判を与えるこの注目すべき文章の中で、法然は阿弥陀仏の本願には生まれつきの善し悪しや、能力の有る無しや、社会的な地位による区別が全くないことを、まぎれもなく明確にしている。親鸞もまた彼の『教行信証』の中でこ

の評論を肯定している。

おほよそ大信海を案すれば、貴賤縋索を簡はず、男女老少をいはず、造罪の多少を問はず、修行の久近を論ぜず、行にあらず善にあらず、頓にあらず漸にあらず、定にあらず散にあらず、正觀にあらず邪觀にあらず、有念にあらず無念にあらず、尋常にあらず臨終にあらず、多念にあらず一念にあらず、ただ之不可思議不可称不可説の信樂なり。たとへば阿伽陀藥のよく一切の毒を滅するがごとし。如來誓願の藥は能く智愚の毒を滅するなり。(五一)

(浄土真宗聖典、二四五—二四八頁)

既成仏教教団に最も脅威を与え興福寺奏状による教宣活動の停止をもたらししたのはおそらく法然の教えのこういった点であったのだろう。この奏状によって法然と彼の主立った弟子たちは流刑に処せられた。奏状は法然を勅許を得ないで新しい宗派を始めたこと、神を否定することと念仏以外のすべての善行を

捨てることによって社会を乱している罪で法然を告発していた。この訴え状によれば、法然の運動は、仏教と国家の結合を基盤にした他の宗派の荒廃を招いていたことになる。

4・明確には述べられてはいないが『選択集』の示す内容でもう一つ大事なことは、浄土教の信者を迷信の世界から解放したことである。法然は『選択集』の中で、物質的なあるいはこの世での利益について全く言及していないばかりでなく、自分の教えを支えるための神の役割についても全く述べていない。もし主君や寺や寺院や大名の命令に従わなければ、これらの人たちによって罰あるいは天罰が与えられるという恐怖に基づくこの精神的な圧迫からの解放が、蓮如の時代の一向一揆という農民の反乱を導いたのであった。

現代においては、衝撃的で影響力の強い教義をしばしば「革命的」と呼ぶ。現代の革命を考えればこの言葉は強烈すぎるかもしれないが、それでもなお、法然上人の働きや『選

択集』にはこの言葉が当てはまるかもしれない。というのも法然上人の敵でさえもその教えの日本における宗教的な状況を変革する力を見て取っていたからである。結局彼らは激しく暴力的に反応した。後には、比叡山の僧が法然上人の墓を暴き彼の著作を焚書した。

その一方で法然上人は先駆者であり、彼の思想の解釈は後にすべての人々の望みの範囲を広げたのであった。今日において、荒れ果てて見る影もない現代の世俗社会の中にも凡夫が意味や希望を見いだそうとすれば、法然上人の社会に対する批判的な理解や物の見方によって培われたこの精神を復活させることは重要なことである。現代人が必要としているものは、死後における望みという法然上人のメッセージだけではなく、阿弥陀仏の慈悲に包まれているということをはつきりと認識し、我々の称名がその心を生活の基盤に結びつけていることが具体的になるような、日々の暮らしにおける方向付けなのである。

アルフレッド・ブルーム

ハワイ大学名誉教授
小林良信 芝学園教諭

特別遺稿・詩

念仏為先

念仏を
称える人は
白蓮華

松島定宣

追悼 松島定宣上人

本誌・長谷川岱潤

平成十年四月八日、小田原常光寺の松島定宣上人が七十五歳にて正念往生なされました。上人は、念仏一筋に生き、布教師養成講座の初級、中級、上級全ての副道場長を十四年間にわたって勤められ、師の薫陶を受けた卒業生は三百八十一名余、指導を受けし者は五百名をはるかに越えています。また五重勸誡など実践布教で全国を飛び回り、辛口批評で宗門につねに刺激を与え、近年は我が法然上人鎮仰会の絶大なる協力者として、物心両面より応援し続けてくれました。師の法然上人に寄せる思いの深さは、まさに私たちの目指すところでありました。

「念仏を称える人は白蓮華」という上人の名せりふ偈び、ここに「選択集特集号」の編集を終えた今、「選択集」の心である「念仏為先」の実践者であった上人の自作の詩を掲げ、謹んで哀悼の意を捧げます。

合掌

大本山光明寺という、浄土宗第三祖・記主禪師様を開山とする
莊嚴うるわしき御寺のご本堂に、

酷暑といえる七月二十四日

元祖様、あなた様の御忌御逮夜の夕べ

あなた様のみ法の布教を志す十二人と

あなた様の御苦勞を偈び、ご恩に報いんと

二時間の別時念仏を修しました。

この日は

ご遺訓『一枚起請文』に込められた

あなた様のすべてを投げ出しての一言一句を

涙を覚えながら、同志に説き訴えましただけに

まず『起請文』を心して拝受して入った別時の念仏は

いっぴになく尊く有り難く、それだけに

声高く称えました。

「念仏とは別したることと思うべからず。

心には阿弥陀仏、我を助けたまえと思いて

口には「南無阿弥陀仏」と申すばかりなり」と

あなた様（法然上人）のみ声が聞こえる思いで

助けたまえとは日頃はなかなか思いこめない頑な私も

一心にお念仏申しました。

昨日、六十八才の誕生日を迎えたばかりの

私の長い生涯の初めよりの己が姿を

思いしらべ、みせられておりました。

幼い頃より父母の言い付けはよく聞かず

兄弟げんかに明け暮れては叱られ。

貧しくて勉強の出来ない友の悲しみなど露思わず。

思ひ上がり強くして先生を軽んじたり

また病氣をしては父母に心配ばかりかけてきました。

善人面をして

内には、いまわしい思いを隠し

人に知られたら赤面して身のおきどころ無きみにくさ。

真の刻苦精励も無く

またその苦しみを感じることの無い、

様々な己が身のみにくさをみせしめられる思いがしました。

今もお

もつともつと火の玉となつて勤むべき身と思ひながら

また苦悩にあえぐ人々のあることを知りながら

誠に優雅な豊かな日々を当然と過ごしております。

この救いようのない己の姿を見て震えました。

こんな下々のこの身が

ここに座して声を上げて念仏しているとは、

一重に眼前にまします阿弥陀様の十劫の昔より今日まで

よくぞ見放さずに、育て導き助けたまいしお陰と

身にしてみてもそのご恩の力を感じさせて頂きました。

そしてこれも一重に

あなた様の言い表し様の無い慈悲のお陰と

ひとしきり高声に念仏がこみあげてきました。

ああ、あのなつかしい父母はと思つた時

とつさに、そして誠に不思議なことに

少年の頃の

人前でも恥ずかしいほどにこの私を褒めてくれた父は

お浄土にましまして

あなた様（法然上人）の念仏のみ教えの布教に専心していることを

いまだ打ち込み様がゆかい、精進が足りない

厳しく物言いたげに見ていました。

そして生前けつして私を褒めることをしなかつた母は

蓮台の上にて優しい笑顔で

良くぞ健康を保って、この暑い日夜を厭わず

みなと共によく頑張っていると

褒めていて下さっているのです。

ああ父母の思いのなおいが上に豊かにあることを

涙のこぼれるほどに有難く感じました。

ときおりふきとおる夜風は

汗まみれの身には浄土のそよ風のように心地よく

正座を続ける身内に力のおふれる思いがして

声もいよいよ力強く

ただ一向に念仏をさせて戴きました。

別時の念仏を終えて、堂外に出た時

夏の夜空には、満月がぼつかりと浮かんでおりました。

あなた様の月影のお歌を思いながら

大悲の中に隅々まで照らし護られている我が身の幸せに、

またあらためて念仏がこぼれました。

守院紀行

記念特集

民谷隆誠台下御晋山

大本山善導寺

御廟

御廟(善導寺開山浄土宗三祖聖光上人の墓)と
善導寺第六十六世法主民谷隆誠台下

大本山善導寺



井上山光明院善導寺
の本尊



本堂(右)と三祖堂(左)



浄土宗の法灯を伝える
傳法第二重授手印

民谷隆誠台下御晋山



三相堂内陣。左から二相聖光上人、
高相善導大師、宗相法然上人

聖光上人とこの地を結ぶ伝説の穴地蔵

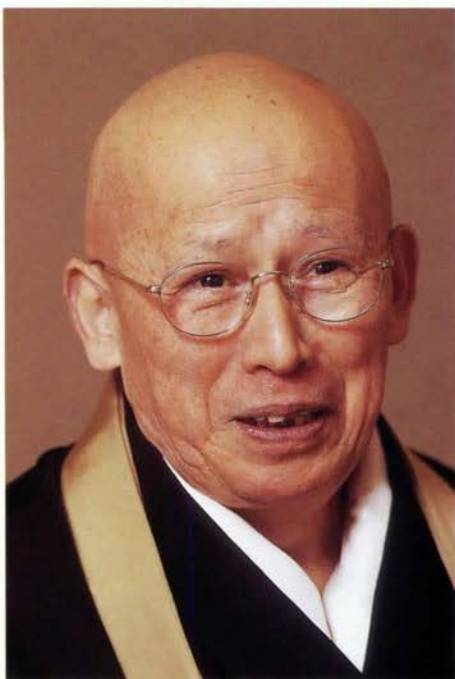


二相聖光上人の銅像



御廟の墓。墓石の台座には
専修念佛師 井阿聖靈基
正助行不退 逐往生極楽
と彫られている

善導寺第八十八世法主民谷隆誠台下一



善導寺の指定文化財のひとつ大樟



勅使門。この門をはじめ寺務所などの建物も重要文化財に指定されている



高良神社から筑紫次郎、筑後川を望む



記念特集

大本山善導寺民谷隆誠台下御晋山



謹んで 御挨拶申し上げます

民谷隆誠

此度計らずも推戴委員会の総意を拝し身の程も顧りみず畏れ乍ら昨年九月五日付にて大役を拝命致しました。

関係諸大徳、宗門諸師の熱情に甘んずべきやと苦慮致しました。私ごとで済みませんが96才の母が昨年6月14日往生致しました。維時6月24日は藤堂御前様の満中陰でありました。母の二七日中陰頃善導寺庶務部長有田上人の来寺を得て仰天のお言葉を拝聴、耳を疑いました。固辞致したものの、橋田長崎教区長、松尾福岡教区長、九州の地に五重勸誠を

紹介してくれた故安松昭道師の生寺清光寺山主、同級生大徳等々からのお言葉、何如にせんと、昨年8月26日善導寺御本前に辞退をと家内同道参詣、其時驚愕した事は、母の葬儀の夜、夢中に拝したみ佛が蓮台上にましましたこと、感動の涙に咽びました。

二代様の法不可思議故の文「これ即ち仏不思議の法術を以って浅機の者の為に浅と見せしめて事と成し、深機の者の為には深を見せしめて事を成するか」と申されており、何れにせよこの法縁、阿弥陀様のみやすかい

となるべきことを体しました。

本年は選撰集奉戴八百年記念として、大五重開筵会場となります。法然上人立教開宗より八百余年本願念仏の口決書写を受けられた二代様の風格法器は、末代念仏授手印に残されました。

二祖上人は四十八の日夜を限って不断念仏、その成満に善導大師の指授をうけられ、念仏興隆の温情と然師報恩の誠を捧げられました。念仏の体系とも申すべき六重二十二件五十五箇條の要目末代の為に筆點に題された仰信と熱情は素晴らしいものであります。

今日浄土宗乗の根幹として異途無き証拠を身命を捧げて伝弘された、二代様の胸中何如ばかりかと礼讃せねばなりません。

其後聖岡上人は当時の教団組織確立の必要性を鑑み五重指南目録を示して本宗僧侶の結集をされたのであります。

五重相伝は僧俗一体の勤修、現代末法社会

の持つクラブ的特異性に合致した念仏信仰の集結と申せましょう。二代様の授手印は七代様に依って寺門興隆の爲の営膳と念仏信仰の道場としての中核となされたのであります。

五重・授戒の勤修されている一隅にはニュース報道を賑わせる極悪事はないと存じます。

日課念仏の実践するところ、徹選撰集に云う「然らば即ち大乘の意は一に即して多なり、浅に即して深なり、小機の者の為にはこれ浅なり、大機の者の為にはこれ深なり、この故に曇鸞大師の云く「十念を具足すれば即ち安樂浄土に往生することを得、即ち大乘正定の聚に入る」と摩訶衍法故の至極大乘の法なるが故に念仏は声の宗教となつて現代人にできる一番簡単な一番上等な仏法で不変の真理を突かれた特留念仏の教えだからであります。

安産祈願は当山の矜誇であり法禮でもあります。5月29日晋山式を期として仏に値い奉る法雨と散華を慈辨せんことを。

合掌

念佛の声、 常にこだまする

九州地方教化センター委員長

橋田 邦俊

新緑目にまぶしく、百花繚乱たるこの佳き日に、晋山の儀が執り行われますこと、誠に悦ばしい限りでございます。

昨秋九月五日大本山善導寺第六十六世として民谷隆誠法主台下、満場一致で御推戴させていただきまして、ここに晋山式挙行と相成りました。

御法主台下におかせられましたは、入山式後もご多忙で、文字通り席の暖まる暇もなく全国を布教伝道のご努力をなさ

れていられる御様子で誠に宗幸至極に存じあげます。

人格識見は勿論、どなたとでもお気軽に対応していただき、大変親しみを感じさせられる温和なお人柄でございますが、従前より九州地区御寺院には、五重勸誠を通して殊の外ご縁が深く、多数の信者がこの度のご晋山を心より喜んでいられます。

新しい御法主台下は心身共にお若くて、今後ますます布教伝道に、念佛教化にお励みいただきたいと切望して止みません。

大本山普導寺は平成大修築事業を行いました。が、尚重要文化財指定の旧庫裏書院の復元工事は、まだまだ十年の歳月をかけての大事業を残しています。この時にあたり、九州五百七十余カ寺の寺院一丸となって御法主台下を補佐し、大本山の興隆を願わずにはられません。二祖上人のご遺跡寺院としてのみでなく、念死念佛の心を伝弘し、念佛弘通の大道場として広く世間から必要とされる様に整備された器となり、中に念佛の声、常にこたまする本山となることを晋山にあたり祈念いたします。

合掌

久留米

大本山善導寺

寺院紀行

文／真山 剛

撮影／タカ才力邦彦



四十五年の華道歴を持つ民谷隆誠台下。右は台下の生けた花

「器に非ずと何度もお断りし、それでは最後に善導寺にお伺いしてお断りを、と妻と奈良からでかけました。

ご挨拶を済ませ、すぐ本堂の内陣横に案内されました。善導寺の方々がお下がりになられてから、妻と二人でご本尊さまを正面から拝ませていただいたのです。

すると、驚いたことにご本尊さまが二か月前、(昨年八月)九十六歳で往生いたしました母の葬式の夜に見た阿弥陀さまそのままだったのです。その瞬間、あっ、こういう事があるのだなと思いました。その事を妻に話しながら、『ここで命を捧げなければいかんとかいうか』、とそれまでのお断りの気持ちが一変して、お受けさせていただくことにしたのです」

大本山善導寺が発行する『聖光』平成九年十一月号の新御法主就任特集号の「靈性につながる心」と題した編集委員行正明弘上人のインタビューに、第六十六世民谷隆誠法主は法主就任の経緯をこう答えている。

「文章ではかけませんが、そういう宗教的靈性の中にこの世の中はちゃんと繋がっているのか」という気持ちが新法主の心を動かし、たという。

それから半年余が過ぎた今年三月初旬、福岡県久留米市の善導寺を訪れた。



平成十年五月二十九日、善導寺第六十六世民谷隆誠法主の晋山式が行われる

本誌編集部から「初めての大本山の取材となりますが、大本山は住職ではなくご法主といって特別な方ですから、くれぐれも粗相のないように気をつけてください」と言われているだけに、否が応でも緊張する。

お付きの方の案内で奥の間に通され、華道歴四十五年というご法主が内玄関に生けた花を拝見していると、「これはどうもご苦労さまです」と後ろから、突然ご法主がお見えになる。

その優しい声にあわてて振り返ると、にこやかな表情の民谷隆誠法主が立っていらっしやった。

「さあ、どうぞこちらに」と自ら案内していただく。

そのやわらかい物腰と口調から何とも言えぬ暖かさが伝わって来て、緊張感がいつの間にかとれてしまった。

お話しをお伺いする前に、見事な生け花とご一緒に写真を撮らせいただくことになった。撮影のセットのために椅子や机を動かし始めると、ご法主も一緒に動かれるのには思わずあわててしまった。あとでお付きの方に聞くと、ご法主は掃除もお好きで、気軽にお手伝いされようと言います、という。付き人としてはうれしいような困ったようなことだと想像に難くないが、ご法主の人物をよくあらわしている。

インタビューに入った。



善導寺の正面入り口。正面釈迦堂まで数メートルある

ご出身の大願寺は奈良の桜井にあり、當麻寺奥院（おくのいん）の筆頭末寺であったこと、子供のころから体が弱く何度も死線をさまよったこと、佛教専門学校（現佛教大学）時代の児童教化の思い出や奈良県児童文化研究所発足に携わったことなどから、布教の話になった。

ご法主は五重相伝（ごじゅうそうでん）の勸誡師（かんがいし）として、浄土宗檀信徒に教えを伝えられている、有名な布教師なのである。五重相伝とは浄土宗の檀信徒に浄土宗の宗義をより深く伝える修行をかねる会である。

「布教の必要性は体で覚えしました。諸先輩の有名な布教師のお話を体で聞いてきました。お話中は絶対に堂外に出ず、全神経を耳に傾けていました。明治生まれの先生には明治の、大正生まれの先生には大正の、そして昭和生まれの先生には昭和の特徴があり、それぞれお話のたとえにその時代観が出ていました。本筋は同じでも比喻は人それぞれで違います。お話を聞きながら、いつも、もし自分だったらこう話そう、自分だったらこうたとえてみよう、と考えていました。じつと片隅で座っていましたが、頭の中は大忙しでした」

ご法主となられてからも布教活動はお忙しく、関西、九州などあちらこちらにおでかけになられている。

「ある時、小学校の頃の担任の先生とお会いして、人さまの前で話す布教師をしていますといったら、『民谷、おまえ、話せるのか』と言われました。小学校の頃は国語の本を読むだけでも顔を隠して



JR西日本の善導寺駅。ここから徒歩十分で山門だ

いたぐらいて、先生は随分驚かれたようです」

小一時間のお話の中で三度、ご法主は感極まられ言葉をつまらせられた。昨年の入山式で、善導寺開山の浄土宗第二祖聖光房弁長上人の書『末代念佛授手印』序を拝読中にお声を詰まらせられたと聞いているが、このインタビュ어도子どもの頃やご両親のお話をされた時に、お声をつまらせられた。

子どもの頃病弱で死線をさまよわれた話、「まともな子が三人いる、幸せなことだ。私は子どもの見えない所で子どもにむかつて南無阿弥陀仏と称えているのです」と檀家さんに話していた先代の父親の話、とにかく厳しい人で反発ばかりしていた母親の話。

そのいずれの話にも病弱で「吐いた息をいつ吸えるのかを、身を持って体験した」ご法主ならではの「死ぬ側に身を置いて生を見つめること」や「永遠の命の中の往生をどうとらえるか」という人生観や往生観が滲みでてくる。こうした、いま自分があることのありがたさを噛み締める度にご法主はその時の気持ちに戻られ、阿弥陀さまの導きに感極まれるようだった。こういうのはおこがましいが、善導大師、宗祖法然上人や二祖聖光上人の教えを身をもって受け止められている、そんな気がした。

最後に境内の御廟の前で撮影をさせていただき、無事取材は終了したが、振り返ってみれば、ご法主の人物がとても印象強く残った



久留米城跡。現在の城跡は有馬氏が築き直したものだ。

取材だった。

善導寺の話に移ろう。

善導寺は大本山として古い歴史を持つだけに何度も火災に遭っているが、それでも多くの伽藍や巨木が昔の面影を今に残している。

御廟とは開山の聖光上人のお墓で堂内後壁には「鎮西禪師」の額がかかっている。

さて、この善導寺だが全国に七つある浄土宗大本山のひとつで、

浄土宗の第二祖である聖光上人の開山だ。聖光上人は宗祖法然上人の弟子の一人で、二度にわたる通算六年余の間、法然上人の元にいた。その後、念仏の教えを広めるため、出身地である九州にもどった。聖光上人の弟子には浄土宗の三祖である良忠上人がいて、良忠上人は関東にその教えを説き、関東にも浄土宗が広まったのである。

この法然、聖光、良忠の流れを浄土宗鎮西派といい、単に浄土宗という時はこの浄土宗鎮西派のことをいう。というのも法然上人の門下には優秀な弟子が多く、それぞれが法然上人に師事した時代も違っただけに法然上人亡き後の念仏の理解、解釈に違いが出たからである。お釈迦さまの教えが、いくつかの教えに分かれたように、法然上人の教えもいくつかに分かれたのである。

聖光上人の浄土宗鎮西派、證空上人の浄土宗西山派、親鸞上人の浄土真宗などで、聖光、證空、親鸞はみな法然の弟子である。



有馬氏が菩提寺とした梅林寺は臨濟寺の別当寺の名刹だ

間口十七・五間、奥行き十七間の本堂



善導寺は箏曲発祥の地でもある



荒々しい乱積石の土台が特徴の鐘堂



釈迦堂。「祈禱」の額をカカげる入母屋造りの重層の堂だ

ちなみにこうした分派や新しい宗派が生まれることは、日本仏教の他宗派にもみられる。宗教に携わっているとはいえ、もちろん僧侶も人間だ。思いも考えも異なるのはむしろ理の当然なのかもしれない。

さて、浄土宗の本流である鎮西派を確立した聖光上人が開山した善導寺だが、建立された場所にはこんな伝説が残っている。

遊行中の聖光上人が、眼下に筑後平野が広がる耳納山みつのさんの中腹で休んでいた。と、筑後川のすぐわきの草原地の森が何やら怪しく光っている。上人が不思議に思いその森へ行ってみると、六人の盗賊が上人を取り囲んだ。その森は盗賊の根城だったのだ。

その盗賊たちに上人は念仏の教えを説いた。すると上人の懇篤なる教えに盗賊たちは発心し、それまでの自分たちの悪業を悔い改め上人の弟子となった。そして盗賊の頃に殺めた死体を捨てていた井戸の上にお堂を建てた。この地が現在の善導寺であり、その六人の盗賊が現在の鐘樓堂わきに並ぶ六地藏になったと伝えられている。

聖光上人の念仏行者ぶりを示すこんな話もある。

耳納山脈の西端に、耳納山と並ぶ高良山こうらさんがある。高良山はかつて高牟礼山たかむれやまと呼ばれ、古代九州地方の祖神が祭られていた山岳信仰の地で、鎮座が三百九十年といわれる高良大社がある。それまで仏教が入ることを固く禁じていた地だが、白鳳時代に神職が出家し神宮



久留米にある水天宮は全国の水天宮の総本宮だ

寺として高隆寺を開山。神仏習合で大いに栄え、三百六十以上の僧坊、千人以上の衆徒行者を数え、神領が九千九百八十町という、単なる信仰の地だけでなく、筑後の領主といていいほどの力を手中にすることになる。

時が下り高隆寺が真言天台の学地となっていた頃、その山麓に阿弥陀如来を安置していた厨寺（現安養寺）で聖光上人は千日の如法念仏を修していた。八百日が経った時、高良山の僧侶たちが真言天台の学地で専修念仏とは何事だと聖光上人の追い出しを決めた。

噂を聞いた念仏衆徒は、その事を上人に伝え、退かれるよう勧めた。しかし上人はあえて待ち受けることにした。ところが、追い出されるどころか僧侶たちは供物を捧げにやってきた。訳を尋ねると夜中に帰信称名、念仏を申しなさいという霊夢を感じたからといい、逆に聖光上人に教えを請うたのである。

このように多くの念仏衆を従えた聖光上人が善導寺を建立することになるのだが、その寺領を寄進したのが、耳納山の麓に草野古墳や草野町として名を残す草野氏である。草野氏は高良宮在国司職も務めた筑後国の領主であった。その草野氏が檀那になることで善導寺は興隆を極めた。

聖光上人は念仏教化の遊行の中で四十八の寺院を建立したといわれるが、この善導寺は浄土宗第三祖良忠上人に宗義を伝えた縁の地



福岡の市内にある博多善導寺。聖光上人とのゆかりも深い。

であり、また聖光上人の入寂の地でもある。そこに強力な檀那がついたのであるから、浄土宗の大本山というばかりか、まさに筑後を代表する大寺院となったのである。

しかし、それだけに善導寺の盛衰もまた激しい。

一三三八年兵火で堂宇焼失、再建されるも応仁の乱（一四六七）年の余波でやはり灰燼に帰す。一四七〇年には十一世が難を避け博多にもう一つ善導寺を建立、それが現在の博多善導寺で、兵火から守るため、多くの什宝も移された。

一五〇〇年初頭に草野氏が再建するも一五八〇年に焼失。四年後には領主の権力争いに巻き込まれ第十九世を含む五十人弱の僧俗が殺害され、什宝旧記も焼失した。これをきっかけに寺域もせばまり、四百七十余の末寺も離反を始める。

一五八八年に諸堂が重建されるが、一六〇〇年に黒田如水によってその諸堂が破壊される。翌年、筑後の国に入り、柳川城主となった田中吉政が檀那となり山門、書院、釈迦堂、鐘楼、大庫裡を重再建、また東照宮廟も創建された。その田中家に跡継ぎがなく筑後の国が久留米、柳川、三池の三藩に分割されてからは、久留米城主の有馬藩が檀那となり三祖堂を建立した。

兵庫から移封された有馬氏は故地丹波福知山の臨濟宗瑞願寺を久留米城下に移し梅林寺と名を改め菩提寺としていたが、善導寺も保



善導寺の寺宝のひとつ、丹板の名号

護し続けた。

以後、伽藍が整備されるも、地震や火事で焼失を繰り返すことになる。

現在の本堂再建は第四十八世の一七八六年で、その時の再建の様子は『天明丑年善導寺再建一件覚帳』として史料が残っている。

こうした歴史を経た現在の善導寺は本堂、三祖堂、釈迦堂、開山廟堂、経蔵、観音堂、鐘堂、広間、集会堂、大書院、小書院、大庫裡、役寮、対面所、中蔵、釜屋、食堂、勅使門、三門、大門、薬師堂、宝物館、幼稚園を境内に構え、塔頭として七院、末寺として百五十か寺を有している。

こうした伽藍に国指定や県指定の文化財も多いが、最も古いのが大門で、一六五一年の建立だ。

伽藍とともに善導寺の顔となっている古木もある。ともに天然記念物に指定されていて、善導寺の大樟おかしと呼ばれる樹齢八百年の老樹大木の樟二本と、菩提樹二本である。なかでも二本並ぶ大樟の西側の老木は根回り三十四メートル、樹高四十一メートルという大木だ。境内の案内看板には「善導寺開山の鎮西聖光上人が植樹された」と記されている。

また境内には日本第一力士小野川之墓もある。聖光上人が茶毘に伏された跡は塔頭の不斷院境内にある。



御廟の後ろにある徳川家康の墓

もちろん善導寺には多くの寺宝もある。

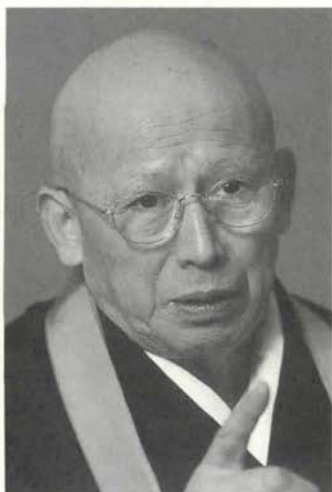
木造の鎮西上人像、善導大師像、法然上人像、釈迦如来像、四天王像、阿弥陀如来三尊像、阿弥陀如来像、宝冠阿弥陀如来像など。また当麻曼荼羅、涅槃図、聖衆来迎図、二河白道図……、その他に聖光上人の御遺品の数々と書き出したらきりがない。

しかし、中でも忘れてならないのは、浄土宗の法脈相承の聖典である『末代念佛授手印』だ。善導寺本は一二二八年、鎌倉時代のものである。紙本墨書のこの本はたて二十八・八センチ、長さ七メートル七十七・三センチで、これが浄土宗の血脈の正統性を示すものなのである。この『末代念佛授手印』をはじめ数々の寺宝は宝物館に並べられている。興味がある方にはお勧めの宝物館である。

大本山の法主は法主推戴委員会すいだい委員会という会で候補の僧侶が推戴されるという。浄土宗を代表する寺院だけにそれなりの僧侶としての経歴や人品なども条件となるという。

晴れて第六十六世として推された民谷上人が歴史と伝統のある善導寺を受け継ぐ法主就任のお披露目、晋山式はもう間近である。

(ルポライタ)



布教師である民谷台下のお話しは軽快でとてもわかりやすい

聖光上人
伝聞考

行正明弘

母君のこと

聖光上人誕生の地は、筑前の国遠賀郡香月の庄、現在の北九州市八幡西区吉祥寺町の誕生山聖光院吉祥寺である。この両親の御廟が寺の裏手にあり、本堂内には位牌が祀られている。父君の戒名には、

究竟院殿大誓教阿順乘大居士 承安二年

八月廿八日寂

とあり、母君の位牌には、

大寶院殿安誓聖壽妙養大姉 慶保二年

五月六日寂

とある。ここで不思議に思うことは、母君の法名を「聖養」と記したものである。正確には「妙養」と呼ぶべきと思う。道号の「聖壽」の聖と、戒名の「妙養」の養をとって「聖養」といったのかも知れないが、普通そんな呼び方をするであろうか。資料不足、勉強不足のため謎のままである。

また、吉祥寺は母君の命終の日を応保二年（一一六二）五月六日となっている。聖光上人誕生のその日である。難産のため亡くなられたことは確かであろうが、人によっては五日後とも、七日後とも言っている。劇的なことが好きな人々が誕生の日を母君命終の日と意図的に同日にしたかも知れない。がしかし、位牌の日をそのまま素直に信じたい気がする。吉祥寺には聖光上人自作の本尊腹帯阿弥陀如来を安置している。上人が母公報恩のため、一刀三礼散華焼香して刻まれた霊仏である。お産のため亡くなられたということが、身籠る婦人への思遣りとなり、また衆生済度の縁にせんがためと伝えられる。またかたわらに師匠法然上人と自身の像を刻み、常随給仕の思いを寄せて安置されている。当時は安産祈願の参詣者が今も絶えない。

師の名称

聖光上人の幼名は判然としない。これはしかたがないが、人々は「文殊児」と呼んだとある。文殊菩薩は釈迦如来の左脇士で獅子に乗って知恵を司る菩薩である。人並みはずれた聡明な子供であつたことがうかがわれる。九歳のとき、明星寺の僧房大日寺において、剃度の師僧妙法法師より「聖光房弁長」と授かつたので「聖光上人」や「弁長上人」と称される。尚鎮西出身であり、その教化活動は鎮西に縁が深かつたので「鎮西上人」と呼ばれている。チンジエイではない、念のため。

この鎮西上人という呼び方は、正治元年（一一九一）土御門天皇より「鎮西禪師聖光上人太和尚」という禪師号を賜つたことに始まる。また「国師」の諡号は、上人滅後五九〇年を経て、文政十年（一一二七）仁孝天皇より「大紹正宗国師」の号を賜つた。よつて「鎮西国師」または「正宗国師」とも称せられてゐる。ところでこの国師号の読み方であるが、諸氏の一致をみるために吉祥寺三十八

世故青柳英珊上人の意志を伝えて「ダイジヨウシヨウジユウコクシ」と発音されることを望む。

また、三十六歳で法然上人の門下となり、念仏生活に入つてからは自ら阿号をつけて「弁阿」と号された。後に浄土宗の正統を継がれたので「二祖さま」とも呼んでいる。その他「善導寺上人」や「筑紫上人」（古くはツクシ）などなどいろいろな呼び名がある。

お墨柿

小僧時代の聖光上人は、刻苦勉強の人であつた。あるとき机に向かつて何か書いている。師の妙法法師がのぞいてみると柿の実にいたずら書きをしていた。「弁長は賢い子だが、やはり子供は子供」と笑つていた。聖光上人は、柿の実に黒々と井桁の印を書いて、「南無虚空藏菩薩さま、どうぞ行を修め学成り遂げるこ

とがでますように」と祈誓をこめて地中に埋めたのであった。後に柿は芽生え、聖光上人の成長と共に高く枝を張り、実が成った。

その実には不思議にも井桁の墨跡すずみぎがくつきりと標しるしされていたのである。この話は「お墨柿」

の伝説として明星寺の北谷に伝えられている。しかも昭和の時代までこの柿が実を結んでいたという。筆者は昨年（平成九年）秋、当地のある真言宗の寺を訪ねた折、床の間の壺に柿が挿してあった。よく見るとその小ぶりの実には十数個すべて井桁の標しるしがくつきりと顯われている。聖光上人と直接に関係はない寺であるが、確かにお墨柿はあったのだ。その寺の奥様に柿のことを尋ねると、近所の農家よりいただいたものという。柿の品種も味もわからないが、たんなる伝説の柿と思っていたものが急に現実味をおびてきた。

彦山千日行



豊前ぶんぜんの彦山ひこやまは（一七二九年勅額を賜わり、その後英彦山ひこやまと書く）聖光上人十七歳の頃より一千日の日参をされたところである。

役行者えきぎやうが開いたこの修験道の聖地に飯塚の明星寺から通うには九里（三十六km）の道程といわれる。そこで筆者は車で走ってみた。複雑な地形で、通われた道は一部分しか判っていないのでいくつかの道を測ってみたが彦山の山腹「銅かねの鳥居」まで十一里（四十四km）あり、聖光上人修行の場と伝えられるところまでそれから三・四kmほどの道のりである。

伝記に九里とあるのは、地図上の飯塚市から彦山町までの直線距離ではないだろうか。ともかく千日の日参は人間業とは思えない。未明のうちに出発しても、帰りには夜になった。闇を縫い衣てんぐろをなびかせ、大地を疾駆する怪僧の姿。このことが噂にならぬはずはない。噂には尾ひれがつく。天道（現飯塚市南方国道二〇〇号線）には化け物が出るそう、大入道だ、のっぺらぼうだと、人の口さがないの

は今も昔も同じ。当地第一の勇者、鯰田の城主輩が谷右京は「近頃物騒な話じや、拙者が討ち取ってつかわす」と、重藤の弓に矢をつがえ、化け物今や遅しと待ち構えた。やがて星明りの中に異様な姿、引き絞られた弓の矢は唸りを立てて放たれた。「あつ」と思わず驚きの叫びをあげた聖光上人。矢は法衣の袖を縫っていた。寿命めでたし、まさしく神仏の加護、間もなく聖光上人の前に懺悔している武士の姿があった。後にこの輩が谷右京は聖光上人の庇護者となつて尽くしたという。今もこの地に「天道」「寿命」「中矢」「中屋」などの地名が残っている。なお日参の度に一本ずつ植えられた松の木があった。これを「日数の松」といい、後に「彼岸原」というようになつた。この地方には聖光上人にちなんだ地名が多い。飯塚の地名も聖光上人に由来するのであるが紙面の都合で割愛する。

善導寺の起源

建久二年（一一九二）十一月十四日、聖光上人は油山（福岡市南西、清賀上人開基、九州随一の霊場で三百六十坊を数えた）の学頭職にあつた。その頃二、三の弟子と共に草野の庄井上原（現在の久留米市善導寺町）を通られた。千歳川（筑後川の別名）の辺り筑後平野の中に、昼尚暗く樹木鬱蒼と繁つた森があつた。ここには賊が住んでいて旅人を襲うという噂。しかし聖光上人は氣にもとめず森の中の小道を通り過ぎようとされた。すると熊笹をかき分けて行く手に立ちはだかつたのは六人の盗賊であつた。眼光鋭く刀をちらつかせてわめいた。「なんだ坊主か、金めものを置いてとつとと失せろ」。弟子達はふるえあがつてしまった。しかし聖光上人は別に驚きの様子もなくおだやかな顔に深く静かな眼をして盗賊たちを見渡された。そしておもむろ

に「お前たちは物盗り渡世を致すのか、さて不憫な者共じや」、「な、なにをぬかす、ぐずぐずいいやがると命はねえぞ」。上人は「お金欲しくば有るだけ進ぜよう。しかし拙僧は金では買えぬ尊い宝を持っているのじや」。

「なに宝とな、そのようなものを持っているのなら、さあ早く出せ」。弟子たちは一体どうなるのかと案じている。賊たちは上人の底知れぬ胆力にしだいに威圧される思いがしてくるのを覚えた。温顔よりこぼれる真実の言葉に深い慈悲の心がこもっている。「その宝はな、その方たちも一つずつ胸の中に持っているのじや、お釈迦様は一切衆生悉有仏性と仰せられた。その仏性の宝こそ火にも焼けない水にも融けぬ、金よりも尊い宝というもののじや、しかしその方たちの宝は欲の皮に包まれて、輝かしい玉の光を現わさない。そうして仏性の宝玉を六道輪廻の闇に葬ってしまう。もったいないことじや。それどころかお前たちは地獄道に堕ちて永遠の苦しみ、それも遠いこ

とではないぞ。今こそ目覚める時である」。上人の威厳に充ちた情け深い言葉が、賊たちの腸物に染み込んでゆく。その時であった。森の上に紫の雲がたなびき、その中から蜃気楼のように金殿樓閣が現われ、えも言われぬ芳香が漂い、美妙なる音楽が流れてきたのである。まさに極楽浄土の奇瑞、皆驚きの眼を見張ってこの瑞祥を仰いだ。靈感に打たれ、合掌している賊達。上人は「おお、ここは仏法有縁の地じや、精舎建立の霊地じや」とつぶやかれた。六人の盗賊は上人の前に膝まづき、重ねた悪業の深さにおのき、悔悛の涙を流したのであった。後に筑後の国司兼押領使である草野永平は聖光上人に帰依し、檀那となつてこの地に寺を建てた。当初は光明寺といったが、上人が法然上人に会われた後、善導寺と改められた。

六人の盗賊は頭を剃って弟子となり、寺の建立に骨身を惜しまず働いたという。鐘堂の裏手にある六地藏は、盗賊の墓と伝えられる。

盗賊たちは人を殺めその死体を古井戸に捨てていた。その菩提を弔う意味で古井戸の上に堂を建てたので山号を井上山と名付けられた。のちにここは筑前・筑後・肥後へ念仏弘通の拠点とされた。嘉禎四年（一二三八）二月二十九日七十七歳で亡くなられたのもこの寺であった。

舎弟三明房

聖光上人三十二歳、油山の学頭をされていたころ、篠栗から八木山峠を越えて時々明星寺へ往復されることがあった。上人の異母弟三明房と歎談のその時である。それまで元氣そのものであった三明房が突然倒れ、悶絶の苦しみ、一山の僧たちは驚き、上人も人の世の無常を身にしみて感ぜられたとある。ところでその「悶絶」であるが、悶絶して死んでしまったと伝えるものと、数時間して意識を回復したと伝えるものがある。いずれが事実

か今となつては判らない。しかし聖光上人が仏教を学問として研究し、理論として理解していたが、諸行無常を眼前にして、知恵や知識でどうにもならない深刻な無常感に囚われたのではないだろうか。のちに法然上人に出会われたとき、天台の碩学としての名声も、油山の学頭という名誉も、すべて捨てて他力念仏の行者となられたのも、母との別れや三明房との別れの無常感があったからと思われる。「安心起行の要は、念死念仏にあり」また「八万の法門は死の一字を説く」と喝破される下地はここにあったといえる。

法然上人との出会い

聖光上人は、縁深き明星寺衆徒の懇請により、五重の塔（一説には三重の塔とある）再建に尽力された。この塔の本尊仏注文のため上洛されたのが法然上人との出会いの契機となったのであった。建久八年（一一九七）聖

光上人三十六歳、四条綾小路の仏師康慶の邸の一室を借り、仏像の出来上るのを待たれることになった。ここはそのうち重ねて在京八年間住まれることになる、人々は聖光庵とよび、今の聖光寺である。

洛中は念仏の声が満ち、法然上人の教えが日に日に弘まってゆくさ中であつた。法然上人の多聞広学知恵第一の評判は聞かぬでもなかったが、なぜまたことさらに念仏宗を開かれたのか。そのあたりの真意を尋ねてみたいと思われた聖光上人は、東山吉水の法然上人の庵堂を訪ねられた。この時法然上人六十五歳。

初対面の挨拶がすみ、聖光上人は「近頃は勧進をして五重の塔を建立いたしました。常日頃は念仏を行じています」と述べられると、「そうですね、唐の善導大師は起立塔寺は難行と判じ、称名念仏は正定の行として勧め給うところですよ。但し念仏の言は広く、事理は定散に通じ、義は八宗九宗に亘ります。して御



房の念仏はいずれの念仏でしようか」。法然上人の円満な人柄にお会いしたときから敬虔の念を深くしていた聖光上人は、口をついて出る法然上人の言葉に、知恵の深さ、知識の広さ確かさに驚き、非凡なるものを感じ、高い山を仰ぎ深い海を覗く思いがしたのであつた。法然上人は口をついて「今、三種の念仏を申しましよう。一つには摩訶止観にあかす念仏。二つには往生要集に勧むる念仏。三つには善導大師が立て給うた念仏です」と念仏にもその心持ちや目的によつて、三通りの区別があることを説かれたのであつた。その要点は、

一、『摩訶止観』の念仏は、行者が無漏実相の観法を修するに、妄念が起こつて観法の修行ができ難いので、止観の行を助けるために仏の加護を請うて念仏を唱えるのである。これは止観が目的で、念仏を助業とする。

二、恵心僧都の『往生要集』に説く念仏は、広く五念門に亘り、観念称念に通ずるものである。しかしどちらかといえば観念の念仏で

ある。

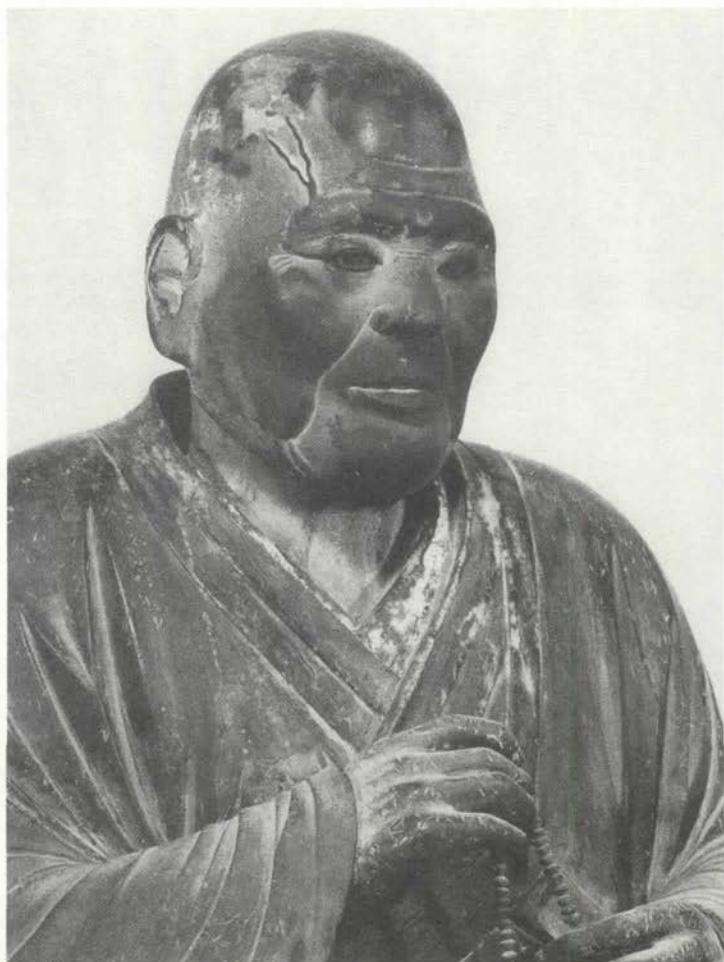
三、善導大師の念仏は、正助二業を分別し、五種正行の中では、前三後一を助業として口称の本願念仏を決定住生の行とするのである。これこそ如来の本願に適う念仏であつて、念仏それ自体に、独立絶対の価値ある念仏である。

と、法然上人の説明は微に入り細に亘りその一言一句は深く聖光上人の胸を打った。説くこと諄々として倦むことなく、聞き入る聖光上人。昼の二時から夜中の十二時まで、なんと長い法談であつたことか。聖光上人は、まさに眼から鱗が落ちる思いであつた。法然上人の崇高な靈感にうたれ、勢至菩薩か生身の如来かと歓喜の涙を流された。釈尊の説法の場にのぞみ、善導大師の教化に会ふ思いがして、凡夫往生の道は称名念仏の外なし、と永年の疑念が晴れてゆく聖光上人。これまで築いてきた地位も名誉もさりと捨てて、法然上人の弟子となられたのである。やがて師

の後を継ぎ二祖様と呼ばれることとなる運命の出会いであつた。

善導像の由来

建暦二年三月十三日、法然上人滅後四十九日のお逮夜の晩のことであつた。聖光上人は彦山の道場で不思議な夢を見られた。「われは唐の沙門善導である。いま博多の津に渡つてゐる。汝速かに迎え取るべし」と告げられた。夢とも思えぬ明瞭さに、すぐ旅仕度を整えた。出立のその時、彦山の座主藏慶も同じようにこの深夜の旅仕度、聞けば同じ夢を見たという。二人して博多へ急いだ。およそ六十kmの道のり。博多にほど近い千代の松原で一人の出家に会われたが、心急ぐまに目礼をしてそのまま行き過ぎた。丁度この日に宋から帰朝の船があつた。船主の妙典に事の次第を物語つて、「それらしいお坊様はなかったか」と尋ねると、妙典は不思議そうに瞳を輝かせて



話でした。「確かに宋を出帆のとき一人の出家を乗せました。そして玄界灘の真只中にさしかかったとき、時化に遭い、船は木の葉のように揺れ、生きた心地もしません。逆巻く怒涛に船はまさに転覆せんとしたその時、かのお坊さまが、船板に南無阿弥陀仏と墨痕あざやかにしたためて海中に投じ、皆の者念仏を称えよ！」と叫ばれます。皆一心にお念仏をいたしました。みるみるうちに波も治まり、お蔭さまで命拾いをいたしました。そのお坊さまは向こうの松原へ行かれましたが、お会いなさいませんでしたか。これを聞いた上人と藏慶、「さてはさっきのお方が善導さまの化身であつたか」と来た道をとって返すと、松の木蔭に一体のお木像が厳然と在します。礼拝し、像を背負い博多の善導寺に至り、ここへ上人は百日間の説法をされた。

この寺に石の地藏菩薩がある。これは船主の妙典が善導像来朝の奇瑞から聖光上人に帰依して熱心な念仏信者となり、その時の船の

碇石に地藏を彫刻して奉納したものという。

その後善導像は筑後の善導寺（現大本山）に移され三祖堂に祀られている。（国指定重要文化財）、また浜辺に流れ着いた「船板の名号」は善導寺（筑後・大本山）に寄進された。この船板名号は航海安全・交通安全の守り本尊となつたのである。

師と弟子

師僧法然上人より間違いなく、専修念仏の教えを受け継がれた聖光上人であつたが、その性格や路線に微妙な相違が見える。

聖道を捨てて浄土に帰する法然上人独自の宗風は、聖光上人の代になると聖浄兼学の学风をとられた。教団を引き締める必要に迫られたという当時の時代背景がある。法然上人の門下に異説、異流、邪義邪説をとるものも続出したため、しかたのないことであつたと思われる。

また、法然上人は比叡山を下り、寺を出て在家形態で宗門を開かれた。しかし聖光上人は法灯護持、伝導教化のために寺院形態をとられた。俗に四十八カ寺の建立をされたと伝えられるが、法然上人は一寺も建立していない。「予が遺跡は念仏の声するところすべて」としている。念仏弘通の態度に自ら特色があった。法然上人は生活様式はどうでもよいこととであり、念仏申さるるか否かが問題であった。従って寺院建立ということは念頭になかった。しかし聖光上人は、教団堅持、破邪顕正には拠点を定め、教化活動の核としての「寺」が必要だったのであった。

また、聖光上人は自行を厳粛にし、別時念仏を推め「見仏」を説かれた。法然上人も見仏はあったのであるが伝記にもそれほど多くは出てこない。さてその「見仏」だが、四句の偈に「往生浄土見尊体」とある。この「見尊体」のところを「尊体を見たてまつらん」と読む人と「見たてまつらん」という人がある。前者は、この世で肉体のこの目で見るというニュアンスがある。後者は往生浄土のちにお会いする、お目にかかる、対面するという色合が濃い。聖光上人の場合、前者にウェイトがあるように思う。どちらが良いとか悪いとか、正しいか誤りかという話ではない。

(大本山善導寺平成企画室室長)

一分間で得られる知恵

ドアをあけよう！

「世の為・人の為に役立つ人間になりたい」

きれいな心を持ち、そんな願いを抱いて努力している青年がいました。神様はそんな青年をとても頼もしく感じ、いつも天国から温かなまなざしで眺めていました。

青年は人の力になれるよう、真面目に日々を重ねています。だけど青年はいつもこんな風に感じています。

「駄目だ、駄目だ。まだまだ勉強も経験もたりない。」

こんな自分じゃ、とても人の役に立てやしない。もっとたくさんさんの知識を身につけてから社会へ出ていこう」

クリスマス・イブの晩、青年は眠りに落ちると、不思議な夢を見ました。自分が天使になって、自由に空を飛び、高い空から下の世界を見下ろしている…。そんな夢です。

——天使になった青年は、あるデパートを覗きました。

どうやら今日はクリスマス・イブのようです。

身なりの良い、いかにも教養のありそうな紳士が、両手にいっぱいプレゼントを抱えています。かわいい熊の縫いぐるみや、かっこいい車…。これからこの紳士は知人が営む孤児院へ、その贈り物を持って出かけようとしているのです。こんなに素晴らしい贈り物を貰ったらみんなどれだけ喜ぶことでしょう。

けれどもこの紳士は、抱えた荷物で両手がふさがり、ドアの前で立ち往生をしています。

その脇を一人の少年が駆け抜けて行きました。少年の手には、両親と飼い犬への、ほんのささやかなプレゼントが入った小さな袋があるだけです。少年は、あいている片方の手でサツとドアを開けると、家族の待っている家へ一目散に駆け出しました。みんなが喜んでくれる様子が目に浮かび、思わず顔がほころびます。

道路を横切ろうとした少年は、渋滞の往来を渡れずにいる一人のお婆さんに気がつきました。少年は何のためらいもなく、荷物を持っていない方の手でお婆さんの手を引っ張ると、「お婆さん一緒に渡ろう！」と言って一緒に道路を渡り、「じゃあ、気をつけてね。」と言いつつと、また軽やかに駆けて行きました…。——

一晩が明けてクリスマスの朝を迎えました。目を覚ました青年は、夕べ見た不思議な夢を思い出しながら、静かにひざまずくと、両手を組んで神に祈りました。

「神様、今のままの私の、この未熟な力を、どうか人のために使わせて下さい。」

青年の祈りを受け取った天国の神様は、本当に嬉しそうに、ニッコリと微笑みました。実は昨日青年が見た夢は、純粹な心を持つ青年への、神様からのクリスマス・プレゼントだったのです。

(群馬・服部順空)

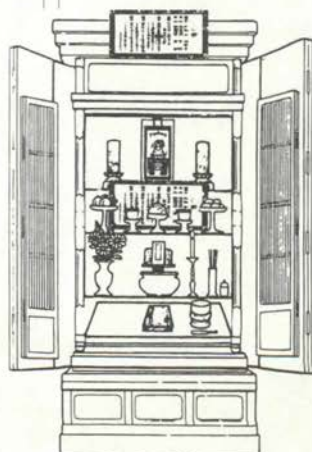
好評
発売中
!!

お寺から檀信徒へ

宗旨布教額

家の仏壇の上に掛けるものです。
菩提寺とその宗旨がいつも
ひと目で明確になります。

数をまとめて御注文下さい。



定価：大（32.0×18.3cm）735円／小（27.3×14.2cm）420円

注文・問合せは
法然上人鑽仰会

〒105 東京都港区芝公園4-7-4明照会館内
電話：03-3578-6947／FAX：03-3578-7036

連載

無明抄 2

選擇集と
起請文

秦
恒平

2

漢文を、日本風に「返し読み」して行くのが、高校生時分には知的なスリルで得意技だった。だが、あれは一種のサーカスに過ぎず、下から上へ上へと引つ繰り返して行くことにばかり意識を消費し、文章の意義は得にくくなる。漢文がのみこめてくると、いつそ白文を「お経読み」にした方が、およそ大意を逸しなくていいと、いつしか気づいた。

浄土三部経をわたしは岩波文庫で読み始めた。小経だけに「お経読み」のふりがながしであり、大経、観経にふりがなはない。三部とも下段に訓みおろした文章があげてあり、べつに原典の現代語訳もついている。くり返しくり返し、大経、観経の白文のほかは、すべて順ぐりに何度も読んだ、それも「音読」が常であつた。毎夜の、死者たちへの「供養」

にも再三読んだし、人の安穩を祈ったりわが気持ちを静めたいときも、始終音読した。阿弥陀経はかならず全部を一度に読み上げた、それともたいいは「お経読み」に誦んだ。

そのうちに「お経読み」のいわば訓み癖というか、慣用読みのようなものが自然に頭に入った。「爾時」とあれば「にじ」と読み、「若有」とあれば「にやくう」と読む。これに慣れれば、じつは大経も観経も、ふりがな無しにおよそ読めるようになる。仏家の慣例に若干添わぬところもむろんあろうけれど、要するにそれで大意のとれないことはない。漢文を「返し読み」などするより、端的に、胸に納まってくれる。

思えばこういうことは、幼い日々、家の「仏壇」に好奇心を放ってしきりと仏界の探索をこころみ、大きい字の総ルビ般若心経に行き当たって盛んに音読していらいの、ま、稽古——も、ものを言つたにちがいない。般若心経は、だが、読めようが筆記しようが大人で

も大意をすら把握できない。それにくらべれば浄土経でも法華経でも、おおよそ察しながら「お経読み」ができる。むしろ日本文に訓み下ろした文語文よりも、いつそ端的に経意が心にとびこんで来る。

そうは言いつつ、法然上人の選擇本願念佛集ほど「構造」のある「論議」の本になると、「お経読み」ではやはり手に余り、これは、もっぱら和字選擇集で愛読した。大正十五年四月刊の日本古典全集第一回配本の、「非売品」とはあるが古本屋で買った、ハードカバーの『法然上人集』に収まっている。やや幅のある文庫本型で、選擇集の原文もむろん入っている。一枚起請文、二枚起請文は本文にも組まれ、べつに、知恩院蔵原本の影印も付録に挟んである。

いま、わざと「構造」と「論議」という指摘を強調したのは、まさにそれが我が第一印象なのであった。へんな譬えていえば、高校生の頃の定期試験のまえになると、わたしは慎重に各課目の「まとめ」を作って暗記していたが、その「まとめ」に、選擇集の構造は似ていて、おそろしいほど上手に「まとめ」たものだと感嘆した。多聞一だか智慧一だかさすがに源空サンの把握は強烈やなあと感じ入った。

余談だが、把握がつよければ表現もつよく確かになる。逆だと、これも逆になる。芸術でもそう、論議でもそうだと思う。選擇本願念佛集の分かり良さは、まず何よりもこの把握と表現の卓越に多くを得ている気が、今でも、する。

法然の述作に、いかにも「知的に」接近した印象を自分自身で再確認しているような文

章の運びになっていて、いくらか気にもなり、しかし、いくらかそれはやむを得ないとわたしは今も思っている。浄土宗のもっとも基本の宝典といえるこれほどの選擇集を、たかが大学生ぐらいな若者が知的接近の可能な「分かりいい」構造の論議などというのは、たいへんな僭越たいへんな傲慢に思われ兼ねない。だが、以来三十年、四十年経て印象はあまり変わっていないのは何故だろうか。じつは、そういう接近の仕方しか、やはり若い時ではできなかった。その意味ではむしろこれは初学者への学習を誘っている本だ……と、思っている。法然上人その人の執筆の姿勢に、さっきも謂う、ものの「まとめ」的なものがあったことは、大きな誤解をおそれながらも敢えて申せば、「選擇」の二字にすでにうかがえて、あながちわたしの独断ばかりではあるまいと思う。方法が信心を表現している。

ではそんな「まとめ」から、知的レベルのはなしでなく、もっと深い感動が得られなかったのかというと、とんでもない。わたしは、低声で朗読しながらも何度もぐツと来て涙ぐむことがあった。「ありがたい」という常套語は思いつけなかった、そうではなくて「うれし」というごく日常の率直な感情ゆえに、わたしは選擇本願念佛集を読みながら、繰り返し読みながら、決まったところで、また前には感じなかったべつのところで、何度もぐツとこみあげた。そして、おそらくは、その箇所を行文で以て指し示してみてもあまり皆さんを感動させないだろうと思う。言葉の背後を流れている、奔流のように走っている法然上人の感動に、信仰に、不動心に触れて、それが「うれし」くて泣けてきたのである。露わに、また率直に言えば、だが、わたしは選擇集にはほとんど執着していない。だが

ら智慧第一のお上人の「まとめ」の卓抜な確かさに学んで、受け売りしたいなどと思つたことがない。その気になれば、こんななその為し易い本はない、論議はない。ほとんど数学の本かのように、論理学の本かのように、堅固な構造もつていて揺るぎがない。だがその価値は、それら統べての背後に湛えられ、基盤を固めている「信」の豊かさ美しさ確かさにくらべれば、法然その人の抱いていた阿弥陀佛へ回向されていた「うれしい」信頼、無垢の無償の信頼にくらべれば、——たいした問題ではない。

法然上人は、それを分かつておられたから、或いは後生の惑いを危惧されたから、一切の論議や構造の上を大きく橋に渡し、一条の端正な同じ橋——大橋、小橋——を用意された。それが一枚起請文であり二枚起請文であつたと思う。わたしは、どっちをと問われれば躊躇なく選擇集ではなく、これら起請文、それも、より簡潔に完結している『元祖大師御遺訓（一枚起請文・金戒光明寺藏）』に縋りたい、帰依したいと願うのである。

唐土我朝に、もろもろの智者達の、沙汰し申さるる観念の念にもあらず。また学問をして、念のころを悟りて申す念仏にもあらず。ただ往生極楽のためには、南無阿弥陀仏と申して、うたがいなく往生するぞと思ひ取りて申す外には別の仔細候わず。ただし三心四修と申すことの候うは、皆決定して南無阿弥陀仏にて往生するぞと思ふうちにこもり候うなり。この外に奥ふかき事を存ぜば、二尊のあわれみにはずれ、本願にもれ候うべし。念仏を信ぜん人は、たとい一代の法をよくよく学すとも、一文不知の愚鈍の身になして、尼入道の

無智のともがらに同じうして、智者のふるまいをせずしてただ一向に念仏すべし。

我が家のあった新門前通を東へ、知恩院の境内に入つてすぐに華頂幼稚園があり、前庭に、合掌し端然と正座した美しい稚児の銅像が建っていた。勢至丸という名の、それは法然上人の得度以前の肖像であると、だれが小さかったわたしに教えてくれたらう、教わらなくてもそう書いて説明がしてあったのかも知れないが、そのころのわたしは、法然とも源空ともなにももちろん知りしなかった。ただ、なんとも美しいお子やなと、惚れ惚れした。合掌の姿なのも、ただごととは見なかった。「信」「帰依」——いずれは覚えたであろう言葉や文字の貴くさし示すにちがいない意義を、わたしは、あの銅像からもう察していたといえは言い過ぎだろうか。

法然上人の御一代にくわしいわたしではない。まして生立ちや少年時代のことは、檀徒ならだれもが知っている程度しか知らない、知ろうと努めたことすら、ない。あの銅像がほんとうに法然少年の姿であるなら、わたしには、あれだけで法然上人のことは足りた気がする。ほかに何もわたしは必要とはしなかった。菩提寺のご住職からは、宗門の折々の行事についてお報せがあるし、重々しい儀式についてもお報せを頂戴するが、今は遠方にはなれて暮らしていることもあり、失礼続きでとてもほめられた檀家ではない。京都から引き取った父を叔母を母を、この十年の間に、みな九十歳すぎて相次いで東京で見送った。法事はいちいち京都に帰って勤めてきたが、それとてもわたしは本質的なこととは考えて

いない。三人の位牌はわたしたちの日々の暮らしのま真ん中に守られていて、日に何十度となく前を通るつどわたしは会釈している。それも日ましに心をこめて立ちどまり頭をさげている。他にとくに特別にすべき作法をわたしは持たない。とくに父のため母のため叔母のためといったことは、いっそ考えまいとしてきた。「南無阿弥陀仏」に尽くされていると法然上人は「確信」されていたのなら、法然さんの究極の教えは「一枚起請文」に尽きている。その余は「助」で「雑」であろうと、いささか白状の気味も加えて言うなら、そう都合よく考えてきた、いや、思い込んで、思い込む事にきめてきた、のである。

はだ こうへい

昭和10年、京都市生まれ。同志社大学美学芸術学科卒。昭和44年小説「清経入水」で第5回太宰治賞受賞。平成3年東京工業大学教授、平成8年同退職。現在、日本ペンクラブ理事、日本文藝家協会会員。著書に「みこもりの湖（つもの）」「冬祭り」「京都感覚」「羅山」「死なれて・死なせて」など、エッセイ、評論集、小説多数。すべてを「秦恒平・湖の本」に収め、継続刊行中。

FORUM
浄土の広場

「浄土の広場」では
読者の自由な参加をお待ちしています。
詩、エッセイ、短歌、俳句、川柳、書評、映画評、
TVウオッチング、紀行文、その他創作等。
あるいは会員各寺院での催しの告知、報告など。
どしどし編集部にお寄せ下さい。

平家正節による

平家物語 通し上演

前田流平家琵琶

橋本敏江

主催・平家琵琶鑑賞会

東京・貞源寺
藤木芳清

今回、平家物語巻一の中でもっとも長い物語、【祇王】を上演します。

天下を手中にした清盛の得意絶頂の姿が描かれますが、同時に、【祇園精舎】で語られた、「樂しみをきはめ、諫をもおもひいれず、天下のみだれむ事をさとらずして、民間の愁ふる所をしらざしかば、久しからずして亡びにし者ども成り」の一節を思い出します。

佛御前の出現により心変わりして祇王を追いつ出しておきながら、その佛御前を樂しませに來いという清盛の理不尽な要求に対し、年老いた自分を都で過ごさせることが現世・來世の供養だという母親の命に背くまいとして屋敷に向く辺りからその色合いが濃くなつてきます。

佛御前の為に今様を歌うようにいわれて、祇王は、「佛も昔は凡夫なり 我等も終には佛なり いづれも佛性具せる身を へだつるのみこそかなしけれ」と泣きながら歌います。佛御前と自分とにどれほどの違いがあるのだろ

うか。それを別け隔てするとはなんと悲しいことなのかと歌いながら、その後の物語を暗示しているようです。その文章の構成の見事さと同時に、釋迦如來の物語や阿彌陀如來出世の話、或いは凡夫往生のことなどが何気なく出てくることに驚かされます。

屋敷から帰って、あまりの仕打ちに身を投げて死のうという祇王・祇女姉妹に、そのよいうなことがあろうとも思わずに言い聞かせて屋敷にやったことが心苦しい。だが、二人の娘に先立たれば年老いた自分も後を追うことになる。それは親を殺すという五逆罪を犯すことだから、お前が死んだ後も往生できずに地獄の闇に沈んでしまうことが悲しいという母親の言葉に従い、姉妹で出家して尼になり、嵯峨の山里に庵をむすび、後世の安樂を願って念仏三昧の生活にはいった後を追うように、母親も尼になり、一向専修念仏の生活を始める。その後、祇王の姿に自らの運命を感じて尼になった佛御前が訪ねて来る。そこ

第三回公演

五月十日(日)

三時半会場

四時開演

東京・笹塚

清岸寺

で祇王が、自分たちは恨みや嘆きからの出家だが、その様なこともないあなたが、僅か十七の歳で穢土を厭い深く浄土往生を願うとはまことの大道心、あなたこそこの上もない佛道への導き手です。一緒に浄土往生を願いましょう。と、念佛三昧の日々を送り、後先はあったものの、四人は皆往生の本懷を遂げたという。

それにしても、この物語はどういう意図で書き加えられたのでしょうか。【祇園精舎】の章でこの物語の基調が佛教であることが予め示されていますが、殊にこの【祇王】は佛教説話といってもいいと思えるほどです。

特に興味を引かれるのは、祇という字は、広く神を指す言葉ですが、くにつかみであり、地の神であり、うじの神です。その王ですから、神そのもの。妹の祇女はいわば巫女でしょう。それを追いつくのが招かれもしない見参者の佛御前。その出現により疎んじられ姉妹が、現世をはかなんで来世の往生を願い念

仏三昧の日々をおくつているところへ、佛御前がやってくる。それに対し、祇王が、自分たちは恨みや嘆きから往生を願って出家したが、あなたは純粹に浄土往生を願っている。あなたこそが私達の導師だという。

後世、平家物語にこの一章を付け加えた人あるいは人々は、どのような意図を持っていたのでしょうか。それまで日本人が信じていた神々では、源平の戦で滅んでいった人々を救う力はなかったということでしょうか。この問題に関して、私はまだ結論を得ません。

しかし、様々な解釈ができる、意味深長な話であることは確かなことですし、【祇王】が成立した頃には、すでに佛教が哲学や思想としてではなく、人々を救済する、すなわち宗教として定着し、広く信じられていたことを示していると思います。

もし、私達が、この物語に涙し、四人の浄土往生を安堵するならば、その杜氏の人々と何らの隔たりはないということでしょう。

亀鳴く

浄土俳壇

風車天地無用の荷がひとつ

刑罰として青き踏む甘く踏む

泣きながら生まれて人の花衣

箱庭に花は動かず目黒川

ひと花弁いなりにのせて川のぼる

芦名無縫（会津若松市）

近藤十四郎（文京区）

自生するタンポポの花目に映える
芽吹きどき野に咲く花の可憐さよ

花ざかり老婆は今日を支出する

花けぶる金属バットの使用法

鬼ひとり水の匂いの桜かな

てのひらになじみし志野の新茶かな
散椿つばき散華の相なりき

春はやて五色の佛旗ふきぬける
いかなごの春しばしの季をあきなえる

吉河瑞章（足立区）

大畑 等（船橋市）

松本厚子（町田市）

山本美代子（姫路市）

鬼瓦子雀に宿貸してをり

背の順の登校班や花の雨

枝々に御神籤吹かれ芽立ちかな

秘仏まで千の石段山笑う

酔うてきて花の輪郭薄くなる

花運河ただ行き来する犬の足

満開の一株ごとに宴あり

花びらのくると舞いてチマチヨゴリ

吉田ゆきゑ（江戸川区）

佐藤雅子（上山市）

啞々砂（鳥羽市）

井口栞（大田区）

話せないことも話せる花の下

太陽のゆりかごとなる春のバス

今年から狂いもせずに桜散る

春愁や誰も食べないゆで卵

水底でずっと待つてる桜餅

水底に桜が届く抽象画

囀りのあふれこぼれて耳の穴

生きすぎて噂の種の亀鳴ける

井口吾郎（大田区）

秋谷菊野（東葛飾郡）

長谷川 裕（目黒区）

児玉仁良（入間市）

●「J」ばずる

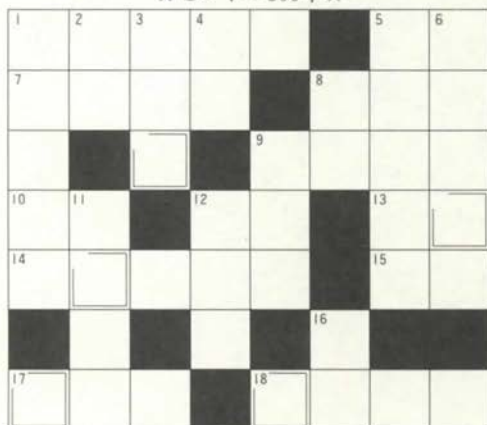
3月号の答えは『シャオンカイ』でした。応募総数81通のなかから栄えある当選者は次ぎの方です。

青森 菊池 愛 広島 高橋 粹月 東京 上坂 桂子
茨城 田中 明 埼玉 柴田 康司

答えがわかったら、『J』ばずる係までふるってご応募下さい

抽選で五名の方に記念品を差し上げます。
締め切り 6月15日

★ヒント・800年★



〈タテのかぎ〉

- ①端午の節句に空を泳ぐ
- ②サイパンの隣にある島
- ③新聞の〇〇〇を飾る
- ④水辺に自生するイネ科の多年草
- ⑤行方を暗ますこと
- ⑥仏教の世界で、中心にあるという高山
- ⑧父母の兄弟
- ⑨アジア熱帯原産で根は黄色でカレー粉などの染料として使われる薬草
- ⑪「人生気楽にいこう!」とは〇〇〇〇家の弁です
- ⑫先輩のシゴキに〇〇〇
- ⑬鯉はこんなところでも登るとか

〈ヨコのかぎ〉

- ①ローマ時代の野天円形闘技場
- ⑤頭髮をとかす道具
- ⑦イタリア料理を俗に
- ⑧病人、乳児が飲む飯の炊き汁
- ⑨町村の人々が共通でまつる神
- ⑩出世魚のひとつで最後はトドと呼び名が変わる
- ⑫大阪名物〇〇焼き
- ⑬なくて七〇〇
- ⑭元禄時代、柳沢吉保が別邸に造った名園
- ⑮極楽浄土の池に咲く華、〇〇ゲ
- ⑰「当館の食事は山海の〇〇〇が盛たくさんです」
- ⑱子供たちに人気の給食メニューはカレーと〇〇〇〇〇です

事務局便り

● J・FORUM（浄土フォーラム）

ご好評を頂いております、皆様のためのコーナー（J・FORUM）。毎月、投句、投稿を頂いておりますが、編集部ではもともとたくさんの方の作品を、お待ちしております。短歌や俳句、書評随筆や詩、身近な出来事や情報など、先的要領でどんどんご応募ください。私たち編集部では、読者の皆さんと一緒に、この「浄土」をより楽しく、すばらしいものにしていきたいと考えております。

1 随筆・歌など…四百字詰め原稿用紙十枚以内
2 俳句・短歌・川柳など…四首まで

3 その他、本誌の体裁や掲載記事に対するご意見やご感想など、何なりと気軽に聞かせ下さい。

……適宜

タイトルは自由です。投稿は随時受け付けておりますが、採否に関しては編集部にご一任下さい。また、原稿は返却いたしませんので必ずコピーをおとりの上お送り下さい。採用分については記念品を進呈いたします。

● 新規会員紹介

山梨	山梨	山梨	山梨	山梨
甲府組	甲府組	八代組	山梨組	甲府組
浄慶寺	生福寺	法蔵寺	浄興寺	源光寺



ブランコに腰掛け気づく歳の数

岱潤

陽気のいい季節、いつもと同じ道なのに、なぜか心がすがすがしい。時間に余裕があることを確認して子供公園に立寄り、ブランコに久しぶりに腰掛けたとき、そのあまりの低さに驚いてしまった。こんなことをするのは、本当にしばらくぶりなのだとつくづく思った。

そういえばこの間、総合研究所の選択集の勉強会で、この「しばらく」の言葉が議論的になった。御存じのとおり十六章段に出てくる有名な三選択のところである。

「それ速かに生死を離れんと欲せば、二種の勝法の中には、しばらく聖道門をさしおいて、選んで浄土門に入れ……」

ここで登場する「しばらく」は、漢文では「且」という字で書かれているので、法然上人はしばらくと読んだかどうかということがまず議論の始まりだった。ある先生は、しばらくと読むのは間違っているとおっしゃり、又ある先生は「とにかく」と読んだらいいとまでおっしゃったが、教学的にはどうも「しばらく」が定説だそうである。

では「しばらく」とはいつまでなのか、もちろん浄土に住生するまでと理解すればいいようだ。仏教は成仏を目指すことが目標であるわけだから、この末法の世を離れ、極楽に住生してから修行して、成仏できるよろこびを知るのである。

現代人と比べ昔の人は、はるかに長い時間の単位でものを考えていたのではないだろうか。死後の極楽を具体的に考えられると、この世の絶望も一時期の我慢として過ごすことができる

(長)

編集スタッフ

長谷川岱潤

斎藤晃道

村田洋一

石上俊教

佐山哲郎

間川彰道

編集顧問

大室了皓

浄土
八百円

六十四巻五・六月合併号 領価
年会費六千円

昭和十年五月二十日第三種郵便物認可

印刷——平成十年四月二十五日
発行——平成十年五月一日

発行人

真野龍海

編集人

宮林昭彦

印刷所

株式会社
シーティイー

発行所

法然上人鑽仰会

〒二〇五〇〇二一

東京都港区芝公園四一七 四明照会館内

電話〇三(三五七八)六九四七
FAX〇三(三五七八)七〇三六
振替〇〇一八〇八八二一八七

Cima, Cima.



ここにニッサンの最高があります。新しいシマ

シマがあることで、あなたの生活にどんな感動と満足が生まれるだろうか。私たちは今、大きな自信を持って話します。技術と性能、安全性に妥協せず、あらゆる状況で、「これシマ」の乗り心地を楽しんでください。あなたがシマに理想として求めていることが、このどのシマでも実現できます。すみずみまで「コッセン」の最高にふさわしい仕上がり。風格と脚感。ひとたび走り始めれば、そこにはもっと深い喜びが待っています。シマノ/シマノ/あなたの熱い責務の声が聞こえそうです。日本車初、全SRSサイドエアバッグ標準装備。運転席・助手席に装着。両面衝突時の胸部に力強い衝撃を吸収します。大きく進化した4.1L V8エンジン搭載「シマ」のために実現。優越感あふれるベックが、滑らかで力強い加速を生み出す。



Photo シマ 4HLV スピードブレイクデータレーシング用シボラックス(P)「#4S9-特別発表車」本車シートはメーサーオプション ●全長4970×全幅1820×全高1445(mm) ●エンジン V8 4130cc
TWINCAM●最高出力270ps/5600rpm(ネット) ●最大トルク 38.4kgm/4000rpm ●軸重前・后手前SRSS(サイドバイサイド) ●デュアルエアブル ●デュアルリア・デュアルSRスエグメント ●ABS(アンチ
ロックブレーキシステム) ●V-TCS ●電子制御TVレベリング ●連転駆動方式のオートビギンアップシステム ●一部特許に基き、シマのみの運用は、近頃のローカルレースやイベント各場域に於ける

スピードおさえて、いい運転。
シートベルトをしめましょう。

LIFE TOGETHER
 **NISSAN**

人間のやさしさをクルマに。

法然上人鑽仰会・発行



これが、
ビヤホールの喉ごし。



ビヤホールの喉ごし

サッポロ生
黒ラベル



ビールは、20歳になってから。あきかんはリサイクルへ。①

●ご協力をお願い。自動販売機による酒類の販売は午後11時から午前5時まで停止されています。 サッポロビール株式会社